
東方 永葉抄 ~ 俺の主は月の姫 ~

黒髪万歳！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 永葉抄 俺の主は月の姫

【Nコード】

N3470W

【作者名】

黒髪万歳！！

【あらすじ】

お菓子好きで、自傷癖がある……霧島きりしま 幽真ゆうまは、目覚めたら東方の世界にいた。
「お菓子を操る程度の能力」を持った自傷癖持ちの主人公が、のんびり幻想郷で暮らす……そんなお話です。

プロローグ、竹林脱出劇（前書き）

初めての作品で駄文です。

キャラ崩壊や独自解釈もあります。

でも、軽い気持ちで読んでくれると嬉しいです。

感想など書いてくれると嬉しいです！

では、お願いします！！

プロローグ、竹林脱出劇

目が覚めたら、竹に囲まれていた。

……あれ？ 俺、なんでここに居るんだ？

たしか、こういった場所を……

「……竹林、て言うのかな？」

おかしいなあ……なんで、竹林に居るんだ……？

俺は、確か……。

「死んだはずなのに」

プロローグ、竹林脱出劇

夜遅くなのだからか、周りは暗く、気味が悪い。
でも、俺は恐ろしく冷静だった。

「普通は、驚くとか慌てるとか……するよな」

死んで、目が覚めたら竹林に居た。

普通なら、狂ってもおかしくないよな？

……まさかの、夢だから慌ててないとかのオチじゃ無いだろうな。

とりあえず、地面に座り込んで……ここに居る前の事を思い出すか
……。

俺の名前……霧島きりしま 幽真ゆうま。

ピッチピッチの17歳。

家庭教師のバイトもしてる。(けっこう、頭良いんだぜ?)

顔立ちも、普通で前髪が目隠れるくらいに長いのが特長(俺の趣味)

身長は、175センチ。

特技は、家事とお菓子作り。

休日は、ケーキ屋めぐりに行くほどにお菓子は大好き。

俺は、お菓子のためなら何時間でも行列に並ぶ男

そして、俺は……あることを毎日のようにしている。

自傷行為……つまり、俺には自傷癖があるのだ。

始めて自傷行為をしたのは、12歳の時だった。

最初は、軽い気持ちで……指を軽く切って切り傷を作る程度だった
んだけどさ。

手首は勿論、足も腕も顔もやった事がある。お陰で、体は傷だらけ
……基本長袖着ないといけないし、傷だらけの肌は絶対に見せられ
ない。

わざわざプールがない高校にした位だ。

とりあえず、体をチェックしてみよう。

着ている学校の制服は、特に問題はない。

体も大丈夫そうだけど……

「……あれ、傷がない」

手首や足を見てみると……日々自傷行為して出来た傷がない。

「……まあいいや、どうせすぐに、傷を付つけるしな……なんだっ
ていいや」

あれ、そう言えば、どうやって死んだんだっけ？

死んだて解るのに、死因がわからない……？

なんか、飯は食べたけど何を食べたか思い出せない感じ。
やっぱり、事故か自殺の2択かな？

自殺となると、俺の場合……

やり過ぎて出血多量？

それとも、痛みによるショック死？

飛び降りて死んだとか？

拳げ句の果てに、切腹して中身をぶちまけた？

まあ、事故だろうが、自殺だろうがなんだっていいや。

「今、俺は生きてるしな」

これ、スツゴク重要だぜ？

何事も結果が、大事だと思うんだ。

「まあ、うだうだしててもしょうがないか……」

俺は立ち上がり、竹林からの脱出を試みた。

「ふむ……迷ったか」

まあ、即迷った。

いやあ、まいたなあ。

完璧に同じところをグルグルと回ってる。

大体、どれくらい歩いたっけ？

「ダメだ、ダメだ。一回、休憩しよ」また、その場に座り込む。

座ると、疲れが押し寄せて来る上に……腹の虫がなった。

「疲れた、はらへった……」

空腹で、もう立てない気がする。

空腹で辛いし……眠い。

ゲームだったら、ステータスがた落ちの状態だ。

もしかしたらさ、死ぬんじゃない？

このまま、道に迷い続けて、遭難して、餓死して、獣に食べられて、腐敗して、虫が沸くんじゃね？

「嫌だ！ そんなつまらない死に方は嫌だ！！」

俺の理想は、好きな人に愛されながら刺されて死ぬことが理想なんだよ！

そんな、惨めで不幸せな死に方してたまるか！！

……こうなったら、絶対に抜け出してやる！！

頬を叩いて気合いを入れ直し、俺は立ち上がり、また歩き出した。

「……ん？」

歩き出すと……ポケットに違和感を感じて手を入れてみた。

「あ、飴玉だ……」

さっきまで、何もなかったはずのポケットには、ミルク味の飴玉が入っていた。

「なんで？ ……まあ、ありがたいからいいや」

俺は、飴玉を口に含む。

甘いミルク味が口に広がり……元気が出た気がする。

(そう言えば、昔にもあったな……こんなこと)

場所は、竹林じゃなくて隣町で……今みたいに、お腹が減って歩き疲れて……どつかのベンチで休んで、寂しさを紛らわすために、好きな絵本をひたすら読んで妄想してたな。

内容は、お菓子を操るピエロの話だった。

とっても、綺麗にお菓子を操っていた。

「俺がそのピエロだったら……今、お菓子を山ほど食べられるのにな」

そう呟きながら、歩く。

昔は親が探してくれて、すぐに助かったけど……今は探してくれてる人はいない。

座って、妄想してるだけじゃダメだろ？

……自分で歩くんだ。

(不思議な飴だな、気持ちの前向きになった……まだ頑張れる！)

動けなくなる前に……この竹林を抜きたい。
絶対に、生きてやる。

俺は自傷行為はするけど、死にたい訳ではないんだ。

プロローグ、竹林脱出劇（後書き）

読んで、下さってありがとうございます！

始まりはこんな感じですが、これからコメディの成分は多くなります！！

これからも頑張ります！

第一話、希望の蛍の光（前書き）

では、第二話始まります。

コメディー成分は少し多めに……

第一話、希望の蛍の光

ベタだが……目が覚めると、知らない天井だった。

「うう……。」

とりあえず、起き上がって目を覚ます事にした。

……夢だったのか？

いや、違う……俺は確かに竹林で……。

そうだ……思い出した。

「なんとか、竹林から抜け出したんだよな」

あの竹林での出来事を思い返した。

第一話、希望の蛍の光

「くそっ……見当たらねえ」

俺は出口を探して歩き続けた。

「まだ、朝にならないのか？」

明るくなれば、道が解るかもしれないが、朝まで持つ気がしない。

竹林の闇をひたすら突き進む。

今、座り込んだらそのまま立てなくなるほどに、精神的にも限界が近づいていた。

「せめて……食べるものがあれば……」

一樣、キノコは生えているがキノコを無闇に食べると危険だと言うことは、よく知っている。(小さい頃に、毒キノコを試食済み。

奇跡の生還を果たしている。)

どっかの赤い服の配管工じゃないんだ、毒キノコくっつけて体が縮むなんてもんじゃ、すまねえからな!!

あの臨死体験は思い出しただけで、眠気が覚めるぜ……。なんとなく、ポケットに手を突っ込む。

「……あれ？ また……またか？」

ポケットの中に、またあめ玉が入っていた。

「……なんで？」

俺は考えた……そして、気づいてしまった。

「これは、神が俺に生きると言っているんだ!!」

そう、これが空腹 + 睡眠不足 + 疲労の状態のみに出てくる発想だ!! 中二病人なら出てくる発想だけど、普通に痛いよね。

……もう、細かいことは逃避して気にしないことにする。

目覚めたら、竹林に放り出されてたんだから、これぐらいは許容範囲だ。

「さて、さっそく食べよ……」

食べようとすると目の前に一匹の虫が飛んできた。

「蛍？ あっ……」

蛍が飛んだ方向を見ると……。

緑色のシヨートヘアで半ズボンを着ている子供がこちらを見ている。頭には虫の触覚みたいなものがついていて、虫のコスプレ（仮装で言った方がいいかな？）みたいな感じかな？

「こんばんわ」

始めて人を見た嬉しさと、なぜ子供がこんな所にいるのか気になったので、俺は近寄り笑顔を浮かべて挨拶を試みた。

しかし、彼女は挨拶を返してくれないどころか、こちらを睨んでいる。

警戒されてるなあ……まあ、当然か……。

しかし、この子は手に持っている飴をチラチラと見ていた。

「……食べるかい？」

さっきから、手に持っている飴に興味を持っているようだから、渡してみる。

すると、以外に素直に受け取ってくれた。

「あ……ありがとう」

「どういたしまして、お嬢さん」

あ、お嬢さんであってるよな？

これで、男だったら恥ずかしいな。

「……ありがとう」

顔をほころばせ、再度お礼を言ってきた。
お嬢さんで合ってたみたいだな。

「ところで、君はこんな夜遅くになんでここに？」
「散歩だよ」

散歩……？

まさか、ここって……迷うような場所じゃないのか？
案外、健康のために散歩ができるようなお散歩場所なのか？
いや、もしくは……この子はこの竹林を知りつくしているのか？

「お兄さんは？　なんで、迷いの竹林にいるの？」

警戒心が消えて、彼女が話しかけてきた。

どうやら、このの名前は……迷いの竹林と言っらしい。
迷いの竹林！？

明らかにヤバくね？　名前からして遭難するフラグがピンピンなん
ですけどー！！

「もしかして、お兄さんは永遠亭に向かう途中なの？」

永遠亭？　また知らない単語が……。

そこに行けば、助かるかな？
細かい説明は面倒だし、口裏を合わせてみるか……。

「そうなんだよ、永遠亭に行きたくてここに入ったんだけどさ。
道に迷っちゃって」

「……お兄さんは無謀過ぎるよ、今までよく襲われず生きてたね」

明らかに呆れている。

まあ、端から見ると俺は、なんの荷物も持たずに「迷いの竹林」に一人で入って出れなくなった、哀れな子だもんね。

本当だったら、夜だし獣に喰われても文句言えないし……。

……俺だつて居たくていたわけじゃないんだよ！！

……誰にキレたんだろ。

はやく、この竹林から抜け出したい……。

「君は、永遠亭の場所は知っているかい？」

「知ってるよ」

よし！ 助かるかも知れないぞ！！

神様、ありがとう！

「そこまで、連れて行ってくれないかな？」

「……それは、嫌だね」

神様、自傷行為をする奴は嫌いですか？。

ちなみに、俺はあなたが大嫌いになりそうです。

……しょうがないか。

こんな夜遅くだもんな、この子の親が心配するよな。

「わかった。 それじゃ、俺は行くよ……気を付けて帰ってね」

そうなれば、もう一度探索開始だな。

俺は、彼女に背を向けて歩き出す。

「ちょ……お兄さん！ 待ってよ！」

すると、彼女に腕を捕まれた。

「お兄さんは馬鹿なの？　せめて道を聞くくらいはしなよ」

「いや、残念ながらお兄さんは、ここで道を聞いても無意味だと思
うんだよね……」

目印的な物は少ない上に、同じような風景だからいつの間にか、元
の場所に戻っちゃうんだよね。

もちろん、自分の体で体験済みだ。

「……もう、しょうがないな。　この蛭について行って」

彼女が指差す方には、一匹の蛭がいた。

あの蛭に付いていけば、永遠亭につくのか？

……なぜか、信じてみる気になった。

まあ、当てもなく歩くよりかは断然マシだ。

「ありがとう、感謝するよ」

「いいよ、アメのお礼だよ」

この子はいい子だなあ。

思わず頭を撫でていた。

髪がさらさらで気持ちいいなあ……。

彼女も、最初はビツクリしていたが、嫌ではなさそうだ。

「お兄さん、名前は？」

「えっ、ああ……幽真て言うんだ。　君は？」

「私は、リグル・ナイトバグ……覚えておいてね？」

外国の子かな？

変わった名前だし、でも覚えやすく素敵な名前だと思う。

「君も俺の名前を忘れないでね？ リグルちゃん」
「わかったよ、それじゃね、幽真兄ちゃん！」

リグルちゃんは、嬉しそうに空を飛んで行った。
いやあ、いい子だったな……。
あれ？ 空を飛んで……？

「えっ、空飛んだ！？」

……なんで、少女が空を飛んでるんだろう？
……ふ……不思議な子だなあ。

「世の中……分らない事ばかりだな」

しばらく、固まっていると、蛍が飛んで行った。

「…見失うわけには行かないよな？」

俺は大急ぎで、蛍の光を追いかけた。

……これで、見失って死んでバットエンドなんかになったら……リ
グルちゃんに顔向け出来ないよな。

俺は、暗い竹林で蛍の光を必死に追いかけて続けた。

確か、そんなことがあって、お屋敷にたどり着いたはず。
お屋敷の前で倒れた気がするが……。

「……じゃあ、ここは……永遠亭？」

しかし、永遠亭でどんな場所なんだ？
誰かのお屋敷？
もしかしたら、お店かな？

「とりあえず、布団を畳んじやえ」

布団を畳んで、着崩れていたYシャツを着直して……寝癖は、大丈夫だよな？

俺はふすまを開けて廊下に出た。

すると、太陽の光が俺を照らす……お日様が高いから、午後かな？。しかし……暗い竹林にいたせいで、久しぶりに太陽を見た気がする。太陽の光が暖かい、生きてるのは素晴らしい事だ……。

「おお、生きてたの？」

生きてることを実感してる時に、勝手に殺さないでくれないかな？
声が出たほうに振り向くと、女の子がいた。

ニンジンの首飾りをしていて、身長は俺の胸より下くらいかな？
黒い髪のショートヘアで、ちょっとクセっ毛っぽい感触したら気持ち良さそうだ。

なにより、びっくりしたのは……ウサミミがついているんだ。

「なに？ そんなに妖怪が珍しい？」

女の子が不思議そうな顔をして、俺を見ていた。
妖怪？

「それとも、妖怪を見るのは初めて？」

妖獣？

確か……動物の妖怪だっけ？

本では、「力と知恵を持ちすぎた動物」と書いてあった気がする。

……つまり、現代にはいるはずがない生き物。

見たところ……普通に幼い子供だが化け物なのか？

つつい……物珍しげに見ていると。

「まさか、ロリコン？」

「ロリコンではない！」

とんでも無いこといいだすな！？

いやいや、確かに貧乳は大好物で子供も好きだが、ロリコンではない……！

「本気で否定すると余計に怪しいよ？」

妖獣はニヤニヤと笑みを浮かべながら、からかってくる。

「怪しくないから！」

「だって、私の事を熱い視線で……」

「いやいや、そう言う目で見てないから……！」

「えー、だって私の体をジロジロ見てたじゃない」

こいつ、俺をからかってやがるな……。

ここはハッキリと言った方がいいな！

「確かに見てたが……胸なんか見てない、耳を見てたんだ！」

「え、ウサミミフェチ？」

「違う、ウサミミは見てたが、俺は髪フェチだ……！」

「なんか、性癖暴露してきたよ」

あれ？　なんかハツキリ言い過ぎた？

妖獣の方を見ると、新しいオモチャを見ている子供の目をしていた。

「くっくっく……気に入ったよ、名前はなんて言うんだい？」

「……幽真だ、君は？」

「因幡てゐ、まっよろしくね」

「ああ、よろしく」

とりあえず、右手を差しだし握手を求める。

てゐは、ニイツと笑って右手を握ってくれた。

妖怪らしいが……悪い奴じゃなさそうだな。

「私に握手を求めるなんて……やっぱり、ロリコン？」

「違うから!!」

第一話、希望の蛍の光（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます！

感想や脱字、誤字の指摘をお願いします！！

第二話、憧れの能力（前書き）

では、第二話始まりまーす！

ゆっくり読んでいってね！

第二話、憧れの能力

あの、世間一般では「不毛」と呼ばれるやり取りの後、俺はてゐに無理矢理連れられて……てゐが『お師匠さま』と呼んでいた人の研究室の前に立っていた。

……ちなみに、てゐからは肝心な事は何も聞いてない。
ここに連れてくるなり、てゐは……。

「私は忙しいから、あとは師匠がなんとかしてくれるから頑張ってね」

と、言い残し逃げてしまった。

何を頑張るのかも分からないし、『師匠』てのもどんな人なのかも分からないし……そもそも人か？

ここに来る間、ウサギ達がいっぱい居たから……やっぱり、『師匠』もウサギなのだろうか……？

「まあ、考えても仕方ないか……」

俺はふすまに手をかけ、開けてみた。

第二話、憧れの能力

「失礼します」

挨拶をして入ると、薬の独特な匂いがしてきた。

……永遠亭で病院だったのか

「あら、目覚めたのね」

研究室には二人の女の人がいた。

今、話しかけられた女性は、赤と青のナース服のような服を着ていた、医者なのかな？

髪は腰まで長く銀色の美しい髪をしていた。

もう一人は、てみると同じ妖獣なのか長いウサミミが生えている。

着ている服装は……ブレザーとスカートの女子学生みいな格好……ウサミミのせいでコスプレにしか見えない。

まるで、ギャルゲのキャラだな。

髪は、腰に届くくらいに長くて、薄い紫色をしていた。

まあ、ようするに……二人とも、素晴らしい髪だった。（キリッ）

「はい、助けていただいてありがとうございます」

俺は頭を下げてお礼を言う。

多分、ここに居る誰かが、俺を拾ってくれたに違いないし。

「どういたしましたして、私の名前は八意 永琳。 薬師をしているわ」

この匂いはやっぱり薬なのか……。

さてと、俺も自己紹介しないと……。

「えっと、俺は霧島 幽真です。 高校生です」

「高校生……？」

永琳さんの顔が曇る。

なんだ、おかしい事はないよな？

「ここにたどり着くまでの事を……詳しくお話を聞かせて貰えないかしら？」

とりあえず、俺は……。

『目覚めたら、迷いの竹林にいた』

『死んだのはわかってるが、死因が分からない』

この二つの事に関して、話した。

「ふむ……貴方の体……少し調べさせてもらっていいかしら？」

こうして、しばらく検査を受けた。

検査と言っても……薬を飲んだり、体を触られたりとか……俺には何を調べてるのか全く解らない事をされた。

なぜか、永琳さんは府に落ちない顔ばかりしていたけど……なんで？

25

そして、検査結果を告げる前に、この世界……幻想郷について話してくれた。

……ここからは、俺の解釈で説明するけど、分かりにくかったらごめん。

ここは、現代とは違う、もう一つの世界（正しくは、結界で外の世界と区切りをつけてるだけらしい。つまり、ここは日本）

その世界の名前は幻想郷。

ここでは、人も妖怪も幽霊も神も暮らしている。

そして、ここには特殊能力……「程度の能力」を持つてる妖怪や人間

も居るらしい。

例えば、永琳さんの能力は……。

「あらゆる薬を作る程度の能力」

この能力のお陰で、傷薬から劇薬、毒薬までなんでも作れるらしい。ちなみに、ホレ薬、媚薬なども作れる……少し、羨ましい。

「……ここまでは、大丈夫かしら？」

「はい、わかりました」

……つまり、ここは現代と真逆な世界なのだ。

特殊能力、神様が実際に、妖怪が目の前にいる。

現代ではあり得ない事がここでは、平気で起こる。

そんな世界に飛ばされたのだ……俺の体になにが起きててもおかしくない……。

「さて、本題に戻すわね……貴方は……」

まあ、結論から言わせてもらおう。

俺は、幽霊になっていた。

正しく言うなら、

『妖怪、人間どちらにも区別が出来なかった』

『死んだはずなのに死因が解らない』

この2つの要素で幽霊と判断されたらしい。

さらに、驚くことに俺は、高い霊力と程度の能力を持っていた。
(なんか、薬を飲んだら気づいた、能力に気づける薬かな?)
その能力とは……。

「お菓子を操る程度の能力」

さらに言うと、俺の体は、その能力で出来たお菓子で出来ているらしい。

「どういう事ですか……！？」

「言葉の意味通りよ、貴方の元々の肉体はもうないの、今の貴方の肉体は貴方の能力で『創った』ものよ」

例えるなら、ロボットみたいな感じかな？

脳は俺のだけど、肉体はお菓子を材料に超リアルに造られてる。

肉体（？）を手に入れたことにより、幽霊のマイナスの特徴が消えているらしい。

例えば、幽霊は触れると悪いと凍傷してしまうほど冷たいが、俺の場合は触れても平気だし。

日光の下でも平気で動ける。

周りに悪影響を及ぼす事もない、全て俺の能力で創った体のお陰らしい。

つまり、殻の役割も果たしているのだ。

「えっと、つまり……俺事態が成仏、又は能力が無くならなければ、肉体の方は何回も再生可能でことですか？」

「原理ではそうなるわね」

すげえな、俺の体……全部お菓子なのか……？

人間の頃と全然変わってないのに……。

つかここまできたら、幽霊より人間て感じがするな。

実際、幽霊としてのマイナスはないけど、特徴もないし。

……他にも応用は出来ないかな？

「まあ、その話しは後々話しましょう」

しゃべり疲れたのか、永琳さんが勢いよくお茶を飲みほす。

「貴方、行く宛はある？」

「あるわけがないです。」

すると、永琳さんは品定めをするように俺を見た。
そして……。

「貴方、ここで働いてみない？」

「えっ……？」

働く？　ここで？

一瞬、頭がフリーズしたが理解できた。

でも、俺は薬の知識はないんだけど……。

その事を永琳さんに伝えると……。

「いや別に薬の知識が無くても大丈夫よ、他に得意なことは？」

「家事とお菓子作り、あと家庭教師のバイトもしてました」

「はい、採用」

と、言うわけで……俺はここ、永遠亭で住み込みの使用人として雇われた。

さっそく、今日から夕食を作る事になったが、まだ日が高く夕食まで時間はある。

……とりあえず、永遠亭をまわることにした。

とりあえず、俺の部屋は最初に起きた、あの部屋になった。

ダンスがあるだけの、寂しい部屋だが、広さは俺一人なら全然問題がない。

ぶつちやけ、服もないからダンスすら必要ない。

……やっぱり、制服以外の服が欲しいなあ。

そういえば、この仕事はお給料とかでるのかな？

いや、住ませて貰ってるだけいいと思おう……。

「「あっ」「

「」ど……どうも」「

そんな事を考えてると、廊下でウサミミブレザーの子とバッタリ会った。

……そう言えば、この子の名前は知らないな。

「えっと……名前、教えてもらっていいかな？」

「……鈴仙・優曇華院・イナバ、よ……よろしく」

名前長くね!？」

もう一度聞き直すのは……失礼かな？

ならべく、動揺が顔にでないように、笑顔でこちらも自己紹介した。

「よろしく、俺の名前は……」

「霧島幽真君でしょ？」

あれ？　なんで俺の名前知ってるんだ？

「さっきの話聞いてただけだな……」

まるで、俺の考えを見抜いたように、言葉を被せる。

あーそう言えば……永琳さんの横に居たもんな。

「そうだったね。　じゃあ、改めてよろしく、……レイスイ、うど
ん、げい、イナバさん？」

「なんで、フルネームで呼ぶの？　しかも、言えてない……」

あ、そう言えば、フルネームを覚える必要はないんだ？

じゃあ、なんて呼べばいいんだろ？

レイスイ？　うどん？

違うたしか……。

「……どうしたの？」

「いや……なんでもないよ、ゲイさん」

「ゲイさん!？」

あ、やば、色々ミスった気がする!!

ゲイじゃなくて……名前は確か……。

「すみません！　名前を間違えました！　レースウドンさん!」

「レースウドン!？」

ああ!!　また、間違えた気がする!!

ヤバイ、そろそろ怒られる気がする……いろんな意味で!!

「えっと……ウドンゲでいいですよ？」

俺が完璧にテンパっていると、ウドンゲさんが助け船をだしてくれた。

「はい……色々すみませんでした……ウドンゲさん」

「人の名前くらいちゃんと覚えてくださいよ？」

「……すみません」

「もう、謝らなくていいですよ」

ウドンゲさんは、あんな無礼をした後でも笑顔で話しかけてくれた。
いた。

今日ほど『聞くのは一瞬の恥じ、聞かぬは一生の恥じ』と言ったこと
わざの、大切さが分かった。

「優しいんですね、ウドンゲさんは……」

「えっ？ 別にそんな事は……。」

いや、名前をゲイさん呼ばわりして、怒らないのは優しい人だと思う。
う。

もしくは、よっぽどひどい扱いを普段から受けてるとか？
でも、ウドンゲさんは何だか嬉しそうにしていた。

「あ、そろそろ……行きますね。ウドンゲさん、これから願
いします」

「はい、お願いします」

さてと、永遠亭は広いからな……。
しっかり、場所は把握しないと……。

「……………おもしろい人」

ウドンゲさんが、そんな事を呟いていた。

「……掃除、大変そうだな……」

一通りの場所を見て、覚えたが……。やはり、ここは広いなあ……。

「そう言えば……この

主人の輝夜様って……どんな人なんだろ？」

こんな、大きなお屋敷の持ち主だろ？

きつと、普通なら俺なんかは見ることにすら不可能な存在なのかな？

「……美人だといいな」

「美人だよ？」

「マジで、それはテンションが上がるなあ……」

てっ、俺は誰と話しているんだ……。

振り替えると、てゐがウサギ達といた。

「しかも、綺麗な髪をしているから、髪フェチなあんたでも気に入るかもね」

マジか!?

いいねエいいねエ、最っ高だねエ!!

「まさか、髪が長い？」

「長いよ、腰まである」

COOL!! 素晴らしい!!
黒髪のロングは世界の宝だ!!
希少価値だ!!

「……幽真、鼻の下伸びてる」
「伸びてねえよ!」

ちよっと、興奮してるだけだ!!

「んじゃ、性犯罪者な顔してる」
「酷くね!?!」

言うだけ言って、てゐはウサギ達と、どこかに行ってしまった……。
なんか、トゲがあつた気がするけど……。気のせいだよな。

あ、そろそろ、ご飯作らなきゃな。俺は、台所に向かうことにした。
……てゐにリクエスト聞けば良かったな。
何を作ればいいんだ……?」

第二話、憧れの能力（後書き）

謝ります……ウドンゲ好きの人の皆様、本当に申し訳ありません……。

感想と、脱字、誤字の指摘をお願いします！

第三話、一目惚れ（前書き）

さあさあ、第三話始まります！

今の所は更新は順調ですね！！

第三話、一目惚れ

「さてと……」

俺は、台所に立っていた。

食材は……玉ねぎとお肉（鶏肉かな？）玉子もあるし……親子でいいかな？

もちろん、炊飯器は無いが釜戸でご飯を炊く方法は知っている。

とりあえず、包丁とか鍋とか……調理器具を探すか……。

久しぶりに作る、大人数の食事に舞い上がっていた。

第三話、一目惚れ

「ふう……あとは、盛り付けだけだな」

作業も一段落して後片付けに取りかかろうとすると……。

ふと……包丁に目がいった。

……少し位なら……大丈夫だよな。

俺は辺りを見渡し、誰も居ないことを確認して。

手首に包丁を突きつけた。

刃先を突きつけると、赤色の液体が手首から流れる。

「……もっと深くやってみようかな……？」

今度は、刃先で突き立てるだけではなく、刃で切ろうとすると……。

「幽真君、お願いがあるんだけどいいかな？」

「えっ……!?!」

刃物を腕に当てようとした寸前に、ウドンゲさんがやって来た。俺は、素早く包丁の血を拭いて、包丁を置く。

そして、なるべく自然に、ウドンゲさんの方へ振り向く。

「あ、ウドンゲさん。何かご用ですか？」

「……? 何か焦ってませんか？」

「いや、全然にゃんろ、焦ってませんよ? せんよ?」

明らかに焦ってるだろ、なんもが言えてないし……。

自分でツツコミを入れてしまうほどに、焦っているが……全力で平然を装う、バレるわけにはいかない。

「あれ……手首から血が出てますよ……?」

「えっ……はい?」

しまった!! 最初に傷つけた傷か!?

落ち着け、落ち着くんだ……!!

この程度なら「間違っって怪我した」とか言えば済むんだ……。

「間違っって怪我した」

「……なんで、棒読みなんですか?」

ミスったー!! まさかの棒読みしちまったああああ!!

落ち着け、COOLになるんだ……霧島幽真!!

まだ、今なら話題を変更させる事で誤魔化しは可能だ！

「それよか、俺に用事があるんじゃないんですか？」

「え、あ、輝夜様を起こしに行つて欲しいんですけど……」

お……良い感じに、誤魔化せたか？

とりあえず、ひと安心。

あと、噂の美人な姫様が見れるのか……。

……起こすつて事は寝てるのか、この時間に？

(まあ、細かい事は気にしないでいいか……)

とりあえず、手拭いで手を拭いてと……。

「姫様の部屋は？」

「えっと……」

姫様のそう言つて、師匠は立ち上がり……部屋から出ていった。
部屋の場所を教えて貰い、俺は向かうことにした。

(……危なかった)

絶対に、自傷癖の事は知られたくない。

理由は……分かるだろ？

俺だって分かつてるんだ、俺の自傷癖が異常であることくらいさ。

「失礼します」

俺はふすまをあけて、中の様子を伺う。

「ん〜……?」

布団から起き上がった姿を見て……思わず驚愕した。

(……………なんだと!?)

正直に言う、タイプ、モロ好み。

美しく整った顔も黒く長く綺麗な髪も……あまりに素晴らしくて驚いた。

まるで、俺の理想がそのまま出てきたようだな……。

姫様の美貌に見惚れていると、姫様は俺を不思議そうに見ていることに気付いた。

「貴方は……誰かしら?」

「……霧島幽真と申します、竹林で倒れていたのを助けられて、ここで働く事になりました」

緊張のせいか、何回か噛みそうになったが……なんとか噛まずに言い切ることができた。

それを見通されたのか、明らかに興奮してるのが顔に出ているのか解らないが、姫様は可笑しそうに笑っている。

「そう言えば、永琳に新しい使用人を雇っていいかと聞かれたわね

……」

改めて、こちらを向いて

一生忘れることは出来ないほど素晴らしい笑みで……

「幽真……これからよろしくね？」

「はい、よろしく願います！」

俺は土下座の勢いで頭を下げた。

俺は台所に戻ると、ウドンゲさんがすでに、お皿の盛りつけなどを終わらせてくれたようだ。

「あ、ウドンゲさん……姫様を起こしてきましたよ？」

さっき、あんな事があったばかりだったから……ちょっと、緊張しながらウドンゲさんに話しかけた。

「あ、幽真君。ありがとうございます」

さっきの事は気にしていないのか……普通に話しかけてきてくれた。……一様、もう少し確認してみるか。

「いやあ、姫様……美しい人でしたね……」

「確かに、輝夜様は綺麗ですよね」

「……なんか、俺の料理が姫様のお口に合うか心配になってきたな……ウドンゲさん、味見お願いします」

「あ、はい……それじゃー口」

よかった、本当に気にしてないらしい……味見も嫌がらずに食べてくれたし……大丈夫だな。

ちなみに、俺が作った料理は気に入られたようだ。

特に姫様が「……美味しい、幽真は料理が上手ね」と笑ってくれた時は、嬉しすぎて涙がでそうになった。

「幽真、後片付けが終わったら私の所に来なさい」

「あ、はい」

食器を片付けていると永琳さんから、呼び出しをくらった。

……俺なんかしたっけ？

「……ま、いいか」

今することは、細かい事は気にせず片付けを急ぐことだ。

永琳さんを待たせると怖そうだしね。

「失礼しまーす」

俺は片付けと皿洗いを終えて、また永琳さんの実験室に来ていた。

「来たわね……ちょっと一緒に来なさい」

「あ、はい」

俺は言われるがまま、永琳さんの後についていく。

「で、永琳さん……手に持っている弓は……？」

永琳さんは手に弓を持っていて、背中には矢が入った筒を背負っていた……狩りでもするのか？

「貴方の能力を試してみるわ」

その顔は、新しい道具を試すような目だった。

………な、なにされるんだ……俺は……？

「次、いくわよ」

「り……了解です……！」

俺と永琳さん………じゃなくて「師匠」は……俺の能力「お菓子を操る程度の能力」を試していた。

「よっ……！」

放たれる矢に対して、能力で作った「鉄より硬い」右腕で弾いている。

俺の能力は、お菓子ならなんでも『作れて』『創れて』『操れる』。お菓子の定義は、俺がお菓子だと思っているもの。ただし、思ってもいないのに、自分が「これはお菓子だ！」「と思ってもダメだった。（自分の体はお菓子の扱い）

後は、お菓子に追加設定をつけられる。
俺の体が良い例だ。

「限りなく人の皮膚に近い」

「人間の血液に近い」

「限りなく人の眼球に近い」

等の追加設定があるお菓子で俺は出来ているらしい。（だから、普通の人と姿形も中身も同じなのだ）

ちなみに、どうやら俺は、自分の体を作るので精一杯らしく……。自分の手が届く範囲でしかお菓子を創れないに、物理的な追加設定しか付けられないらしい。

だから、遠距離攻撃は

『自分の周りでお菓子を創り飛ばす』

くらいしか出来ない。

しかも、威力はめっちゃ弱い。

でも、近距離戦闘は話が別だった。

自分の好きなタイミングで武器を出せ、体の部位に追加設定をつけられ強化できて、攻撃されたら再生もできる。
しかも、強化しての攻撃は威力が高い。

まあ、つまりは……。

「加速っ……………!!」

師匠の攻撃を弾きながら、接近戦を仕掛ける。

……………つまり、ごり押し、玉砕特攻が得意なのだ。

「脚力を強化」の追加設定をつけた、足で一気に師匠に近づく。

「はあはあ……………どうですか、師匠？」

「ふむ……………まあ、理解はしたわね……………」

理解は……………か……………。

まだまだ、らしいな……………。

ちなみに、俺はお菓子に対する執着心や想像力が高いから、初めからこんなに動けるらしい。

……………でも、不満が一つ。

俺は、怒りも込めて体に刺さっていた矢を抜き折る。

「お菓子で戦ってる気がしないけど……………」

なんかさー、憧れてたのと違うんだよね……………。

いや、食べれるお菓子を、創りだせるのは良いんだけど……………。

俺の理想と、真逆を行ってるんだよ……………。

せっかく「お菓子を操る」なんて、夢のある能力なのに、強化して殴るとか……………俺はファンタジーな使い方がしたいのに……………。

俺がいじけていると、師匠が肩に手をおいて……………。

「贅沢は言わないの、十分凄い能力なんだから」

「そうですか……………?」

ぶつちやけ、肉弾戦はあんまり好きじゃないんだよね……。
RPGでも戦士より魔法使いの方が好きだし。

「あくまで、可能性だけど……鍛練次第では、使えるようになるかも知れないわよ?」

えっ……マジで?

師匠の話では……元々、肉体強化しか使えないのは、能力が目覚めただけで、肉体の維持で精一杯だから……。

能力を使いこなす 肉体の維持が楽になる 余裕が出来る 俺の理想の使い方に近づくらしい。

なんだか、先が見えない話だな……。

「まあ、これで貴方も戦えるようにはなったし……。今日は終わりにしましょう、暇があるとき……また見てあげるわ」

「師匠……ありがとうございます!」

「あと、貴方にこれを渡しておくわ」

師匠から貰ったのは白紙のカードだった。

……炙り出しのカードかな?

焼けば、文字が浮き出るやつ。

よく、推理小説にでるあれだよ。

「……多分、明後日の方向に勘違いしてるみたいだから、説明するわよ」

炙り出しじゃないのか?

じゃあ……水で反応する奴かな？

「なんで、暗号が書かれてる事が前提なのよ……それはね？」

なぜ、考えてる事が解ったんだろ？

このカードは、スペルカードと言って……

必殺技を紙に記して、媒介にして発動できる。

このカード自体には、そのものには特殊能力がない只の紙でらしい。

……実は、なにか暗号的な……。

「ないわよ、余計な事はしないでね」

なんか、釘をさされた。

本当にするわけがないじゃないか。

(……………なんだ、暗号が書かれてるわけじゃないのか……………)

少しだけガツカリした。

いや、本当に少しだけだよ？

「ふう……疲れた」

俺は、部屋に戻るなり布団にダイブした。

しかし……今日は濃い一日だったな。

「働く先が決まったり、危うくバレそうになったり、戦い方がわかったり」

うん、初日から飛ばしすぎたる。

……そう言えば……明日のごはんの食材はどうなんだろう？
朝食位なら、なんとかなるけど……。
やっぱり、買いにいくのかな？

「……あの竹林を通るのか……」

なんか、そのまま帰ってこれなくなりそうだな。

まあいいや、明日の事は明日考えれば……。

それよりも……姫様、可愛かったなあ……。

一目惚れてマジであるんだな……。

あ、良いこと思い付いた。

「いつか姫様に対する気持ちを……スペルカードにしてみよう」

そつと、決まったら早く肉体強化を極めて……能力を使いこなせる
ようにしなきゃ。

「そつと、決まったら……今日は寝るか」

俺は、蠟燭の火を消した。

第三話 一目惚れ（後書き）

幽真君は、輝夜様ルート狙いが決定しましたー。

それでは、感想や脱字、誤字の指摘をお願いしますね。

第四話、始まりからこんな感じ（前書き）

では、第四話始まります。

ゆっくりしていいねー

第四話、始まりからこんな感じ

『……………?』

誰かが話しかけてる気がする。

でも、聞こえない……………聞きたくないのかもしれない。

……………聞いたら全てが終わる気がする。

だから、聞かない。

「んあ……………?」

目が覚めて、とりあえず俺は起き上がる。

「なんか……………変な夢を見てた気がするな」

背伸びをしながら、思い出そうとするが思い出せない。

「まつ、そんなもんだよな、夢つーのはさ」

あ、でも姫様の夢だったら忘れなくなかったな。

絶対に違うと思うが。

第四話、始まりからこんな感じ

「とりあえず、着替えるか……」

寝巻きがないし、制服で寝るわけにはいかないから、今はパンツで寝ているから正直、寒い。

……まあ、俺の寝てる格好なんか興味ないよな？。

「着替え完了……っ」と

ブレザーはとりあえず、置いていてYシャツにズボンを着て……。寝癖の確認をして、能力で直し（やべえ便利すぎる）……台所に向かうことにした。

「「あっ……」」

台所に向かうと、ウドンゲさんとバッテリー会った。お互いに「おはようございます」と挨拶を交わす。

「幽真君、朝は早く起きれるんですね」

「もちろんですよ……俺が朝早く起きれるのは意外でしたか？」

「正直に言っと……はい」

申し訳なさそうにしているが……なぜか、よく言われる事なので気にしない。

ちなみに言っておくが、俺は学校に遅刻した事は、一度もないほど早起き出来る子なんだからな。

「で、朝御飯なんですけど……どっちが作りましょうか？」

台所に来たて事は、ウドンゲさんも朝食を作りに来たと考えていいんだよね？

「あ、じゃあ、私は師匠を起こしに行くので……幽真君、お願いします」

「了解です、ん…？ 姫様やてゐは起こさないんですか？」

俺の疑問に、ウドンゲさんは苦笑いをして……。

「あの二人は起こしに行っても無駄だから……でも、起こしにいかない……」

……なぜだろ、人（？）を起こすのはよっぽど大変な行為なのか？

なんか、公園にいるサラリーマンみたいな疲れた表情をしている、ウドンゲさんを見てたらそう思った。

「よかったら、俺が二人と姫様をまとめて起こしに行きましょうか？」

なんか、あの表情を見た後だから、逆に興味が湧いてきた。怖いもの見たさってやつだな。

「いや……でも」

「いいから、いいから。あ、てると師匠の部屋も教えてください」

……永遠亭、一目、初めての仕事は、三人を起こすことに決定し

たみたいだ。

「ここが……師匠の部屋だよな？」

とりあえず、部屋を開けて入ってみると……。

(意外と師匠、寝相が悪いんだな)

寝相が悪い〃布団や寝巻きがめくれてて、下着や肌が見えてると言うこと。

その素晴ら……大変な光景は思春期男子には、精神とかその他モロモロを維持するには、大変な状況な訳で……早くおこさなければ。

「師匠、朝ですよ？」

俺は、布団の上から(最重要)師匠の肩を揺らした。
すると……。

マジで、一瞬の出来事だった。

俺の首にメスが突きつけられた。

「うーん……あら、どうしたの？」

「師匠、寝ぼけて殺そうとしないでください。あと、何でメスを持ってるんですか？」

良い経験だ、女性は朝起こそうとすると、メスを頸動脈に突きつけるらしい。

「次は、てゐの部屋か……」

てゐだつたら、遠慮はいらんだろ。

俺は、ふすまを開けて中に入った。

「おら、起きろー」

問答無用で、てゐの布団をひっぺがす。

「ひゃあ！ うう……何すんのさ」

てゐが恨めしそうにこちらを見ている。

流石にやり過ぎたか？

でも、これぐらいはしなきゃ起きそうにないし、大丈夫だよな。

「いくら、ロリコンだからって……この強引な事しちゃダメだよ？」
「なんでだっ!？」

大変だ、朝起こしにきて布団をひっぺがしたら、ロリコン扱いされた。

「それに、兎は夜行性なんだよ……だから寝かせろー」

む……確かにそうだが……。

「同じ兎でも、ウドンゲさんは早く起きてるぞ?」

「鈴仙は月の兎だから」

と、布団を奪って潜ってしまう。

……なんだその理屈は、ダメな子供を起こす親の気持ち分かる。

「いいから起きろ!!」

「……ダメだ、疲れた……」

……くそ、なぜだ……なぜ人を起こすだけなのにこんなに疲れるんだ。

師匠で精神的に疲れて、てゐで肉体的に疲れた……つまり、ライフポイントは0です。

(おっと、次は姫様の番じゃないか……疲れた顔は見せちゃダメだ……)

いつでも、好きな人の前ではニコニコしていたいものだ。

むしろ、あの美人な姫様を俺が起こせる……それはとっても幸運な事のはず、嫌々な顔をしたらバチがあたるに違いない。

「よし……行くぞ」

俺はふすまを開けて部屋に入る。

爽やかな笑顔で、爽やかな声で!

「姫様、朝です……よ」

さっそく笑顔が凍りついた。

姫様は布団を蹴っ飛ばして、下着や白くて綺麗な肌が見えた。

姫様が下着で寝てる！？

(お……落ち着け、COOLになるんだ霧島幽真！！これは罠だ陰謀だ！！)

自分で言っというてなんだが、「なんの陰謀だよ」とつつこませてもらう。

(そうだ、俺はCOOLで冷静な男なんだ……)

今まで、COOLな男の描写は無かった気がする。

むしろ、COOLの真逆に行く男のイメージだと思う。

(それに俺は、見ていない……ピンクのフリフリなんて見ていない！！)

ばっちりチェック済みである。

(しかし、ピンクもいいが、姫様には何色が一番似合うんだ……?)

自称COOLな男は、下着について思いをはせている。

(いや、それよりも早く……起こさなければ……!!)

やっと、俺は目的を思いだし、姫様を見る。

そう、見てしまった。

(……ピンクのフリフリ)

こうして、自称COOLな男は朝食を作り終えた、ウドンゲさんに鼻血で真っ赤に染まっている所を救出されたそうだ。まあ、騒ぎで姫様が起きてくれたから……結果オーライだな……。そう言うことにしてくれ……。

取り合えず、午後になって……昼御飯を作ったら食材がなくなったので……俺は人間の里に食材を買いに行くことになった。

「えっと……」

地図を見ながら、迷わないように人間の里を歩いていく……すると、頭に不思議な帽子を着けている女性とすれ違った。

「よつと……おっ……」

女性は、大量の本を持って歩いていた。

バランスが悪く、持ちすぎて足元が見えてないみたいだし、落とすてしまいそうだ。

そして、ある意味予想通りに……。

「うぁ……!!」

石につまづいて、何冊か本を落としてしまっ。

「加速っ…………」

俺は、能力で足を強化して、すぐに走って落ちる前に、全ての本をキャッチする。

「大丈夫ですか？」

「あ…………ああ、ありがとう」

女性は、戸惑いながらお礼を言った。

うーん…………こんなに山積みの本を女性が持つのは辛いよな…………時間
も大丈夫だし、手伝うか。

「よかつたら、持ちましようか？」

「いや、それは悪いからいい」

断る女性だが…………この光景を見て、俺は無視は出来ない。

「それじゃ、半分持ちます。そんなに持ってたら足元が見えない
でしょ？」

俺がそう言つと、女性はしばらく考えて…………。

「確かにそうだな…………借りたものを落とすわけには…………悪いが願
い出来ないか？」

「わかりました」

納得してくれたようだ。

彼女から山積みの本を、半分よりかなり多目に持つ。

「…………そんなに持って大丈夫か？」

彼女が心配そうにこちらを見ていた。

一瞬、「大丈夫だ、問題ない」と答えそうになったが自重する。

「大丈夫ですよ、これでも男ですから」

もちろん、すげえ重いから腕を強化して持っている。

「君は、細いのに力持ちなんだな」

残念ながら、腕を強化しているけどね。

俺は「まあ、鍛えてますから」と答えておいた。

まあ、嘘は言っていないと思う。

「それより、こんなに山積みの本……何に使うんですか？」

「授業で使うんだ」

「授業……あ、先生なんですか？」

彼女は、「ああ、そうだ」と短く答えて。

「この里の寺子屋で、先生をしているよ。これは歴史の授業で使う資料なんだ」

「歴史か……」

俺の苦手教科だったな……まあ、一夜漬けで平均点以上はとっていたがな。

「歴史に興味はあるか？」

「確かに……この歴史は気になりますね……」

正直、俺の世界の歴史は好きではなかったが……。平気で特殊能力や妖怪がいる世界だから、歴史もスゴいんだろうな……。

「ここの……？」

「ああ、俺は外の世界から来たばかりで……」

「ああ、君は外来人なのか？」

外来人……て、なんだ？

俺が、きよとーんとしていると……。

「外来人と言うのは、外から来た人と書くんだ。 外の世界から幻想郷に来た人間の呼び名だ。」

「おお、先生みたい……」

「いや、先生なんだが……」

俺が尊敬の眼差しで見っていたら、彼女は照れ臭そうにしていた。

「ま……まあ、君も興味が向いたら寺子屋に来るといい。 私が特別に教えてあげよう。」

それは、うれしい申し出だな。

やっぱり、良いことはするべきだな。

「あ、名前を覚えてくれないか？」

「え？」

先生はいきなりそんな事を言い出した。まあ、いいや……名前くらい教えても。

「霧島幽真です。」
「書き方は？」

か……書き方まで……？
えっと……どうやって説明しようかな？

「……霧の島の幽霊の真君です」
「なるほど……ありがとう、幽真」

あ、理解してくれた。

「私の名前は、上白沢 慧音だ。覚えといてくれ」
「わかりました、慧音先生」

とりあえず、そんな話をしてる内に、寺子屋についたようだ。

「ありがとう、君のお陰で助かったよ」
「いえいえ、当然の事をしたまですよ」

ふう、意外と時間を使ってしまったな……。
早く買い物ですませないと……。

「それでは、俺は買い物があるので……慧音先生、さようなら！」
「ああ、さようなら。気を付けてな」

慧音先生と別れた後は、すぐに買い物を終わらせて、今度は何事もなく帰れた。

だが、俺が永遠亭についた時には、お客(?)が来ていた。

そのお客は、白糸のような長い髪で、リボンが印象的な美人だが……。

「輝夜ー！！ 出てこい、私と戦えー！！」

……なんか、嫌な予感がする。

マジな方じゃなくて、災難とか巻き込まれるとかの、その部類で……つまり、「不幸だああああー！！」とか叫ぶ方の……。

第四話、始まりからこんな感じ（後書き）

この話しは…書いてて楽しかった

感想と脱字、誤字の指摘お願いします！。

第五話、不死の少女（前書き）

初めてバトルシーンなんて書きました。

長くて見苦しいかもしれませんが……読んでくれると嬉しいです！

では、第五話が始まります！！

第五話、不死の少女

「あらあら、また殺されに来たの？」

すると、姫様が部屋から出てきた。

「ふん、殺されるのはお前の方だ、輝夜!!」

「んー……でも、今日はちょっと気分が乗らないのよね」

ふむ、物騒な話だが……師匠が来ないなら、気にしなくてもいいの
だろう。

姫様も楽しそうだし。

俺は、邪魔にならないように食材を置きに台所に、向かおうとする
と……。

「あ、いいことを思い付いたわ」

姫様が、何かを思い付いたらしく手を叩く、あの仕草……かわいい
なあ……おもちかえりい。

「幽真、貴方が相手しなさい」

第五話、不死の少女

……はい？

一瞬、買ったものを落としそうになった。

とりあえず、廊下に置いとくか……。

「なっ……私はお前を殺しに来たんだぞ？　こんな貧弱そうな奴を、相手にしてる暇はないんだ！」

白髪の子が俺を指差して……そう叫んだ。

確かに、痩せてるし、貧弱だが……失礼じゃないか？

「姫様、アレは誰なんですか？」

「藤原 妹紅。私の友人みたいなものよ」

姫様の発言に「誰がお前なんかの……!!」と叫んでる妹紅と言う少女……ふむ……あれだけ必死なんだ、俺も姫様に戦うことを薦めよう。

きつと、彼女は姫様に構って貰いたいんだ。

「せつかく、来たんだから相手をして差し上げれば……」

「あ、幽真。」

「……はい？」

俺の話を途中で止めて……。

姫様は笑顔でこう言った。

「私、貴方の实力を見たいんだけど……ダメかしら？」

「勝負だ、藤原 妹紅さんよオ!!」

……男は好きな人の前では単純生き物なのさ。

「うわっ……分かりやすいな、お前」

「うるさい！　名乗っとくな、霧島幽真だ。最近、外の世界から

来た」

俺が名乗ると、妹紅は何故か、ぽかーんとしていた。

「何かと思えば、外来人か……？ フツ……止めときな………焼け死ぬぜ？」

俺を鼻で笑った後、妹紅の拳から炎が吹き出した。

確かに強そうだ、最近……能力に目覚めた……俺なんかよりも何倍も。

でも……

「大丈夫。死にはしないし……負ける気もないしね」

これに勝てば、姫様の好感度が上がるんだ。
負けるわけにはいかない！！

「んじゃ、準備はいいか？ 手加減はしないぞ」
「もちろん」

俺と妹紅は構えを取った。

先手必勝と行きますかね……！！

「……………加速っ……………！！」

俺は足を強化して、ダッシュで妹紅に近づく。

「なっ……………！！」

「うらあぁあぁあ……！！」

筋力を強化した、右腕でストレートを打ち込む。

「クソツ……！」

慌ててガードをするが……今の俺にそんなのは、通じない！！
ガードの上を筋力を強化した腕で殴り、思いっきり吹き飛ばす。

「なにっ……！？」

妹紅は吹き飛び、竹に叩きつけられた。

「まだまだ！！」

俺は、妹紅に向かって走り出す。

「くそっ……！！」

俺は、「鉄より固い」拳で妹紅を攻撃する。
対して妹紅も、炎の拳で対抗してしてきた。
しばらく、接近戦が続きヒットはないが……押してるのは俺だ！！

「どうだ！？　これが俺の力だ！！」

「……その程度でいい気になるな！　少し痛い目にあってもらうぞ
！！」

不死「火の鳥　- 鳳翼天翔 -」！！」

あれは……スペルカード！？

赤く輝く炎が俺に迫ってくる。

「回避できるか……!?!」

慌てて、後ろに下がるが、すぐに炎に囲まれた。
なんとか、回避を試みるが……火の手が多すぎるっ……!!
お菓子で盾を削ったりしたが……一瞬で消し炭になってしまっ。

(しかも、この火力じゃ……今の俺が削るお菓子じゃ守りきれないか……!)

何発か喰らいかけたが、直撃は免れた。

……なんとか、脱出を試みて後ろに下がったが……。

「さっきのお返しだ」

回避に必死で、近づいてくる妹紅に気づかなかった。

「マジで……!?!」

文字通り、炎の右拳で顔面を殴られる。

俺は地面に倒れて、地獄のような火傷の傷みが襲い、片目が完全に見えなくなる。

多分、眼球が焼けて使い物にならないのだろう。

……そして、周りには甘い匂いが漂っ……。

「なんだこの……甘い匂い?」

そりゃ、お菓子が焼かれれば甘い匂いがする。
でも、これで分かった。

体のお菓子は、簡単には燃えないらしいな……。

(なら、することは一つだよな……！)

俺はすぐに立ち上がり……突撃する。

「こいつ……バカか？」

妹紅が、炎の拳で又も顔面を狙ってくる。
待ってました！！

「捕まえたあ！！」

妹紅の炎で包まれた拳を掴む！！

「ぐううう！？ だが……離さねえ！！」

「本気か……こいつ……！！？」

妹紅が目を見開く、そりゃそうだよな……自傷癖で自分から傷つく
事になれてなきや……。

すぐに、自分から進んで、火傷をしにいく覚悟を決められる奴なん
かいねえよな！？

俺はスボンのポケットから、スペルカードを取り出す。

「強化「鋼菓子」！！」

体の全体に、「鉄より固い」の追加設定をするスペルカード……そ
れが鋼菓子。

その代わりに、他にお菓子は出せなくなるが……これで決着をつけ
るから、問題なし！！

先ずは、拳を引つ張ってこちらによせる。

「先ずは、頭突き!!」

「ぐあ……!!」

下から突き上げる頭突きで、妹紅の顎が上がる。

「喰らつとけえええ!!」

上がった顎へ、俺の右アッパーが決まる。

予想以上に……妹紅はぶつとんでいって、地面を転がった。

……ヤバイ、やり過ぎた?

完全にムキになってたよ……でも、向こうも顔面狙ってきたから……大丈夫(?)だよな?

「最後のパンチ……凄かったわね、幻想を壊す人みたいだったわ」

姫様の、のんびりした声が聞こえてきた。

いや、個人的には、一通行が好き……。

で、そんな事をいつてる場合ではなく、顔が焼けたせいで激しい痛みがするし、服は一着しかないのにボロボロだし、妹紅て人はピクリとも動かないし……。

……動かない?

やばくない? 顎を思いつきり殴った後で、動かないとかヤバくな

い？

だって、普通のアップーでも脳が縦に揺れるから危険なんだよ……？
えっ、冷たくなってないよね！？

俺、この年で人殺しになっちゃった！？

「も……妹紅！？ 妹紅さん！？」

俺は近づいて、生死の確認をしようとしたが……彼女の顎の骨が終
わってる事に気づいた。

「うあああああ！！」

「……？ どうしたの幽真？」

「も……妹紅の顎の骨が砕けてる……！！」

「ああ、大丈夫よ」

大丈夫なの！？

顔面の骨が砕けてるんだよ！？

「そこに、放っておけば治るわよ」

「し……師匠おおおお！！」

俺は師匠の元に全力で走っていく！！

助けて！ えーりん！！

そして、師匠にも同じことを言われた時は、自分の頭が熱さでや
れたのかと思った。

そして、本当に色々あつて夜になった。

妹紅は俺の部屋で寝かせている。

いや、師匠に聞いた話だが……妹紅は「死なない程度の能力」だから、本当に放つて置くだけで治るらしい。今は気絶してるだけだから、大丈夫……なんだよな？

「……本当だ、顎の骨が治ってる」

寝ている妹紅の顎を触つてみると……歪みもなにもなく、綺麗に治っていた。

……危なかった、マジで治んかったら、どうしようかと……。しかし、今度の心配は……目覚めるかどうかな。

「うつ……うつくん……」

数時間後……妹紅が目覚めた。

「ああ、起きたか？」

「なっ……なんでお前が!？」

「いや、ここ俺の部屋だし」

妹紅は俺の部屋を見渡し、その事を理解したようだ。

「食欲はあるか？ おにぎりがあるが食べるか？」

師匠が、目覚める頃には完璧に回復していると言っていたから、お

にぎりを作っておいた。

数時間ずっと寝ていたのだ……腹が減ってるに違いない。

「……腹なんて減ってない」

「そうか、水は？」

「いらない！ 誰がお前……！」

（ぐるぐるるるるる）

口より腹の方が素直だったな。

腹減ってるなら素直に言えよ。

「……気が変わった、食べてやる……」

うつ向いて、ボソリと呟いた。

そんなに、恥ずかしがらなくてもいいのに……。

「はいはい、召し上げれ」

俺はおにぎりと、湯飲みに水を注いで差し出す。

妹紅は、おにぎりを手に取り、食べ始めた……。

すると、おにぎりを食べた妹紅が、俺をチラチラと見てきた。

「……お前が作ったのか？」

「ああ、俺が握った。不味くはないだろ？」

おにぎり一つでも、美味しく握るコツは一杯あるからな。

子供の頃の、マイブームがおにぎり作りの時もあったし……それが今役に立つとは思わなかった。

「……ああ」と短く答えて、また食べ始める。

「あれからずっと、私の事を看病をしてたのか？」

とりあえず、妹紅が食べ終わるのを待つつもりだったのが……妹紅の方から話しかけてきた。

「いや、悪いが昼間は仕事があったから……看病をしてたのは夜からだな」

「そうか……」

変な沈黙が訪れた。

……俺は、更に雰囲気が悪くなるかもしれないが……話をきりだした。

「その、悪かった」

「はっ……？」

「その……大怪我させて」

流石の俺も、顎を砕くのはやりすぎだと思った。

いくら、戦いだからって限度があったはずだ。

「はあ……」

妹紅は、わざとらしくため息をついた。

「何かと思えば、そんな事か……私を倒さなければ……お前は丸焦げになってたぞ？」

「でも……」

「でもも、何も無い。ちゃんとした勝負で、私は怪我をしたんだ。気にするな」

そう言うものなのか？

残念ながら……俺には、良く解らなかった。

「大体、私は不死だから、あの程度の怪我で謝られても困る。それを言うなら……私も、お前の顔面に火を……あつ？」

妹紅が、いきなり俺の顔に手を伸ばして、頬に触れた。

なっ……なんだ!?

「お前、火傷は？」

ああ、そう言うことか……。

一瞬、また燃やされると思って、ビビったじゃないか……。

顔面大火傷は、マジで辛かったなあ……なかなか上手く直らなかったし……。

「能力で直したんだよ」

「お前の能力？ そう言えば……お前の能力は、なんだ？ なんで、弾幕を出さなかったんだ？」

「一辺に聞くな……そうだな、先ずは……」

と……まあ、色んな話をしている内に……妹紅と姫様の関係が何となく分かったり。

姫様の事も知れた。

月の都のお姫様で、禁じられたお薬を飲んで不老不死に、それで月の都を追放された……。簡単な感じだな……。

やっぱり、姫様は素敵だ。

その、エピソードを聞いて惚れ直した。

「お前っ……どんな神経してるんだ？」

と、妹紅に言われたが……素敵だと思ってしまったのだから仕方がない。

「恋は盲目てやつか？ いや、こいつの場合は元々か……」

妹紅が呟いた。

今、遠回しに常識知らずで言われた気がするが……？

「常識を持ったやつが、炎を素手で掴むか？」

「ごもつともです。」

「それじゃ、私は行くぞ」

すっかり話し込んでしまい、夜もふけたところ……。

妹紅は布団から出て、立ち上がった。

「おいおい……夜も遅いし大丈夫か？」

「愚問だな、私と戦ったお前なら分かるだろ？」

まあ、確かに妹紅だったらどんな妖怪も平気だろうが……。
万が一て事があるし。

「一晩泊まっていけないか？」

「……お前、寝ている私に何をやる気だ？」

「え……なに、その反応傷つく」

まるで、犯罪者を見るような目で見ていた。

普通に心配してたのに……。

俺ってそんなに悪いイメージあるか……軽く凹む。

俺が凹むのを見て、妹紅は「冗談だ」と言って、イタズラが成功した子どものように笑っていた。

「じゃあな、幽真」

初めて俺の名前を言って、妹紅は部屋から出ていった。

「妹紅、こんな時間までどこに行ってたんだ？」

「慧音か……ちよっと、出掛けてた」

「……なあ、妹紅。」

「なんだ？」

「輝夜の所で、何か良いことでもあったのか？」

「……いきなりどうした？」

「いや、何となく嬉しそうだったからな……」

「嬉しい事はなかったが……まあ、バカみたいにお人好しで面白い奴と会ったな」

第五話、不死の少女（後書き）

……いかがでしたか？

弾幕の描写がわからないし、幽真君の能力が強化しか使えないので、
ごつなりました。

感想と脱字、誤字の指摘お願いしますー！

第六話、そつだ、香霖堂に行こう（前書き）

……なんとか今日中に書き終わった……。

では、第六話始まります！

第六話、そつだ、香霖堂に行こう

「……………うう、眠い」

昨日と同じ時間に起きたが……………イマイチ目覚めが悪い。

昨日は夜更かしたからなあ。

まあ、怪我をさせたのは俺だから、看病をするのは当然だが……………。

「あつ……………そつだ、忘れてた」

着替えようとして、服を確認すると……………。

昨日の妹紅との戦いで、Yシャツの大きな穴が、何カ所も……………。

ズボンも、同様に穴が……………。

昨日は、着てなかったお陰で無事だった、ブレザーを羽織って隠していたが……………。

新しい服が欲しいッス……………。

師匠に相談してみよう。

第六話、そつだ、香霖堂に行こう

「新しい服？ いいわよ」

新しい服が欲しいと言うと、意外にあっさりと師匠はOKしてくれた。

「ちゃんとお給料は払うつもりだったし……………それで服を買ってきな

さい」

「ありがたいですけど……居候してるのに、お給料までくれるんですか？」

住まわせてくれて、仕事もくれて、お給料も貰える。

俺からすれば此所は天国だな。

もちろん……姫様もいるし。

「当たり前じゃない。雇ってるのだからお給料を払うのが当然よ」

「はい、これ」と師匠からお金を手渡された。

もちろん、お礼を言ってありがたく受けとった。

……今、俺は仕事を一通り終わらせて縁側で茶を飲んでいた。

「うーん……服を買いたいのも山々だが……欲しいのがあるんだよな」

その欲しいものとは、オーブンの事である。

永遠亭の台所には、ほとんどの、調理器具があるから、普通の料理を作るのには問題ないが……。

お菓子を作るには、オーブンが欲しい。

……服もやっぱり、外の世界がいい。

昨日、人間の里に行ったが……到底、俺が求めている物は無さそうだし。

「オーブンなんか、絶対に無理だよな……」

ここでは、オーブンなんて売ってるわけがない。

……はあ、都合良く外の世界の物が売ってるお店はないのか？

「ふっふっふ、貴方の願いを叶えましょう……」

「この声は……まさか!？」

いや、勿体ぶらなくても分かると思うが……俺は後ろに振り向いた。予想通りに……てゐが偉そうに仁王立ちをしていた。

「外の世界の物が欲しいんでしょう？ ……良いお店知ってるよ、お兄さん」

おお、てゐが言うのと恐ろしく胡散臭く感じるな……。でも、てゐだったら知ってるかもしれない。詳しく聞いてみるか……。

「で、なんだその手は？」

てゐは、ニコニコしながら、右手を差しだしていた……。

「なあに、気持ちでいいよ……気持ちでね」

まあ、ようするに……案内するから、なんか寄越せ……と言つと「るか？

そうだな……こいつは気に入るはずだ。

俺は能力で、とあるケーキを創り出した。

そして、てゐに差し出す。

「まさか、私がお菓子で動くと……良い匂いだね？」

よし、釣れたな。

因幡の白兔を魅了する、そのケーキの名前は……キャロットケーキ。横長なケーキで、本当ににんじんを使っている。本当は切り分けて、ホイップクリームやにんじんのソースをかけるのが理想だな。

「ニンジンのケーキだ……俺が探してる道具があれば、焼きたてが食えるぜ？」

俺の能力の数多くの欠点の一つ、焼きたてがだせない。そりゃ、味も香りも焼きたての方がうまいだろ？

俺からにんじんのケーキを奪うと……さっそくかぶりついた。てゐは、キャロットケーキを気に入ってしまったらしく……口一杯に詰め込んでいる。

「わかった、案内する……（もごもご）」
「食べてからでいいからな？」

てか、頬が膨らむほど詰め込んでるのに、どうやって喋った？

俺とてゐは、さっそく外の世界の物が売ってるお店に行くことにした。

今は、向かってる最中だ。

「本当にあるのか？ 外の世界の物が、売ってる所なんて……」
だって、外の世界では便利だけど……。

この世界では、使えない（使い方が分からない）ものなんだよな？

「まあ、店主が変わってるからねえ」

うーん、まあ、外の世界にも……ガラクタを売ってる店があるし……。

「前に行ったときに、店の前でふんどしで仁王立ちしてたし」

変わってるて、変態的な意味か!?

……いやいや、COOLになれ霧島幽真。

この世には「メイド・イン・ヘブン!」

と叫びだすメイドマニアが居るんだ。

きつと、その店主もふんどしマニアなんだ。

ふんどしに対する、愛を店の前で仁王立ちをする事で示してたんだ。

……俺までふんどしを進められそうだな。

「……困ったな、ふんどしの巻き方なんて知らないな……」

「え?」

俺の眩きに、てゐが目を丸くしていた。

「ついたよ」

「こ……これが? えっ、営業してるのか?」

店の前には、「香霖堂」と書かれた看板があるが……。

なんだが営業中とは思えなく、店は暗いし、静かだった。

「ほら、早く入るよ？」

てゐに促されて、店内に入ってみると……。

「うあああ……………」

店内は大量の物で溢れていた。

ケタ君人形、ゲーム機、不家の女の子人形、エロゲーのポスタ
ーやら……。

大きいものから、小物まで……ある意味なんでもあった。

「いらっしやい」

椅子に座って本を読んでいた、眼鏡の男が話しかけてきた。

「で……何をお探しかな？」

「あ、服が欲しいんですけど……」

「ああ、なるほど……僕のオススメはこれだよ」

男が取り出したのは……白と黒の服で、名前はメイド服。

「メイド服じゃねえか！」

なんだ、こいつ、バカなの！？

男にメイド服を進めるのは、おかしくない！？

「気に入らないかい？」

「気に入らないも、何もありません。職業は合ってるけど、性別
が合いません」

自傷癖で手が一杯なのに、なぜ女装癖までつけなきゃならんのだ…。

「似合うと思うんだけどな……」

「確かに、幽真なら似合うかもね」

お前ら、二人殴り飛ばすぞ？

ここで殴って気絶させたら服が買えなくから我慢だ。

「じゃあ、次の僕のオススメだけど……」

取り出したのは……パーティーグッズの白鳥の首付きのバレエ衣装。

「どこの部活の罰ゲームだ!!」

殴りはしないが、飴玉を額に向かって投げた。

「う……ごめん、ごめん……冗談だよ」

「初対面にそんな冗談が出来るのは……ある意味、尊敬に値するよ」

全く……色んな意味で、とんでもない店だな……。

「それはともかく……男物の服が欲しいんだっけ？」

「ああ、うん。なるべく動きやすいのがいい」

しばらくおまちください

しばらく待ってたら、男が服を大量に持ってきた。

「これが、外の世界の男物かな？」

「今度は……本当に普通の服か……」

「……もうしないから、警戒しないでくれないかな？」

「適当に漁ってみるか……」。

漁ってる間に、男と色んな話をした。

この男は、「香霖堂」の店主で名前は森近 霖之助と言っらしい。
この店は、外の世界の物から、妖怪の道具、冥界の道具まで、扱っ
ているらしく……常連も多いらしい。
俺も、ここにはお世話になりそうだ。

「これが……いいかな？」

雑談をしている間に、一方 行の黒と白のシマシマな長袖の服みた
いなのが、何着かあったからそれと……適当な黒いズボンと下着を
買った。

「あと、霖之助……オープンと電気を発生させる奴がないか？」

「オープン……？ そのの事かい？」

霖之助が指差した先には、俺が探し求めたオープンがあった。

「おお… 本当にあつた！」

「あとは…電気を発生させる道具？」

「ああ、オープンを動かすのに必要なんだよ」

「そつだな、ちょっと待っててくれ」

霖之助が奥に行ったので、その間にオープンを回収する。

結構でかいな……まあ、強化できるから……運ぶのは問題ないがな。

「これなら、どうかな？ 霊力を電力に変換出来るらしいんだけど

……」

霖之助が持ってきたのは……なんか、四角いルービックキューブみたいな奴だった。

「これ……どうやって使うんだ？」

「さあ？」

霖之助は、名前と何に使うのかは分かるが、使い方までは分からないらしい。

微妙な能力だな。

俺が言えた事ではないが……。

「うーん、適当に使ってみるか……」

「だ、大丈夫なのかい？ 下手すれば感電……」

「ギヤアアアアア……！」

早速、感電したが……なんとか使い方が分かった気がする。

「だ、大丈夫かい!？」

「うん、特に大きなダメージはないよ」

体を直しながら、電気の凄さをしつた。

しょうがない、追加設定で「ゴムに近い皮膚」でも付けとくか……。

「ふむ……凄いな」

「……感電しておいて平然といじりだす、君の方が凄いと思うよ」

そこは、ほら。

普通の人間じゃないし。

気にしたら負けだよ。」

何回か、感電したが……ビリビリ（今、命名）の使い方が分かった。ちやんと、使い方を上手くやれば電力を貯蔵できて、その電気で電化製品も使えた。

使いこなせれば、武器にも使えるか？

「霖之助、これいくら？」

「いや、あげるよ。……むしろ貰ってくれ」

霖之助は、かなり疲れた顔をしていた。さつきまで、あんなに元気だったのにどうしたんだ？

「不思議そうな目で見てるけど……君が感電すると周りにも被害が出てたんだよ？ 僕まで感電しかけた……」

「そうだったのか？」

「……君、色んな意味で面白いね……」

「そうか？」

ウドンゲさんにも言われたし……普通だと思っただがな。

「そこにある……オープンもあげるよ」

「本当か！？」

「だって、オープンを動かすために必要なんだろ？」

やべえ、霖之助、すげえ良い人じゃないか。

なんだったんだ、最初のメイド服を薦めてきたりとか。

「んじゃ、ありがたく頂くが……、悪いし時間もあるし……なんか、

仕事ない？」

「おや、意外と礼儀正しいんだね」

「誰が、礼儀正しくさせてくれなかったのかな？かな？」

俺は、あくまで、笑顔で問いかけた。

「あははは……それじゃ、商品を拭いて貰おうかな？」

すると、霖之助は心当たりがあるのか、わざとらしく目をそらしていた。

そこで、心当たりがない顔したら殴るが。

「それじゃ、霖之助。色々ありがとうな」

「いやいや、君も手際が良くて助かったよ。 お金は払うから、ま

たお願いするよ」

俺は、「考えときます」と言っておいた。

まあ、臨時収入が欲しいときに来てみるか。

↳その帰り道での事

ちなみに、てゐは……。

「すう……すう……」

店の中で寝てしまって、俺がおんぶして帰ることになった。

「……てか、寝たフリだろ？」
「あ、バレた？」

てゐは、悪びれもしないで、寝たフリを止める。
歩くのがだるいから、寝たフリをして運んでもらう作戦だったんだ
ろうな。

「バレたならしょうがない、降りようか？」
「……いいよ、その代わりしっかり捕まってるよ？」

多分、バレても俺なら運んでくれる事も計算に入れてな。
その証拠に……てゐは俺の頭を、軽くポンポンと叩いてきて……。

「ほらほら、早く帰らないと遅くなるよ」
「へーへー」

なんて事を言っていた。

背中、ニヤニヤしているであろう白兎をおんぶしながら……片手
でオープンと服を落とさないように持ちながら……俺は、帰路に急
いだ。

第六話、そつだ、香霖堂に行こう（後書き）

急いで、書いたので……誤字や脱字があるかもしれない、指摘お願ひします！

あと、感想もお願いしますね！！

第六話（番外編）、姫様とにんじんのケーキ（前書き）

さて、霧島幽真君のポーナスタイムです。

ゆっくりして行ってねー！

第六話（番外編）、姫様とにんじんのケーキ

「幽真（まだ）？」

「焦らすな、すぐに切るから待ってる」

夕食の後、台所で俺はビリビリ（灵力を電力に替える四角い道具の事だよ？）とオーブンを試しに使ってみた。

さつき、焼き上がったばかりのを切り分けて……皿に盛り付け……能力で出したにんじんのソースをかければ完成……っと。

「ほら、召し上げれ」

てるに出してやると……すぐに俺から皿を奪い早速で、一口目に入った。

「本当だ……焼きたて、うまい……」

「……本当に気に入ったんだな、にんじんのケーキ」

ちなみに、てるが食べてるのは、昼に案内の駄賃として創った、にんじんのケーキである。

「そんなに慌てて、食わなくてもいいだろうが……」

俺の言葉なんて聞かずに、てるはひたすら食べ続けている。すぐにてるのお皿は空になってしまった。

「おかわり！」

お皿を俺に差し出し、おかわりを要求してきた。

てか、こいつ一人で食べるつもりか……？

「ダメだ……他の人の分が……」

俺が言い終わる前に、てるは残りのケーキを持って逃げ出した。

「あつ……このっ……！」

流星はウサギと言うか……逃げ足はかなり早く、すでに姿は見えなくなっていた。

「まあ、気に入ってくれたならいいか……」

俺もとことん甘い奴だよな。

お菓子だけに……どうした？ 遠慮せずに笑っていいんだぜ？ と、下らない事を考えながら片付けをしようとする……。

「あら？ 美味しそうな匂い？」

「ひ……姫様!？」

ケーキの甘い匂いにつられて姫様が現れた!!

第六話（番外編）、姫様とにんじんのケーキ

「何もないのかしら？」

「いや……さつきまでケーキを焼いていたんですが……てめに全部取られてしまつて」

「……そうなの？」

ああ、姫様がガツカリしてる！？

何とかしなければ！！

「す……少し時間はかかりますが……よかつたら作りましょうか？」

「あら、いいの？」

よし、姫様に笑顔が戻つた！

その笑顔のためだったら、いくらでも作つて差し上げます！

俺は、張り切つて準備を始めた。

「お任せください！ では、姫様はお部屋で……」

「ううん、私はここで見てるわ」

「……えっ？」

見てる？ 何を？

特に見るものなんてないよな？

姫様は適当な椅子に腰かけていた。

「だから、幽真がお菓子を作つてるところを見させて貰つわ」

な……なんだと！？

姫様に見られながらお菓子を作るのか！？

いや、落ち着け、COOLになれ霧島幽真……。

きつと……姫様は、俺が異物を入れないように見張るだけなんだ。

姫様になると、あえて自分が口にするものは、自分で作業行程をし

「っかり見るんだ……流石、姫様！」
ちなみに、夕食を作っているとこを見られた事はないが……気にしない事にしよう。

「わかりました……でも、退屈かもしれないですよ？」
「それを決めるのは私よ？ さあ、早く作ってみて？」

……姫様は子供のようになり、キラキラとした目でこちらを見ていた……。
落ち着け、緊張するのは確かだが……間違つて分量を間違えてしまつたり、味付けに失敗したりなどして、不味いものを姫様に食べさせるわけにはいかない……。
……集中だ、集中しろ……。

「後は、オーブンの温度、時間を確認して……焼き上がれば完成だな……」
「お疲れ様」

気づくと、姫様が椅子に座っていてこちらを見ていた。

「あれ？ 姫様、いつからそこに？」
「最初から見てたわよ？」

あつ……そう言えば、そうだったな。
……すっかり集中していて、忘れていた。

「す……すみません！」
「いいわよ、良いものが見れたもの」

良いもの？

ああ、姫様にとってお菓子作りはそんなに、珍しい物だったのか？

「幽真つて、あんなに真剣でカッコいい顔が出来るのね？」

……おや、幻聴が聞こえたぞ？

今、姫様の口から「カッコいい」なんて単語が聞こえた？
この俺に対してだ。

「か……カッコいい？」

「ええ、お菓子を作ってる時の表情、永琳に似ててカッコ良かったわよ？」

「師匠に？」

姫様は、又も俺が惚れ直してしまうような、笑顔で言葉を続けた。

「永琳が真剣になってる時の顔にそっくりだったわ」

「あはは……俺には勿体無い言葉ですね」

あくまで、表は軽く受け流す感じで態様してるが……今、踊り出す位に嬉しい。

だって、好きな人にカッコいいと言われたんだぜ？

ヤバイ……顔がニヤケてしまう……。

「嬉しい？」

「ま……まあ、嬉しいと言えば……嬉しいです……」

どうやら姫様には、バレているようだ。

……なぜか、姫様も嬉しそうにしていた。

「でも、意外だったわ」

「意外……何がですか？」

「幽真の事だから、もっと……ニコニコと楽しそうに作ると思ってたから」

ああ……外の世界で、俺が良く言われてた一言の一つだ。だけど、姫様に言われた瞬間に、何故か異様に引っ掛かった。

（あれ……？ 前に姫様に言われた気が……いやいや、そんな事はないはずだ）

ここに来てから、お菓子を作ったのは今日が初めてだから……言われた事は……なんだ、この違和感……？

ああ！！ めんどくさい、細かい事は気にしない！！

「幽真……？」

「あ、すみません……考え事をしてました！」

姫様は「そう？」と言って、不思議そうにしていた。

……今日は、随分と姫様に対して無礼をしてしまう日だ……。

「もちろん、楽しんで作ってますよ？」

俺は気を取り直して、姫様の問いに答えた。

「ただ、お菓子は……材料の分量や混ぜ方の一つでも、小さなミスをすると美味しさや膨らみ方が違うんです……そのせいで集中しなければ、いけないんで……」

「へえ……大変なのね」

正直に言つと、お菓子を作ってるより……可愛い姫様と話す方が緊張するけどさ……。

「よし……後は、切り分けて……」

俺は再度、型から取りだし、焼き上がったのを切り分けて……ソースをかけて、皿に盛り付ける。

「どうぞ、召し上がれ」

姫様にお皿を渡し、俺も適当な椅子に座る。

姫様は、フォークでケーキを切り分けて口に運んだ。

「……美味しい、流石、幽真ね」

「ありがとうございます」

あくまで、冷静を装うが……気を抜くとニヤケてしまいそうだった。その一言のためだったら、俺はどんなお菓子でも作りますとも。

「あれ？ 幽真は食べないの？」

残り三つのケーキを見て、姫様は言った。

まあ、普通はてゐは食べた上に、残りを奪ったから、一つは俺のぶんのはずだが……。

「ええ、五人分にするとスツゴく小さくなってしまうんで、俺のはいいです」

まあ、材料が少なくても五人分作れなかったのは、てゐのせいなんだが……。

あそこまで、気に入ってくれるのは、普通に嬉しいし……。
俺は、美味しく食べて貰えれば十分だしな。

「んー……じゃあ、はい」

姫様は、フォークでケーキを刺してを差し出してきた。
なんぞこれ？

「どうかしましたか？」

「私の一口あげるわ」

ああ、あのカップルがよくやってる……あーんて奴か。

「あーん」

姫様が笑顔でフォークを差し出してくる。

……なに、この姫様！！ 凄く可愛いんだけど……！
ヤバい、顔が赤くなりそうだ……。

「……どうしたの？」

「いや、あの……」

「もしかして、私じゃ不満なのかしら？」

「そんな事はありません……！」

やべ、予想外に大きな声を出してしまった。

……いやでも、姫様から「あーん」とかして貰うなんて……天罰と
かないよな？

……いやいや、……COOLに冷静に落ち着いて、ゆっくり考えて
みる。

せっかく、姫様が自分が食べるはずの一口を俺にくれるんだ……

姫様のご厚意を無駄にするほうが天罰があるだろ……。

俺は、決心を固めて口をあけた。

「あつ……あーん」

「あーん」

ケーキが口に運び込まれる。

うん、普通にうまい。

分量も間違えてないし完璧だ。

それに、姫様が食べさせてくれるので、旨さは倍増だ。

「おいしい？」

「ええ……」

ただ、死ぬほど恥ずかしいけどな。

本当だったら、「姫様に食べさせて貰うのは、格別に美味しいです
よ」と笑顔で言うくらい、気を利かせる位の事はしたいが、無理だ。
正直、姫様の顔すら見れていないのに言えると思うか？

「そう言えば……このケーキの名前はなんていうの？」

「ああ、にんじんのケーキですよ」

「ええ！？ お野菜のケーキなの？ ……外のお菓子は凄いわね…
……」

物珍しげに、にんじんのケーキを眺めていた姫様は、なんだか可愛

かった。

にんじんのケーキを食べ終わり、姫様が部屋に戻られたので、俺は一人で後片付けを終えて、茶を飲んでいた。流石に疲れたな……。

「幽真？ ちょっとお願いがあるのだけど……」

「あつ、師匠？ なんですか？」

師匠のお願いとは……薬を作る材料が足りないから、人間の里まで買ってきて欲しいとの事だった。

それぐらいすぐに行けるし……疲れてるけど大丈夫だろ。

ケーキを師匠に預けて人間の里に向かった。

……なぜか、嫌な予感がするのは……気のせいだよな？

第六話（番外編）、姫様とにんじんのケーキ（後書き）

ちょっと、いつもより短いけど……いいよね？番外編だし。

感想をお願いしますー！！

第七話、暗闇の妖怪（前書き）

PV一万アクセス越えました！

こんな駄文を読んでくれてありがとうございます！！

では、第七話始まります！！

第七話、暗闇の妖怪

「えっ……奥さんが帰ってこない？」

「ああ、そうなんだ……もしかして、妖怪に食われちゃったのかなあ……？」

師匠にお使いで頼まれたお店は、魔法の森の植物やキノコを売る珍しいお店らしい。

そのお店に行くと……このお店の店主の奥さんが、魔法の森にキノコを取りにいつて帰って来ていないらしい。

しかも、奥さんが帰ってこないと、頼まれたキノコが無いそうだし……。

……うーん……魔法の森かあ……なんとかなるかな？

「んじゃ、俺が探してきますよ？」

「ええ！？ そ……外は夜だぞ、妖怪に襲われたらどうするんだ！？」

なんつーか、この店主はヘタレだな……。

奥さんが、帰ってこないなら心配するだけじゃなくて、行動して欲しいよ……。

第七話、暗闇の妖怪

「大丈夫、俺はそこそこ強いですから」

「それじゃ、お願いできるかな……？ あ、君が妖怪にやられても化けて出ないでくれよ！？ あと、金は払わないからな！？」

……いや、もう幽霊なんだけどな……。
あと、最後の一言すげえ余計だ。

「おーい！ 霖之助！！」

今、俺は香霖堂のドアを叩いている。
なぜか？ 理由は……。
店主からいつも奥さんが歩くルートを教えて貰い、その道に香霖堂
があつたからだ。

香霖堂は、魔法の森の道の中にあるから……。もし、「ケガをして帰
れない」「迷つて夜になってしまい、帰るに帰れない」とかの理
由だったら、安全に帰るために……。ここで休ませて貰い、朝になっ
たら帰るのが一番だよな？

ちなみに、あの店内に外の世界の薬局によくある、カエルの置物が
置いてあつた。

あんな、置物を売っているのはここだけだろ。
この店の常連か……。顔見知りだと想定しての推理だけど……。
外れて、ここに居なかつたらお手上げだな。

「……なんだい？ また君かい？」

店の扉が開いて、霖之助が顔をだしてくる。

「やあ、霖之助。夜分遅くすまないね」

「……君は、営業時間と言つものをしらないのかい？」

「いや、買い物に来た訳じゃないから、営業時間なんか関係ないだろ？」

「へ……屁理屈だ」

俺は、霖之助に事情を説明した。

すると、俺の推理は当たっていたらしくて……

「ああ、多分、彼女の事だね？ 魔法の森で足を怪我したらしくて

……呼んでこようかい？」

「頼むな」

霖之助は、店の奥からおばさん……じゃなくて、奥さんらしき人を連れてきた。

奥さんに事情を説明すると……。

「あら？ わざわざ、探しに来てくれたの？ 全く……お客さまにそんな事を頼むなんて……本当に甲斐性ないんだから……ごめんねえ？」

奥さんは、わざわざ腰を曲げてお辞儀をしてくれる。

内心、「全くだ」とも思ってるが、声に出さないのが大人のマナーだな。

「いえいえ、自分から引き受けたので……。それより無事でよかったです」

「あら、いい子ねえ？」

奥さんは嬉しそうにしている……ふむ、奥さんはいい人だな。

店主はアレで、イラツとするが。
だから、師匠は俺に頼んだのかな？

「取り合えず、朝には帰ると主人に伝えて貰っていいかしら……夜道を歩くのは怖くてねえ……」

「あ、はい、分かりました」

あ、そうだ。

師匠のお使いの品を買わなきゃ。

俺は、ズボンに手を入れて……メモを探してみた。

「あ、そうだ、この名前のキノコてありますか？ 売って貰いたいんですが……」

俺は、師匠のお使いメモを奥さんに渡す。

なんと、奥さんはタダでそのキノコをくれた。

こうして、お使いは終了したが……。まだ、店主に奥さまは無事だと言っことを報告をしなければならぬ……。俺は、さっさと人間の里に向かうことにした。

「ねえ？」

人間の里に向かう帰りに……。

小さな女の子に話しかけられた。

黒いワンピースを着た、眼の色が暗めの赤で、髪は黄色のショートヘアに、頭に赤いリボンをしている。

「……なんだい？」

なぜか、嫌な胸騒ぎがするが……その子に返事をする。

「貴方は食べてもいい人間？」

思わず寒気がした。

しかし、俺はあくまで冷静に話す。

「君は妖怪？」

「うん、貴方は？」

「俺は……人間かな？」

「そーなのかい」

すると、女の子はニヤリと笑う。

そして、とっても嬉しそうに……。

「じゃあ、食べても大丈夫だね？」

「……誰が、食べられるかよ……加速っ！」

俺は、「脚力強化」で一気に女の子に近づき、足を強化して蹴りを食らわす。

いきなり、少女に蹴りを喰らわすのは……ちょっと心が痛い……嫌な予感がするから早く帰りたいんだよ！

「きゃー!!」

可愛らしい声をあげて、
少しだけ後ろに下がる。
強化はしてたはずだが……なぜか手応えは軽かった。

(……なんで？ 俺は確かに、強化したはずなんだが……)

……COOLになれ、霧島幽真……ここで、焦ってはダメだ……。
今は、逆にそれを利用して……あくまで冷静に……脅す。

「今のは手加減したぜ？ 怪我したくなかったら……消えろ」

自分のなかで一番、ドスが効いている声を出したはずだが……。
女の子は……ニコニコと上機嫌だった、獲物の生きがいいから喜んで
いるようだ。

……ダメだ、脅しが効くタイプじゃないな。

むしろ、俺が脅しなんて向かないタイプなのか？

「しょうがない……かかってこいよ……」

今更、強化したはずなのに、蹴りが弱かった理由がわかってしまっ
た。

女の子が弾幕を飛ばしてくるが、俺はお菓子で創った盾で守る。
よし、妹紅のより断然弱い弾幕だ、盾で防ぎきれる。

……でも、危機的状況なんだよな……。

(でも、ダメだ……腹が減って力が……)

俺の能力の弱点の一つに、「空腹になると弱くなる」てのがある。
俺のお菓子の体は、エネルギーが切れると弱く（もろく）なる。
今の状態では、お菓子も創り出せなくなるから……自分でお菓子を
創り、食べて補充する事は出来ない。

（補足だが、お菓子を創るとお腹が減るんじゃない……お腹が減
ったらお菓子が創れなくなるのだ。だから、最初に迷いの竹林で
迷ってた時に、あめ玉しか出せなかっただろ？）

（さて、どうしようかな……）

打開策を考えていたら、盾にヒビが入った。

「マジかよ……！！」

直す暇もなく……盾が壊されて……何発か弾幕を食らってしまっ
…。

俺は地面に倒れる。

……と言っか、倒れた。

食おうと近づくとところをぶん殴る作戦なんだが……。
流石に騙されないかな？

「なんだ、意外と弱かったな……いただきまーす」

女の子は笑顔でこちらに近く……やられたと思って、すっかり油断
しているようだ。

……本当に、騙されたよ……でも都合だ。

そして……俺の首に噛みつきつこうとするが……。

「うらああああああ……！」

俺は、頭突きを食らわせて、怯んだ隙に強化した右手でぶん殴る。
妹紅を倒したコンボに近いが……。

「……騙すなんて、酷いのだ」

女の子は、後ろに下がって……頬を抑えながらこちらを睨んでいた。
こんな状況じゃなきゃ……おもちゃえりい〜したいほど可愛いんだ
がな……。

「いや、まさか本当に騙されるとは思わなかったがな……」

どうやら、この妖怪は頭が弱いらしいな……。
そんな事を考えながら、女の子から離れる。

強化して殴ったが……全くと言って良いほど……威力が無さすぎる。
強化したはずなのに、してない時と変わらない。
やっぱり、普通の強化じゃだめか……。

「もう、怒ったよ……」

女の子は、ニヤリと笑いながら……スペルカードを取り出した。
俺もスペルカードを取り出す。

こうなったら、俺一人だが……背水の陣!!

俺はこのカードに賭けてやる!!

「夜符「ナイトバード」!!」

「強化「鋼葉子」!!」

なんとか、発動は出来たらしい。

さっそく、接近戦に持ち込もうとするが……。

真つ暗な闇が辺りを包んだ。

「……………はあ!?!」

まさか、あの妖怪の能力か……………!?

辺りが真つ暗で、本当に何も見えない。

しかも、暗闇の中から弾幕が飛んでために、避けるのに必死だった。

「くそつ……………接近戦に持ち込めねえ……………」

接近できないなら、頼りにしてた、「鋼菓子」が役に立たない。

俺は、この暗闇を利用して逃げる事を考えたが……………すぐに不可能だと分かった。

多分、逃げたとしても、すぐに力尽きてしまうだろう。

理由は簡単、「鋼菓子」を使って逃げる余力を無くしたから……………つまり自爆したのだ。

選択肢は2つ。

『逃げる』『玉砕する』

もちろん、両方死亡フラグだ。

だったら……………逃げて食われるなら、玉砕覚悟で突撃する方がマシか……………

「……………行くぞ!?!」

「鋼菓子」の効果が続くのは後少しだけ……………だから、これが倒すとすればラストチャンス。

「うああああああああああああ!?!」

そう、本当に玉砕しにいくだけ。
アイツの所まで走って……全力で殴るだけ。
結果は……。

地面に無様に転がってる俺を見れば、分かるだろ？

つまりは、失敗……。

単純に、「鋼菓子」の効果が切れて、弾幕をモロに喰らった……それだけだ。

(ダメだ、死んだなこりゃ……)

殺されるなら姫様がよかったな……。

まあ、あの子も可愛いからいいかな？

女の子は闇を消して、近づいてくる。

スペルカードを使ったせいで、エネルギーを使いきったせいか……
受けた段幕による激しい痛みのせいか分からないが……意識が薄れてきた。

やっぱ、死にたくねえな……。

もっと、姫様と話したかったな。

もっと、姫様を見ていたかったな。

もっと……いや、ずっと永遠亭で働いていたかったな……。

諦めたその時だった、俺と女の子の間に……誰かが割り込んできた。

「間に合ったわね……もう大丈夫よ、幽真」

「し……師匠お……」

諦めた時に……俺の前に……弓を持った師匠が現れた……。

(……カッコいい……流石……師匠だな)

俺が覚えているのは……ここまでだ。

「……………あれ？」

「良かった、起きたわね……」

俺は、目覚めると……自分の部屋で寝ていた。

……………師匠が心配そうに、こちらを見ている。

「師匠……」

「事情は、店の主人から聞いたわ」

あのヘタレ店主から？

そう言えば、なにか忘れてるような……

「あ、伝言……！！」

「安心なさい、ちゃんと伝えたわ……」

俺は、意識が完全に失う前に、師匠に伝言を頼んだらしい。

「その、ごめんなさい……えっと……すみません……」

駄目だ、キノコは無くしてるし、他にも謝ることが多すぎて……何

から謝ればいいか分からない。

「今は謝ることが先かしら？」

師匠の声で、気づく。

そうだ、先ずはお礼を言わなきゃな。

「えっと……助けられて、ありがとございます
「よろしい」

師匠は、笑顔で俺の頭を撫でてきた。

なんとなく、恥ずかしいが……師匠が止めるまで撫でられた。

「あと、お使いの事は気にしないでいいわ」

そう言って、師匠は立ち上がり……部屋から出ていった。

「それじゃ、もう寝なさい。おやすみなさい」

と言い残し、ふすまを閉めた。

「……何してるんだ、俺は……」

俺は、悔しくて情けなくて……親指を思いつきり、噛み締める。
皮が剥がれて、血が出てきたが関係なしに噛み締める。

師匠にあんなに、気を使わせてしまうとは……情けないにも程がある……。

今回の敗北は、強化に頼り過ぎていた。

もつと、冷静に落ち着いて観察をしていれば……逃げれた……いや、勝てたかもしれないのに……。

ふと、俺は……師匠の後ろ姿を思い出す。
あのカツコよくて……頼れる背中を……。

「俺も……強くなりたい……」

無意識に呟いていた。

『俺も……強くなりたい……』

幽真の部屋から、そんな呟きが聞こえてきた。

多分、無意識に出た言葉なのだろうが……私の心に残った。

最初、帰ってくるのが遅いから、心配して店に行ったら……店主から話を聞いて驚いた……いや、呆れてしまった。

まさか、初対面の人の奥さんを……探しに行くなんて……。

「お人好しにも、程があるわよね……」

襲われた相手がルーミアで、運良く暗闇を見つけていなければ、幽真は食べられていた。

しかも……本人は覚えてないようだけど……自分が気絶する最後の最後で……。

『師匠………キノコ……なくしちゃいました……』

『……そう』

『あと……奥さんは……無事でした……伝えて……』

と言つて、意識を完全に失つたのだ。

……普通は、意識が途切れかけているのに、お使いや伝言を心配しない。

……なんて、面白くて変わつてる人間だ。

私は長く生きているが……あれ程お人好しで、変わり者は見たことがない。

……当たり前だ、私が生きて来たのは、そんな人間はすぐに蹴落とされてしまう、息が詰まる世界だったから……。

「……それが、幽真の魅力なのかしら？」

どうやら……私は、霧島幽真の事を入ったようだ。

第七話、暗闇の妖怪（後書き）

うーん……色々都合が良すぎたかな？

でも、読んでくれてありがとうございます！

次回はまた、番外編でコメディー多目ですよ！

よかったですら、感想をください！！

第七話（番外編）、敗北の翌日（前書き）

やる気とは裏腹に暇がない……なんとか、書き上がった……。

では、第七話番外編が始まります！！

ゆっくりしていいってね！！

第七話（番外編）、敗北の翌日

「ふああああ……」

大きくあくびをしながら、掃除をする。

見苦しく始まってすまない……。

でも、分かってくれないか？

昨日あんな事があった後だから……俺はほとんど寝ていない……つ

ーか寝ずに色々と考えてしまった。

考えすぎのお陰で、頭がボーとするし……ちょっと……気が滅入っている。

七話（番外編）、敗北の翌日

「ふああああ……」

「随分、眠そうですね？ ……大丈夫ですか？」

あくびをしてる最中に話しかけられた。

俺は、大急ぎで口を閉じて……ウドンゲさんの方に向いて、質問を返す。

「………ちょっと昨日眠れない事がありました……」

「そうなんですか……？」

うーん………ちょっと、ウドンゲさんに相談をしてみようかな？

もしかしたら、誰かに相談するだけでも楽になるかもしれないし……。

ウドンゲさんなら、笑わずに聞いてくれそうだしな……。

取り合えず、ウドンゲさんに昨日の話をして……。そして『これからどうすればいいか』と聞いてみた。

「幽真君は……最近、能力に目覚めたばかりですし……これから頑張れば良いと思いますよ？ 何事も努力が大事と言いますし……」

と、答えが返ってきた。

確かにウドンゲさんの言う通り……俺は幻想郷に来てから、一週間もたっていないよな？

更に……よく考えたら、俺さ。

まだ、ここに来て一週間もたっていないのに……

目覚めたら迷いの竹林にいて……迷って、ぶっ倒れて……。

助かった物はいいもの……妖怪と人間に分類出来ずに幽霊の扱いされたり、初対面の見た目は子供の妖怪にロリコン扱いされたり。

憧れの能力は微妙な方法にしか使えなくて。（いくらなんでも、出来ない事が多すぎと思わないか？）

姫様の命令で、炎の不死の少女と戦って顔面を大火傷して……。

拳げ句の果てに昨日は、疲れてる所を襲われて、妖怪に食われかけた……。

さて、問題です。

「幽真君！？　なんで泣いてるんですか!？」

なんで、俺は泣いているでしょう？

正解は、俺にも分からないです……。

「大丈夫です……手首を切りたくなっただけです……」

俺は、何となく……ウドンゲさんに弱音をもらしてしまった。

すると、ウドンゲさんは急に焦りだした。

「幽真君!?　どうしたの!？」

「間違えました、切り落としたいです」

「それは、手首の話しだね!?　いや、手首も切り落としちゃダメだけど!」

あ、やばい……すっかり弱気になって、ウドンゲさんの前で自傷行為をする所だった……。

危ない、危ない……。

取り合えず、落ち着け……COOLになるんだ……。

「大丈夫ですよ……ウドンゲさん……」

「な、なにがですか……?」

ウドンゲさんは、すっかり涙目になっていた……。

そんなウドンゲさんを安心させるために、俺は優しく……爽やかな笑顔で……。

「どうせ、斬ったって治せるんですから……切り落としても平気ですよ?」

その言葉を聞いた、ウドンゲさんは、安心する所か……本当に真っ青な顔になって。

「幽真君!! 今日、もう休んでください!!」

「……? どうしたんですか?」

「いいから、部屋で寝てください!!」

「え……え、え?」

俺なんか不味いこと言ったかな?

ウドンゲさんに引つ張られながら、そんな事を思っていた。

「うん、あの時の俺は……おかしかったな」

何が不味いこと言ったかな? だよ、不味いことしか言っていないだろ。

熟睡して目覚めて正気になった一言目だった。

あの後、ウドンゲさんは、俺を自室に連れていき、布団をしいて俺を寝かせ……寝るまでそばに居てくれた。

「ウドンゲさんには、悪い事しちゃったなあ……」

珍しく細かい事を気にして、悩みすぎた結果があれだ。

「あ、起きたんですか!？」

ウドンゲさんが部屋にやって来た。

手には料理が乗ったお盆を持っている。

多分、俺の昼飯かな？

「もう大丈夫ですよ……すみません、ウドンゲさん」

「……本当に大丈夫ですか？」

俺は「ええ」と短く答える。

もう、大丈夫だと思ったのか……ウドンゲさんは、ホッとした顔をしていた。

「あの、師匠がこれを飲めと……」

「これは？」

なんだか、カプセルの様な薬を渡されたが……。

「鎮静剤なら結構ですよ？」

「違いますよ」

ウドンゲさんは、苦笑しながら否定した。

どうやら、この薬はビタミン剤みたいなものらしい……。

どうやら、師匠が……。

『きっと……この世界に来て……状況の変化のストレスや疲れが溜まって、今更パニックを引き起こしたのね……そこにある薬を飲ませて、ゆっくり休ませなさい』

と言っていていたらしい……流石、師匠だ。

見事にその通りだった。

今までの状況の変化のストレスが貯まっていたのは確かだし……昨日の敗北による、悩みすぎ、寝不足のストレスが重なって……暴走してしまった。

まあ、自傷癖はいつもの事なだけどさ……。

「……やっぱり、幽真君は……元の世界に帰りたいですか？」

なぜかそんな事を、ウドンゲさんが真剣な顔で聞いてきた。

……帰るねえ……考えた事ないや。

確かに、向こうの世界でやり残した事はあるし。

学校や親が心配しているだろう……。

でも、俺の答えは一つだった。

「俺は、ここに居たいです」

「本当ですか？」

なぜか、ウドンゲさんは身を乗り出して聞いてくる。

「もちろんですよ。……ここでのお仕事は楽しいですしね」

俺はあえて軽い口調で言ってみた。
でも、これが本心だ。

俺は、永遠亭での生活を気に入っている……むしろ、帰れなんて言われたら駄々をこねるに違いない。

「……そうですか、なら良かったです」

俺の言葉に嘘が感じられなかったようで、ウドンゲさんは安心してくれたようだ。

「あ、お腹へってますか？ お昼御飯を持ってきたんですが……」
「もちろん、ありがたくいただきます！」

ウドンゲさんが運んできた料理を食べて、薬を飲んだら元気がでてきた。

今、思うとくだらない事で悩んでたな……。
負けたのなら、もう負けないように強くなれば話だし。
俺は、死ぬ間際ですら……ここで働いていたいと願ったのに……なんで、こんな事を徹夜で悩んでいたのだろうか……。
アホらしくてしょうがない。

「幽真は、居るかしら？」

しばらく、ウドンゲさんと談笑していると……。
俺の部屋に姫様がやってきた。

「はい、何かご用でも？」
「幽真は、和菓子も作れるかしら？」
「ええ……作れますけど」

ああ、なるほど。
姫様はオヤツが欲しいらしい……。
俺は布団から起き上がる。

「分かりました、和菓子ですね？ 今、作ります」

「あ、幽真君は休んでた方が……」

「大丈夫ですよ、悩みも解消しましたし、寝不足も治りましたしね」

あ、もちろん、体調が悪くても姫様の頼みならなんでも聞くけどね。しかも、今回はあんなアホらしい悩みなのに、姫様の頼みを聞けないなんて、それこそ手首を切り落とすたくなってくる。

「和菓子ですよね…… 姫様は何が食べたいですか？」

「えっと…… おまんじゅうとどら焼きと、お煎餅と……」

「輝夜さま、食べすぎですよ……」

「いいですよ、姫様のためならなんでも作りますよ！」

「幽真君は、相変わらず姫様には甘いですね……」

「お菓子だけに？」

「…… 幽真君、笑えばいいのかな？」

「ひ…… 姫様なりのジョークですよ、面白いですよ？」

「でしょ？ でしょ？」

((凄い、ドヤ顔だな……))

口では、なんでもいくらでも作ると言ったが……。

もちろん、姫様の健康と体重を考えて…… お饅頭だけにしておいた。姫様は、最初は不満そうだったが…… 俺の作ったお饅頭を美味しくうに食べていた……。

姫様ガチで可愛いです…… お持ち帰りしたいけど…… 師匠に殺されそうだから止めといた、まだ死にたくないです。

…… 確かに、外の世界よりかは死亡フラグが多くて、色んな意味で辛い世界だけど……。

俺は、ここがいい。

だって、こんなに可愛らしい姫様が居るから

(……姫様が居ない世界なんか帰りたくない)

そんな事を思っていると……なぜか、喉が痒いんですけど……。
痒い、痒い、痒い……。

「幽真君……？ そんなに喉を掻いちゃ……」

分かっています……でも、喉が痒いんです……！

「あの……血が……血が……！？」

分かっています、俺も止めたいんですか……！！

俺はいつ、雛 沢の病気になったんですか！？

しかも、フリーのカメラマンと同じ症状になってるし……！！

「幽真……あなた」

姫様がこちらを見ていた……まさか、姫様……俺の心配を……？

「笑いのために、喉を掻きむしるなんて……流石ね」

姫様に誉められたけど……これって、喜ばしいのか？ 泣けばいいのか？

俺には、判断出来ない。

「幽真君は笑いをとろうなんてしてませんか……！」

「違うの？ てっきり……一発芸だと思っただけ……」

どうやら、姫様の中では自分の喉を掻きむしるのは一発芸の部類らしい。

流石、姫様、一般人には理解できない高度なお笑いセンスだ。

「なんで、幽真君が姫様を尊敬の目で見てるのか分からないけど……早く止めてください！」

いや、止めたくても痒くて止められない……ヤバイ、そろそろ、真つ赤な液体を吹き出す噴水になってしまふ気がする……！！

「遅かったわね……！」

師匠が息を切らしてやってきた。

師匠があんなに、慌てるなんて珍しいな。

「……なんで、幽真は、掻きむしりながら……あんなに落ち着いてるのかしら……」

師匠がこちらを向いて、呆れた顔をしていた。

いや、血が抜けすぎて逆に冷静になっちゃって……。

血も血液に近いお菓子なだけどさ。

「ど……どうしたんですか？ お師匠さま……？」

「ウドンゲ、貴方……お薬を間違えて持ってたわね……」

「え！？ この惨劇は私が原因なの！？」

まさかの犯人だったな……。

あ、そろそろ限界だね。

こうして、俺は赤い液体を吹き出す噴水になったとき。

……………今日の教訓。

薬はちゃんと、確かめてから飲もうね！

第七話（番外編）、敗北の翌日（後書き）

しばらくはコメディが多めの予定ですよ！

感想をくれると嬉しいです！待ってますよー！！

第八話、修行の日々（前書き）

では、第八話が始まります！

……タイトルと内容が合ってるかどうかは疑問ですが……ゆっくり
していったね！！

第八話、修行の日々

あの妖怪に負けて、一週間と数日がたった。
相変わらず、俺の能力は強化しか使えないが……一様、状況は色々
と変化はしている。

「幽真、それが終わったら来なさい」

「あ、分かりました」

先ずは、師匠が積極的に俺に稽古をしてくれる事だ。
俺は、早く稽古がしたくて、俺は片付けをするスピードを早めてた
が……。

「最近、お師匠さまに呼ばれる回数多いね？」

てゐが後ろから声をかけてくる。

片付けの手を休めずに、俺は答えを返すことにした。

「まあな、でも……俺としては嬉しいことだよ」

「ふうん……まあ、頑張ってるね」

「お前もたまには働けよ」

「それは無理だね」

と堂々とサボリ宣言をして、走り去ってしまうてゐだった。

……ちなみに、ここでの仕事や家事は、ウドンゲさんと俺が全てや
っている。

この、一週間と数日で……ウサギとてゐは、労働面では役に立たな
いと言うことが分かった。

できる仕事は、精々……永遠亭のマスコットや餅つきくらいだな。

「よし、終わったな……」

そんなことを考えていたら、片付けが終わったので……俺は師匠の元へ向かった。

第八話、修行の日々

「よっ……!!」

俺が放った矢が的の真ん中に刺さる。

俺は最近、武器として弓を使っている。

師匠に武器の使用を勧められたから……。

俺は、遠距離の武器、弓矢にすることにした。

弓を選んだ一番の理由は……まあ、今度話そう。

取り合えず、理由の一つとして……近距離攻撃は拳で十分だから、遠距離を用意したのだ。

だから、最近の稽古は師匠に弓を貸してもらい、弓の訓練をして貰っていた。

「……集中っ……!!」

俺は、狙いを定めて矢を五本……連続で射つ。

放った五本の矢は……全ての的の真ん中に刺さった。

「COOL!! 出来ました、師匠!!」

嬉しくて、俺は師匠に向かってダブルピースサインをする。
しかし……師匠は、驚きを通り越して呆れた表情をしていた。

「あ、今どきダブルピースサインは古かったですか？」

「……そうね、確かに古いわね」

やっぱり、スリーピースにすればよかった……。

俺が後悔していると、師匠が苦笑しながら、「その事じゃないわ」と呟く。

「……まさか、本当に一日で出来るようになるとは思わなかったわ」

「まあ、頑張りましたから!」

「最初は驚くくらい下手だったのにな」

「確かに……あれは、黒歴史ですね……」

まあ、今ではコツをつかんで上達したが……最初は酷いものだった。

先ずは、力が無すぎて弦が引けない。

今度は、強化したら、弦を引きちぎってしまった。

なんとか、丁度良い加減を見つけたが……。

最初の頃の、俺の射る矢は……見事な位的に当たらない。

上に下に横に後ろに……あらゆる方向に飛んだ。

師匠の方に飛んだ時は……色んな意味で驚いた……。

だって、師匠は矢を素手で掴み……へし折ったのだ。

もちろん、師匠は怒っていて……自傷癖がある俺ですら、辛かったお仕置きが待っていた……。

これが、最初の一週間位続いた。

「でも、コツを覚えてからの上達ぶりは……驚いたわ」
「ですよね!？」

そう、俺はコツを覚えてからの上達は早い方だ。
お菓子作りも家事も勉強も……コツや、やり方が解れば一気に成長する。

「それに、幽真事態にも弓の才能があるみたいだし……」
何かをブツブツと呟いた後に、俺に近づいて……

「……………幽真、よく頑張ったわね。」

師匠は、手を伸ばし俺の頭を撫でる。

うん、なぜか最近、師匠が俺の頭を撫でてくる。
軽く弟扱いをされている気がするし……。
まあ、気持ちいいから問題ないけどさ。

……………さてと、やる気も補充されたし……………次も頑張りますか!!

「次は、どうすればいいですか？」

「そうね……………じゃあ……………」

今度は、走りながら的に矢を射つ……………結構、実践的な訓練になった

な……。
取り合えず、どんなやってみなければ、コツも何も解らないか……。俺は、弓を構え直して……。走り出した。

「今日は、ここまでで良いわ」

師匠から声がかけられる……。気づくと、辺りは夕日で赤っぽくなっていた。

やっと、コツを掴めそうだったのに……。

この訓練は……。思っていたよりも辛かった。

弓も重くないが、持って走るとなると話が別だし……。

狙いも、なかなか定まらない……。

なんとか、的には当たるまでになったが……。正直、的の真ん中に当てるのは無理だと思う。

でも、動きながら弓を正確に射てるのは……。結構、大きな力になるはずだ。

「ふう……」

俺は、その場に座り、そのまま後ろに倒れる。

そう言えば、そろそろ晩御飯だ。

今日の晩御飯は何にしようかな……。

休みながら、そんな事を考えていると……。

師匠が俺に話しかけてきた。

「幽真、貴方に行って欲しい場所があるのだけど……」

「行って欲しい場所？ お使いですか？」
「いえ、今回は違うわ」

「お使いじゃない？
じゃあ、何をしにいけないのだろうか？」

「博麗神社に行つて欲しいの」
「博麗……神社？」

神社で……ここにも神社があるのか。
いや、むしろ……神様が居るから神社があるのは当たり前か……。
でも、そんな場所になんて俺が？
考えても解らないから、師匠に理由を聞いてみることにした。

「なんで……俺が神社に行くんですか？」
「幽真には、高い霊力があることは知ってるわよね？」

そう言えば、俺には高い霊力があると……最初の頃に教えて貰った
気がする。

「……そう言えば……そうだったな」

でも、霊力なんて使った覚えがない。
だって、程度の能力ですら、強化して殴るしか出来てないから。

「そこで、博麗霊夢に霊力の使い方を教わりなさい」
「博麗霊夢……？」

……なんか、凄い名前の人が出てきたな。
神社と同じ名前だし……神主さんかな？

うーん、でも急に押し掛けて……霊力の使い方なんて教えてくれるのかな？

「幽真なら、大丈夫よ」

師匠にしては珍しい言葉だと思った。

……まあ、信用されてると考えていいのかな？
それに、師匠が大丈夫だと言ってるなら、大丈夫なのだろう。

「分かりました、明日にでも行ってみます」

「よろしい、貴方の成長を楽しみにしてるわよ？」

……なんで、そんなに嬉しそうなんだろうか？
俺の成長を楽しみにしてくれるのは、嬉しいけど……。

「じゃ、帰るわよ」

俺が色々と考えていると、師匠は後ろを向いて歩き出す……俺は考えを止めて、急いで師匠の後を追った。

時間は夜になる。

俺は台所で、食器の片付けをしていると……。

「幽真、いつもの作ってよ」

てゐるが台所に現れて、椅子に座った。

ちなみに、いつものと言うのは、にんじんのケーキの事だ。

未だに、ハマっているらしくて……俺に作ってくれとよく頼まれる。

「またか？ ……まあ、材料があるからいいけどさ……」

「うんうん、流石だね……便利……じゃなくて優しいね」

「明らかなお世辞、ご苦労様です」

今、明らかに便利で言ったよな？

まあ、作ってやると、本当に嬉しそうな顔をするし……もう、なん
だっていいや。

取り合えず、集中するか……。

「よし、後は焼き上がりを待つだけだな……」

「……相変わらず、お菓子を作ってる時はキャラが変わるよね？」

俺の集中力が切れた所を、てゐが話しかけてくる。

「お前、毎回それを言うな？」

「いや、だって実際、別人みたいな顔してるよ？ 話しかけても無

視するし」

「別人ねえ……」

なんか……そこまで言われると自分でも見たくなってくる……。

あの姫様にも、カッコイイと言われたしな。

「確かに、カッコイイよね」

てゐが首を縦に振って、頷いていた……。あと、毎回、思ってる事をあてられるが……俺ってそんなに表情に出てるのか？

「幽真はお菓子を作ってる時だけ、頭良さそうに見えるもん」

「それは、どういう意味だ、白兔さんよ？」

まるで、普段は頭が悪そうに見えるとしても言いたいようだな？

「言葉のままの意味だよ？」

「俺の能力でケーキを不味くさせるぞ？」

やった事はないが、多分出来るはずだ。

正直、お菓子を不味くするのは、気は進まないな……。

お菓子は、美味しさで人を笑顔にするために在るものだと思うしな……。

「や……やだなあ、冗談だよ……ね？ 怒らないですよ？」

てゐは、目に涙を溜めて、うるうるとした目で見つめてくる……。こいつ、嘘泣き上手いなあ……。

「はいはい、悪かったから……嘘泣きを止める」

俺は嘘泣きと解っていながらだが、タオルをてゐに渡す。

てゐはそれを受け取り、目を拭いていた。

あー……だから、便利と言われるんだな……俺は……。軽く凹みながら、話題を変えることにした。

「そつだ、てゐ……博麗霊夢て人を知ってるか？」

「知ってるも何も……有名だよ」

おお、有名人なのか？

俺の顔を見て、満足そうにているは話を続けた。

「幻想郷一のボディービルダーとして有名だよ？」

「マジでか！？」

え、つまり……あれか？

俺は明日、神社に行ってボディービルダーに霊力の使い方を教わるのか！？

「自慢の筋肉で妖怪を、片っ端から退治してるらしいよ？」

「ま……まじか？」

霊力じゃなくて筋力を使うのか……？

……だ、大丈夫だよな？

一樣、人間だし……神社にたどり着いた瞬間に、倒されないよな？

「お賽銭はプロテインでもいいらしいよ？」

「奉ってる神様も筋肉質なのか……？」

……師匠、ごめんなさい……今回だけは、師匠の命令に従いたくないです。

博麗神社……スツゴく行きたくないです……。

まず、ボディービルダーに霊力の使い方を教わりたくありません……。

俺が必死で、神社に行かないための言い訳を考えていると……。

「まあ、嘘だけど」

「嘘かよー!」

ちくしょう! 真面目に言い訳を考えてた、俺がバカみたいじゃないか!

「普通、あそこまで騙されない……」

「うるさいー!」

「うわ、逆ギレだよ……ゆとり怖い」

てゐは慌てる俺を尻目に、ふう……とため息をついた……。

いや、お前の方が怖いわ!!

確かに、騙された俺もどうかとは思うがな!!

「まあ……嘘じゃないかもね」

「えっ、マジなの?」

「……………」

「なあ、そこで黙るなよ、目を逸らすなよ!」

最後まで、てゐは黙って目を逸らし続けていた……………。

「やけど……………」

本当に明日どうしようか……………。

博麗神社に行くことは決まってるが……………やっぱり情報が欲しいな……………。

……………。

ウドンゲさんにも、聞いてみたが……詳しく知らないらしい……。
この世界に詳しい、俺の知り合いか……。

「……あ、慧音先生だ」

あの人なら、博麗神社の事も博麗霊夢の事も知ってそうだ。

「明日、寺子屋を訪ねてみるか……」

一様、寺子屋までの道は覚えているからな。
大丈夫だろう。

……取り合えず、今日は眠い……。

俺は蠟燭を消して、布団を被った。

……なぜだろ、寝るのが怖い。

第八話、修行の日々（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございます！

誤字、脱字、の指摘と、感想を待ってますー！！

第九話、甘いものは別次元（前書き）

第九話が始まりますよ。

この話には、甘いものが食べたくなくなるかもしれません、注意してくださいね。

第九話、甘いものは別次元

「ここが……博麗神社……？」

俺は博麗霊夢に会いに……博麗神社に来たのだが……。

神社で言うより……スポーツジムじゃね？

……やばくね、まさかマジでてるが言った通りに……？

「博麗マッスルーー！！」

「うあああああああああああ！！？」

スポーツジム……いや、神社（？）から上半身裸の筋肉質の男が現れた。

「さあ、君も筋肉を極めるんだ！！」

なんか筋肉が近寄ってきた！！

テラキモい！！

「いえ……結構です！」

俺は、全力で逃げだした……。

「さて！ 君も筋肉の向こうに行こうじゃないか！！」

「筋肉と書いて、ピリオドとか呼ぶんじゃないよ！！」

「そんな事はどうだっていい！！」

「良くねえよ！ お前が言ったんだろぅが！！」

「やらないか！？」

「どんなタイピングでネタを入れてるんだよ！！ あと、この状況

でそのネタは危険だから!!」

しばらく、全力で筋肉から逃げ回っていた。

分かってると思うけど……夢だよ？

「……てゐのせいで……変な夢を見た……」

……俺はやるせない気持ちで着替えた。

なぜだろ、本当に逃げ回ったように疲れている……。

「本当の博麗霊夢さんは……あれじゃないよな？」

まさか、予知夢……!?

……まあ、あり得ないだろ……うん、大丈夫……大丈夫なんだ……

あんなのは居ないはずなんだ。

だから、震えるな俺の足よ……!!

なんか、あの暗闇の妖怪にあつた時以上に……恐怖を感じていた。

……神社に行く前に、やることがある……。

もしかしたら、俺が居ない間に、姫様がオヤツを欲しがるかもしれないから、お菓子を作っておかなければ……。

俺は、何を作るうかと考えながら、部屋を出た。

「さて、人間の里についたな……」

俺は、筋肉の恐怖を押し退けて……博麗神社に向かうことにした。よく考えたら、師匠の命令を断る方が、筋肉質の男に追われるより、怖いことになることに気づいてしまったのさ！
べ……別に、師匠に怒られたわけじゃないんだからね！！

第九話、甘いものは別次元

「さてと、まずは寺子屋……ん？」

俺の視線の先には、甘味処があった。

……寄ってみようかな？

「……いや、止めとくか……早く寺子屋に……」

すると、店の中から従業員らしき人が出てきて、客寄せを始めた。

「今、ウチでは、普通のおんみつのおんみつの十倍の量の『富士おんみつ』に挑戦する挑戦者を募集してるよ！」

「すみません、富士おんみつに挑戦したいです！」

気づいたら、俺は何者かに操られたように、従業員に話しかけていた。

しまった！「おんみつ」「十倍の量」と聞いて体が無条件に反応してしまった……！！

……でも、まあ、しょうがないよね？

俺の体はお菓子だもんね、うん、しょうがないよね！！（これが噂の下手な言い訳）

「私も参加するわ〜！」

「ゆ……幽々子さま！ あれほど寄り道はしないと約束を……！」

「良いじゃないの妖夢〜？ あんみつよ？ 十倍よ？」

「……もう、しょうがないですね」

おっと、俺と同じ単語に引かれて、二人の女性がやって来たようだ。

どうやら、チャレンジするのは、扇子を持ったゴスロリ風の浴衣を左合わせに着ている女性らしい……。

確か、幽々子と呼ばれていたはずだ。

で、刀を二本持っていて頭にリボンをしている、白髪的苦勞してそうな女の子は、妖夢と呼ばれていた。

……ちなみに、そのこの周りには……白い人魂のようなのがあったが……俺と同じ幽霊か？

「おいおい……大丈夫かい、二人とも？」

従業員が、俺らを見て心配そうな表情をしていた。

確かに、俺は痩せててあまり食べなさそうで……もう一人は女性だが……。

俺にはわかる……この女性は俺と同じ匂いがする……！！

「もちろん、大丈夫よ〜」

扇子を持った女性は、柔らかい笑顔と気の抜けた返事をする。だが、それは余裕の現れ……つまり、強者の証だ。

「俺を甘く見てると、この店を潰れますよ？」

俺も彼女に負けずに、自信満々に言いきる。

俺達の余裕に、従業員は若干引いていた。

「ならいいが……よし、挑戦のルールだが……」

ルールは簡単で、20分以内に完食すれば、賞金がある上に代金は無料だが……食べきれなければお金を支払う。

いたって普通のありがちな、ルールだが……20分てのは普通の人なら辛いだろう。

だが、俺を誰だと思っていやがる？

……お菓子を操る程度の男……霧島幽真だ!!

あんみつ十杯くらい……糖尿病の恐れがないなら楽勝だぜ!!

「はい、おまちどおさま!!」

俺と彼女の前に、巨大な皿が置かれる。

これが、富士あんみつか……確かに、すごく山盛りで美味しそうだが……。

「「以外と少ない(のね)(だな)」」

俺と彼女の声が重なる。

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

俺と彼女の一言に見物客に衝撃が走る。

……店主が唾を飲んだのが解った。

「……………開始！」

そして、開始が宣言された。
もう、食べていいんだよな？

「「いただきます」」

一口、あんみつを口に運ぶ……………凄く美味しい……………。
これだったら……………いくらでもいけるな……………。
俺は、基本的には洋菓子の方が好きかもしれないが……………黒蜜もアン
コも好きなんだよな……………。

「お、おい……………あの二人凄くないか？」

「本当に食べきるんじゃないか？」

「早い上に……………あの二人ちゃんと味わってるぞ……………」

しばらく食べ続けたが……………。

何かが物足りない。

バニラアイスで、クリームあんみつにしたいな……………よし、能力で創
るか？

俺は、バニラアイスを創り出して山盛りにトッピングした。

「お、おい……………男の方、今なんか出したぞ？」

「あれはなんだ？」

まさか、アイスを知らないのか？

確かに、洋食の文化は無さそうだしな……。

勿体ないな……とアイスクリームが乗ったあんみつを口に運びながらそう思った。

「ねーねー、貴方のそれは何かしら？」

隣で富士あんみつに挑戦している女性が声をかけてきた。

「アイスクリーム……氷菓子の一種ですね」

「へえ……私のもお願いできないかしら？」

「いいですよ？」

女性のお皿にアイスクリームを、削ってトッピングしてあげた。

もちろん、山盛りに

「ん〜美味しいわね〜、あんみつと相性もいいわ〜」

「でしよう？」

俺と彼女は食べる手は止めることもなく、話していた。

その光景は、見物客達は更にざわついていた。

「お……おい！ これ、時間制限あったよな！？ なんで自分で量を増やしてるんだ!？」

「でも、まだ10分もたつてないのに……半分無くなってるぞ？」

「それより、あの……アイスクリーム？ 食ってみてえな……」

あ、そう言えば、これは時間制限あったな……。

ちよつと急ごうか……。

「幽々子さま、早く食べ終わってください」

「良いじゃないの〜ゆっくり食べさせてよ〜」

「ダメです、早く買い物しましょう」

「もう、妖夢たっらせつかちなんだから……」

二人とも、同じタイミングで……食べるスピードをアップした。
観客から驚きの声があがる。

「「ごちそうさま〜」「」

ほぼ、二人同時に食べ終わった。

ふう、これだけ食べても糖尿病の心配が無いって……いいね！

「お、おめでと〜ございます……では、賞金を」

俺らのスピードに、店主が驚きを隠せていなかった……。

「「あ、待ってください」「」

「は……はい？」

店主がこちらをむく。

やたらと、彼女とハモるなーとか思いつつ……。

「「おかわりいただけないかしら（ませんか）？」」

「「「まだ、食うのかよ！?!」「」」

うわ、ビックリした……なんで皆、そんなに焦ってるんだ？
俺と女性は顔を見合わせた。

「だって……」

「そりゃ……」

「甘いものは別腹じゃない(だろ)?」

「「限度があるわー！ー！！！」」

二人を除いて、店が一つになった瞬間だった。

「へー、幽真は外人なの?」(もぐもぐ)

「そうなんですよ」(もぐもぐ)

「……幽々子さまも、貴方も食べながら喋らないでください」

富士あんみつのおかわりは、店主に土下座されたねで諦めたが……。かわりに、賞金分の商品をご馳走してくれるとの事だった……。

最初は、この後に用事のある俺と妖夢は断ったが……。

幽々子さんの強い希望で……結局は……俺と、幽々子さんと妖夢の三人で、大人数のテーブルを占拠していた。

「でも、貴方の出した……氷菓子は美味しかったわ」

幽々子さんは、今にも、成仏してしまうんじゃないかと思うくらい、幸せそうな顔をしていた。

彼女は、亡霊なので洒落にならないが、本当に。

「そう言えば……貴方は能力持ちなんですよ？　どんな能力なんですか?」

妖夢も、俺の能力に興味津々らしく顔を輝かせている。

俺は、自分の能力「お菓子を操る程度の能力」の説明をした。

「お菓子を……操る？ 創る？ 作る？」

「とっつても素敵な能力ね！」

全く理解できてない妖夢に比べて、幽々子さんは大絶賛だった。

幽久子さんは、俺の手を両手で握りしめた。

「私、幽真の事気に入っちゃったわ。 あなた……私の所で働かない？」

「すみません、俺はもう永遠亭で使用人をしているので……」

嬉しい申し出だが…… 姫様や師匠を裏切り…… は言い過ぎかもしれないが……。

まだ、助けられた恩を返していないし。

本音を言うと、姫様と離れたくない。

俺が正直に答えると、幽々子さんは、明らかにガツカリした顔になった。

「え……じゃあ、今度、お菓子をたくさん持って白玉楼に遊びに来てくれないかしら？」

「あ、それだったら、大歓迎ですよ……今度、遊びに行かせていただきます」

「幽々子さま……お菓子が食べたいだけですよね……」

そんな話をしていたら、テーブルの上の料理が、すっかり無くなってしまったので……店を出ることにした。

「じゃあね〜お菓子、楽しみにしてるわ〜」

「それでは、幽真さん……さようなら」

「はい、幽々子さんも妖夢も……また会いましょう」

二人に別れの挨拶をして……俺は寺子屋に向かうことにした……。
忘れてると思っただろ？

正直に言うのを忘れてたよ……。

俺は、少しだけ急いで寺子屋に向かうことにした……。

第九話、甘いものは別次元（後書き）

そろそろ、二万アクセスになりそうです……。

こんな駄作を読んでくれてありがとうございます！

良かったら、感想をくださいね！

第十話、寺子屋（前書き）

ちよっと、今回は説明ばかりで読みにくいかもしれません……。
読みにくかったら、ごめんなさい！

では、第十話始まりますー！！

第十話、寺子屋

「ここが、寺子屋だよな？」

甘味処から、記憶を頼りにして…なんとか寺子屋に到着した。寺子屋の前には、授業が終わったのか、下校する子供で賑わっている。

第十話、寺子屋

「慧音先生、さようなら！」

「ああ、さようなら」

子供に手を振っている、慧音先生を発見した。

子供達が少なくなったのを、見計らって声をかけてみた。

「慧音先生、お久しぶりです」

「ああ、君は……霧島幽真君だな？」

慧音先生は、俺の名前をフルネームでしっかりと覚えてくれていた。ちよつと嬉しい。

「なんだ？ 私の授業を受けに来たのか？」

「いや、今日は慧音先生に聞きたいことがあって……」

「そうか、じゃあ、ここで立ち話もなんだし、入ってくれ」

慧音先生の薦めで、俺は寺子屋の中に入ることになり、慧音先生の

部屋に案内された。

「うわっ……凄量のテストですね……」

先ず目に入ったのは、机の上の大量のテストの山だった。

見てみると……まだまだ、採点が終わっていないテストの山らしく……採点は大変そうだ。

「ああ、すまないな……教師以外の仕事に集中してたら……溜まってしまっただな……。」

慧音先生は恥ずかしそうに、頭を掻いていた。
凄いな、先生以外に別の仕事もしてるのか……。

「何の仕事をしているんですか？」

「なに、ここの歴史を管理してる……それだけさ」

……歴史を管理する？

そう言えば……歴史は、誰かによって歴史にして貰わないと歴史にならない……そんな言葉を思い出した。

つまり、慧音先生は歴史を作っている？

それって、凄いことじゃないか？

「……凄いですね」

「いや、そうでもないぞ……実際問題、このザマだ」

苦笑いしながら、机の上のプリントを指差す。

……うーん……採点なら俺にだって出来るだろう……。

「慧音先生、手伝いますよ」

「何？ いや……それは……」

「大丈夫ですよ、俺も教師の真似事をしてましたし」

俺は、俺が家庭教師をしていた事と、ゆっくり話がしたいから採点を手伝わせて欲しいと、慧音先生に話した。

「……ふむ、じゃあお願いしよう。私も君とはゆっくり話したいからな」

「ありがとうございます……じゃあ、終わらしましょうか……」

しばらく、無言で作業に集中していた……。

「終わったな……」

「ご苦労様です」

俺は、慧音先生が仕事を終えたタイミングでお茶と、お茶菓子を置いた。

ちなみに、歴史の採点は慧音先生しか出来ないから、俺の仕事の方が早く終わるのだ。

「お、ありがとう。随分と気が利く生徒だな」

「ありがとうございます」

「君のお陰で、随分と早く済んだよ……ありがとう」

「いえいえ、気にしなくても大丈夫ですよ」

どうやら、役にたったようだ。

ピロリロリン（効果音）、知識が上がったようだ。

慧音先生は、俺が採点したテストを見始めた……確かそれは算数だったはず……

「……ふむ、今度、君には先生をやって貰おうか？」

慧音先生は、採点したテストを見て、そんな事を言い出した……。俺が先生だって……？

「私は楽しませることが苦手だな……君なら、頭も良いし、子供達にも気に入られるだろうしな」

慧音先生は、向いてると思ってるらしいが……。家庭教師はした事があるが……教壇の前に立つての授業なんてした事ないしな……。

「やはり、迷惑か？」

……そんな事を言われたら、断れないよな……。まあ、慧音先生がそこまでお願いしてるし……引き受けるか……。

「分かりました、引き受けます」

「そう言ってくれると助かるな。もちろん、君の時間がある時でいいからな？」

うーん、出来るか分からないけど……結構、期待されてるし……まあ、実際にやる時に考えればいいや……。

「で……私に聞きたい事……」

「慧音、誰か来ているのか……？」

本題に入ろうとしてる所に……部屋に白く長い髪の少女、藤原 妹紅が入ってきた。

「お、妹紅じゃないか……今日は何のようだ？」

慧音先生が、妹紅に話しかける。

……この二人は、知り合いなのか？

「け……慧音！　なんでこいつがいるんだ!？」

俺の姿を見るなり、妹紅は慌てだした。

俺は、取り合えず、妹紅の分のお茶を汲むことにする。

「いや、お茶なんて汲んでないで説明しろ!!　なんでお前がここにいるんだ!!」

「一回……落ち着け、お茶を飲めよ」

「誤魔化すな!!」

……だから、なんでそんなに焦ってるんだ。

妹紅は、本当に切羽詰まっている表情をしていた。

「なんだ？　知り合いか？」

「はい。　一樣、俺は永遠亭で使用人として働いてるので……」

「ああ……君が、永遠亭の新しい使用人か……確かに、妹紅が言っていた特徴と合致するな」

なんだ？　妹紅が俺の事を言っていたのか？

この会話を聞いた、妹紅が更に焦りだした。

「け……慧音!!　余計な事を言うなよ!!」

「分かってるよ」

慧音先生は、それを苦笑いしながら見ていた。
……逆に、あんなに焦られると気になるな。

「妹紅と慧音先生は、知り合いなんですか？」

「ああ、私は妹紅の保護者みたいな感じだ」

「ああ、保護者の方でしたか……いつも、お宅の妹紅さんに、姫様がお世話になってます」

「ああ、ご丁寧にどうも」

お互いに頭を下げる。

まるで、保護者同士が会って話をしているようだ。
姫様の保護者は師匠だけだな。

「いいから、私に分かるように説明しろ!!」

なぜか、妹紅がキレていたが……複雑なお年頃なのか？

「なるほど、そう言うことだったのか……」

「やっと落ち着いたな……」

取り合えず、慧音先生との出逢い、さっきまで採点の手伝いをしてた事を伝えると……。

妹紅が、やっと落ち着いた。

「さて、そろそろ……」

「あ、本題に移りますね」

先ずは、俺が負けた「暗闇の妖怪」について聞いてみた。
……実は、ずっと気になっていたのだ。

「それは、ルーミアだな」

「ルーミア……ですか？」

「ああ、闇を操る程度の能力を持った人食い妖怪だな……」

「お前、私に勝っておいて……ルーミアごときに負けたのか……？」

……頼む、そんなに哀れみの目で見ないでくれ……。

俺だって負けたくて負けた訳じゃないんだよ……

後は、本題の博麗神社と博麗霊夢の事なんだが……。

「君の質問は、それだけか？」

「いや……その……」

「……どうしたんだ？」

俺が言いにくそうにしていると、慧音先生が心配そうにこちらを見ていた……。

いや、聞くしかないだろ……！！

「あ……あの、実は……師匠……じゃなくて、永琳さんの命令で、博麗霊夢に会いに行くんですけど……」

「ふむ、それで？」

……聞きづらいなあ……どうしようか……マジで……。

俺は、勇気を振り絞って聞くことにした……！！

「博麗霊夢さんて……ボディービルなんですか？」

「……はっ？」

……ダメだ、心が折れそうだ。
でも、言い出したならしょうがない……。
俺は、てゐが言ってた事をそのまま二人に話した……。

「あははははは！！」

「……バカかお前は？」

お腹を抱えて大笑いしている慧音先生と、呆れ返っている妹紅……
ヤバイ死にたい。
それが無理なら消えたい……！！

「ごめん、ごめん……まさか、博麗の巫女を……あははははは！！」

まだ、慧音先生はお腹を抱えて大笑いをしていた。

「笑いすぎだ、慧音」

おお、まさかの妹紅がフォローに入ってきた。

「こいつの冗談は、面白くないし、笑えないだろ？」

「フォローかと思ったら追い撃ちかよ！」

まさかの追撃だった。

……なんだろ、弱点を突かれてダウンして総攻撃を喰らった気分だ。

「いや……まさか、そんな嘘に引っ掛かるなんて……君は純粹なんだな」

「純粹じゃなくて、バカなだけだろ？」

……帰ったら、あの白兔を潰す事を心に誓い。
話を進める事にする……。

「と……取り合えずですね、俺は博麗霊夢さんに会いたいんですけど……」

「分かってる、博麗神社の場所が知りたいんだろ？」

おお、流石、慧音先生だ……話が早い。

慧音先生は、紙に何かを書いて渡してきた。

「博麗神社への簡単な地図だ……幻想郷の東の端にあるんだ」
「ありがとうございます！」

慧音先生から、貰った地図を見ると……人間の里から、結構遠い位置にあるようだった……。

……甘味処で富士あんみつとか食べといて、正解だったかもな。
ルーミアの時のような事はもう御免だ。

「しかし……あの巫女に会って何をするんだ？」

「んー、師匠の話では霊力の扱い方を教わりに行くらしいんだが……」

……
「らしいんだが？」

妹紅が聞き返してくる。

俺は、師匠が他に何か目的を考えてる気がするんだが……。
まあ、師匠の考えなんて俺に分かるわけがないがな……。

「いや、なんでもない」

「……？　そうか……」

妹紅はあっさり引き下がってくれたので……もう一度地図を見る……。
あれ……よく考えたら……。

「ところで……博麗神社で……参拝者……いるんですか？」
「うーん、場所が場所だけに……少ないらしいな」

慧音先生がすぐに答えてくれた。

……だよな？

こんなに人間の里から離れてると、ワザワザ参拝しに行くのも大変だし。

「だから、お賽銭をたくさん入れれば……ちゃんと教えてくれるかもしれないな」

「あはは、やだな慧音さん……それじゃ、お賽銭を入れないと教えてくれない……」

「多分、教えてくれないぞ？」

……マジッスか？

博麗霊夢……一体どんな奴なんだ？

「でも、腕は確かだから……きっといい修行になるはずだぞ？」
「なるほど……」

まあ、逆に考えれば、お賽銭を入れるだけで教えてくれるんだから……楽と言えば楽かな？

「しかし、お前、大事な姫様を放っておいていいのか？」

妹紅がなぜか、そんな事を言っていた。
確かにそうだ、下手をすれば帰れるのは深夜……いや、日帰りは無理かもしれない……。
でもな……。

「……俺だって、姫様のお世話はしていたいけど……」
「けど？」
「上司の命令には逆らえないんだ」

今朝の師匠の怒った顔を思い出す……ふ、ふふ……脚が震えるぜ！！

「……なんか、お前も大変なんだな」
「分かってくれたか、妹紅さんよ……」

なぜだろ、妹紅に同情されるのが一番、心が折れそうだ。

「さて、まだ、博麗霊夢や博麗神社に対する情報は……聞いておくか？」

どうしようかな……？
でも、折角だし……慧音先生の話聞いておくか……。

「お願いします」
「では、まずは……」

慧音先生の話をもっと簡潔にまとめると……。

『博麗霊夢は、異変解決の専門家である』
『スペルカードルールを導入したのは博麗の巫女』

『外と幻想郷の結界を管理している』

……と、まあ聞くだけで唾然としてしまう。
博麗霊夢は凄い人物に思えるが……。

『危機感がない』

『妖怪は問答無用で退治』

『暢気な性格』

なんて事も聞いたために、人物像が想像しにくかった。
まあ、細かい事は気にせずに出会ってみれば分かるか……。

「それじゃ、俺はもう行きますね？」

「ああ、それじゃ……また、寺子屋に来てくれ」

「もちろんですよ……それでは、失礼しました」

俺は、寺子屋を後にして、博麗神社に向かうことにした……。
さてと……富士あんみつや他の甘味のお陰で、エネルギーは満タン
だし……走るか……。

俺は、脚力を強化して走り出した。

「そう言えば、妹紅は何をしに来たんだ？」

「いや……ただ、顔を出しに来ただけだ……」

「そうか……なあ、妹紅」

「どうした？」

「幽真は、お前が言った通り……面白い奴だな」

「……そうだろ？」

第十話、寺子屋（後書き）

よかったら、感想をください！
やる気が絶好調まで上がります！！

第十一話、修行？実戦？イジメ？（前書き）

……ネタはたくさんあるのに……なぜ、時間と文才がないんだWW

では、第十一話始まります！

ゆっくりしてってねー！

第十一話、修行？実戦？イジメ？

「ここを、上がれば博麗神社か……？」

俺は、慧音先生の地図を頼りに、博麗神社まで走っていった。今は、長い石の階段を歩いている。

「……しかし、本当に参拝者なんか居なさそうだな……」

途中の見通しの悪い獣道を思い出す。

明らかに安全なんて保証されてないし……実際に、狼みたいな妖怪に襲われたしな……。

強化したパンチ一発で、気絶しちゃったけど。

……本当に俺の能力は、調子が良いときは良いよな……。

ついでに、この階段を登ってて思うが……。

「空を飛べると楽しんだろうな……」

そうすれば、獣道やこの長い階段も関係ないんだけど……。

……階段部は喜びそうだけど、一般人及び俺は……長い階段は嫌いだと思う。

「……一気に駆け上がるか」

このまま、歩いていたら時間がかかりそうだな……。それに、甘味処に寄って食べまくったお陰で、結構な距離を走ったのに……全然余裕があるしな。

俺は、脚力を強化して一気に駆け上がる。

「到着……!!」

な……長かった!!

結構、速度出たと思うけどな……!!

一体、どれくらい長かったのかを確認するために後ろを振り向くと……幻想郷を一望出来た。

「すげえ……見晴らし最高だな!」

姫様にもこの光景を見せて差し上げたいな。

……もちろん、二人つきり……いや、止めとくか……絶対、死亡フラグだな。

俺の頭に、矢がトッピングされるに違いない。

……ちよっと、現実の辛さに心を折られながら……神社の方をしてみる。

「……これが、博麗神社か」

第十一話、修行？実戦？イジメ？

随分と……ボロ……いや、趣があるんだな。

……周りを見渡したが……誰も居ないみたいだな……。

「……勝手に歩いて大丈夫だよな?」

端から見れば、俺は参拝者に見えるはずだから……急に攻撃される
ことはないだろう。

そつだ……お賽銭を入れなきゃダメなんだっけ？

「あれが、賽銭箱か……」

取り合えず、賽銭箱の前に立つ。

財布の中を確認するが、お札しかなかった。

小銭がないとは……ついてないな……。

「……まあ、いいか」

慧音先生が、お賽銭は沢山入れろって言ってたし……。

俺は、賽銭箱にお札を一枚入れる……。

(姫様と仲良く……じゃなくて、姫様が幸せでありますように……)

お賽銭を入れたので、お願いをしていると……。

「い……いま、あなた……！」

声のした方を振り向くと……紅白の衣装を着ている美少女がいた。

美少女は、お賽銭箱の中を開けた……もちろん、俺の前で……。

「……ええ!？」

お賽銭箱から、お札を取りだし……もちろん、俺の目の前で。

懐に入れた……もちろん、俺の目の前で。

……これは、新たな犯罪のスタイルか？

「正々堂々とした……賽銭泥棒？」

「違うわよ、それより、貴方が入れたの？」

紅白の美少女（賽銭泥棒？）は、俺をジロジロと見ていた。

「あなた……外来人でしょ？」

「あれ？分かるんですか？」

「香霖堂でしか、売ってないような変な服を着ていれば分かるわよ」

— 通行のファッションなのにな……。

その変な理論を使うなら、彼女も可笑しな服装をしてると思うが……
： 外の世界では、着て歩けない格好なので……多分、幻想郷の住人
なのだろう。

「で、博麗神社に何か用かしら？」

「えっと……博麗霊夢さんを探してるんですけど……」

「私が、博麗霊夢よ」

……ああ、彼女が……良かった、筋肉ムキムキでもないし、怖くも
ない……。

むしろ真逆だ、姫様には劣るが、美少女だった。

「で、何をすればいいのかしら？ 妖怪退治？ 異変解決？ それ
とも、外の世界に出たい？」

お賽銭のお陰か……霊夢さんは、随分とやる気だった……。

何故だろ、ここに人が来ない理由の1つに、この人が関係してる気が
する。

「いや、その、霊力の使い方を教わりたいです」
「霊力……?」

霊夢さんは、眉を潜めていた。

……やっぱり、無理かな……?」

「良いわよ?」

「本当ですか!?!」

すると、霊夢さんは俺の服を掴んで、神社の真ん中に連れていく。

……嫌な予感がする。

「それじゃ、やるわよー」

霊夢さんは、スペルカードを取り出す……。

ま、まさか!?!」

「え……い、いきなり実戦ですか!?!」

「そうよ、何事も実戦が一番だわ」

「そりゃ、そうだけど……!?!」

待ってくれよ、心の準備が……!

非常にも霊夢さんは、スペルカードを高く掲げて……。

「霊符「夢想封印」!」

「本当に撃ってきたあああああ!?!」

俺は、段幕を避けようと動いたが……あれ、誘導弾じゃね?

追ってきてないか!?

「嘘だろ!?!」

俺は、結構な数の段幕を喰らった。

流石は、『異変解決、妖怪退治のプロ』だよな……威力は抜群だ。

「くう……死んだら、どうするんですか!?!」

「今で死ななかつたら、大丈夫よ。続けるわよ?」

……超展開ワロスとかしか、言い様がねえよ……。

取り合えず、体が直った事を確認して、俺は立ち上がった。

……しょうがない、いっちょ、頑張りますか!

しばらく戦ったが、圧倒的に俺が押されている。

理由は、遠距離攻撃をされて近づけないから……相変わらず、接近戦に持ち込めないと弱いな、俺は……。

「はあはあはあ、流石ですよ……強いですね」

「……なかなか、しぶといわね」

向こうは余裕タップリだった……負けっぱなしも悔しいし……。

ここら辺で、一発決めてやりますか!

俺はズボンから、スペルカードを取りだし、宣言する。

「強化「鋼菓子」!」

「……スペルカード?」

霊夢さんがこちらを、驚きの表情で見ている。

……ふっふふ、こっからが俺の反撃だ！！

なにか忘れてる気がするが……気にしない。

「うおおおお！！」

俺は、猛ダツシユで霊夢さんに近づく。

霊夢さんの撃ってくる、段幕は拳で叩き消していく。

「強化系のスペルカード……？」

霊夢さんは、空をとんだ……幻想郷の可愛い子は皆、空を飛ぶよな……。

「よつと……！！」

まあ、俺には、関係ないけどさ！

俺は、脚力を強化して高く飛んだ。

「……めちゃくちゃね」

「そうですね！」

俺が、霊夢さんに攻撃しようとする……。

「とぉ……！！」

ホウキに乗った少女が、俺に突っ込んで来たんだけど。

もちろん、空中でいきなり突っ込んで来たから、回避行動など取れるわけもなく……受け身もとれずに、俺は勢いよく地面に叩きつけ

られる。

……鋼菓子使ってて良かった。

じゃなかったら、骨が粉碎していただろう。

……まあ、骨が粉碎しなくても……激しい衝撃と痛みのおかげで、起き上がれないんだがな。

「大丈夫か？ 霊夢？」

「……魔理沙、やり過ぎ」

魔理沙と呼ばれた、白と黒の魔女のような服を着た少女は……頭を搔きながら「やっぱり？」と言っていた。

……いきなり、スペルカードを使ってきた、霊夢さんが言う台詞ではないと思うがな……。

空を流れる雲を見ながら、そんなことを思った。

「いや、本当にすまなかったな！」

「もう、いいよ。気にしなくても」

「いや、幽真は良い奴だな」

(……魔理沙みたいなタイプは何言っても無駄だからな……)

あの、一方的に俺が怪我しただけの修行（イジメとも読める）を終えた後……。

俺と魔理沙、霊夢の三人で、神社の縁側で、お茶を飲んでいた。

もちろん、その間に俺の能力の話もしたし……俺が永遠亭で働いてる事も話した。

ちなみに、敬語を止めたのは、二人の希望だからだ。

「……幽真は、お茶を入れるのが上手いな？」

俺が淹れたお茶を飲みながら、魔理沙は呟いた。

「お菓子にはお茶だろ？ だから、外の世界で勉強したんだよ……
紅茶から日本茶まで、なんでも淹れられる」

「能力といい、本当にお菓子が好きなんだな……」

ちなみに、なんで俺と魔理沙しか喋っていない……霊夢は……。

「おいおい、霊夢……詰め込みすぎだぜ？」

「ふがふがふが！」

「まあ、美味しいから、気持ちは分かるけどな……」

俺が創ったお菓子を食べるのに夢中だから……喋れないのだ。
多分、霊夢は「うるさい、魔理沙」と言いたかったのだろうな。
……普通に行儀が悪いが……気に入って貰えたのなら嬉しい。

「おかわり！」

「はいはい、分かったから口を吹きな？」

俺は、またバームクーヘンを創る。

ついでに、お茶も淹れて霊夢に差し出す。

「どんだけ、生活苦しいんだろ……」

「まあ、幽真も歩いてきたなら分かるだろ？」

「ああ、獣道に長い階段だろ？……下手すれば死ぬよな？」

「だよな」。私の知り合いなんか、歩いたら絶対にたどり着けな

いぜ？」

俺と魔理沙の言葉に気分を悪くしたのか、霊夢が睨んでくる。

……口に詰め込んでるせいで、頬が膨れているからか、子供が拗ねてるようにしか見えない。

「……な？」

「魔理沙の言いたいことは良く分かった」

確かに、霊夢は不思議な魅力を持っているようだな。

……しばらく、のんびりと雑談をしていたら、大分時間がたってしまった。

「で、結局、幽真は何しにここに来たんだ？」

「「あっ」「」

魔理沙の一言で、色々忘れてた事を思い出した。
霊力の使い方を教わってない……。

「なんだ？ 二人とも若いくせに、忘れっぽいな」

「「お前のせいだけだな」「」

確かに戦いに夢中になってて忘れてたけど……。
元を辿れば、魔理沙が乱入してきたから……修行が中断されて、それどころじゃなかった……。

「そうだったけ？ まあ、私は帰るぜ」

……人騒がせな魔女は、居心地が悪くなった途端にホウキに乗って

飛んでいってしまった。

「どうしようかな……?」

絶対に、成果なしで帰ったら師匠に殺さ……いや、お仕置きされる。今朝に下手な言い訳をしてしまったから……

成果がない＝神社に行かなかった

などと判断されたら、人生終了だ。

「別に明日があるから良いじゃない」

ああ、それもそうだな……良く考えたら、弓の時の例があるから……。

「今日は修得出来なかった」とでも言っておこう……嘘は言っていない。

んじゃ、今日は帰るか……。

「それじゃな、霊夢」

帰ろうとすると、シャツを思いっきり引っ張られた。軽く首がしまった。

「まあまあ、泊まり込みで修行しなさいよ」

なぜか、霊夢の笑顔から恐怖を感じる……

「いや、でもな……」

「習得しないと師匠に怒られるんでしょ?」

確かにそうだけど……なんか裏がある気がする……。

「本音は？」

「晩御飯」

「短くて、分かりやすく、呆れられる回答ご苦労様です」

どうやら、俺の能力で晩御飯などを済ます気らしい……。

……帰って姫様のお世話したいなあ……。

でも……習得して強くなってから帰りたいよな……。

なんか、魔理沙のせいで泥沼か何かにハマった気がする……。

「しょうがないな、今日は泊まらせて貰うよ……」

「そう？ なら、さっそく始めるわよ？」

「……はいはい」

「まずは、霊力とは……」

どうやら、霊力の説明をしてくれるらしい。

今、思うと……さっきの実践は何だったんだらうか？

……ちゃんと、霊力をマスター出来るのか……不安だ。

第十一話、修行？実戦？イジメ？（後書き）

感想お待ちしてます！！

次回は……輝夜を出したいですね……。

第十二話、成果（前書き）

p v三万アクセス越えました！！

本当にこんな駄文を読んでもくれたり、お気に入りや評価してくれて嬉しいです！！

では、ゆっくりしてってね！

第十二話、成果

「……ねえ、ウドンゲ」

夕方に近くなつた頃に輝夜さまが、私に声をかけてきた……。

「どうかしましたか？」

「幽真はどこかしら？ 部屋と屋敷にも居ないんだけど……」

頬に手を当てて、困つた表情をしている。

……幽真君は、師匠の命令で博霊神社に行っている。

その事を、輝夜さまは知らなかつたらしい……。

「幽真君なら……」

「畏も仕掛けたけど、何もかからないのよ？」

「畏をかけたんですか!？」

……なぜだろ、輝夜さまは幽真君を動物か何かと勘違いしてる気が……。

「私の服を置いておいたのに……幽真、引つ掛からなかったわ」

……ごめん、幽真君……一瞬、あっさりと引つ掛かる君の姿が思い浮かんだ……。

「てゐは、すぐに駆けつけてくるって言つたのに……」

「……輝夜さま、てゐの言うことを本気にしないでください」

流石、てゐ……畏が確實だった。

「幽真君は、屋敷の外に出掛けてますよ……」
「ああ、なるほど」

輝夜さまは納得されたようだ……。
良かった、これで毘の話は……

「じゃあ、外に毘をしかければ……」
「止めてください！ お菓子なら、幽真君が朝作ってましたから！」

「あら、そうなの？」

……危なかった、色んな意味で……。
……幽真君、外に……輝夜さまの服があったら、駆けつけてくるなんて事ないよね……？

第十二話、成果

「どうしたの？幽真？」
「……いや、なんでもない」

何故だろう……今、姫様の身に何かがありそうな気がしたが……。
……きつと、妹紅と遊んでいるのだろう。
姫様は外に出ないから、師匠の鉄壁のガードがあれば、安心だしな。
姫様の心配をしていたら、霊夢が苛立ちそうにこちらを見ていた。

「それより、早く集中しなさい」
「……わかってるよ」

霊夢に促されて、俺は目を閉じる。

霊力とは、思いの強さ。

そして、この世界では、霊力を弾幕にして飛ばせば……そのその威力があるらしい。実際に喰らったから、体で威力は理解はしている……。

「……………はっ！」

取り合えず、集中して出そうとしたが……。
……何も出ない。
と言うか……出し方が分からない……。

「なんで、出来ないのよ!？」

「出来るか!!！」

驚いている霊夢に、俺は怒鳴り付ける。
正直に言っつて、思いを飛ばすなんて意味が分からないし!!
しかも、肝心な霊夢の説明が……! !

『何となく集中すれば、出てくるわよ』

これで、何が解るんだよ!! !

「……………もう、いいわ。 お腹へったから……………」

霊夢は、背伸びをしながら、神社の中に戻っていった……。

はあ……師匠、なんであんな人に霊力を教われとか言ったんですか……？

俺は、夕暮れの神社に、一人取り残される……。

「霊力か……お菓子なら簡単に創れるのにな……」

試しに、『鉄より固い』あめ玉を創って木に投げるが……普通に木に当たって砕けた。

……追加設定は、自分の体を離れると解除されてしまう。

どんなに設定をつけても、距離が離れてしまえば……普通のお菓子に戻ってしまう。

……俺の能力が、強化でしか戦えない理由だ。

……はあ、霊力は出ないし、能力は出せるのに弱いし……。

「ん……？ 待てよ……？」

霊力を出せなくて威力がある、お菓子は創れて威力がない。

……もし、この二つを合わせれば？

……試しに……弓をお菓子で創る……これは、盾の応用で出来る。

次に、お菓子で矢を創る……師匠との修行で、矢の形は覚えてたから出来る。

それに、ビリビリを使うときのイメージで、矢に霊力を入れてみた。しかし、なんの変化も感じられない。

「……ダメか」

そりゃ、そうだよな。

『お菓子に霊力を入れて、威力を上げてみよう』

なんて、考えたが……無理かな……？

試しに、さっき飴を投げた木に矢を射る。

霊力を入れた矢は、木に刺さった。

「あれ、碎けない？」

試しに、今度は……何もせずに、お菓子で削った矢を射る。

すると、ただのお菓子の矢は、木に当たって碎ける。

……霊力を入れるのと入れないので、違いがあった……。

「……これは、使えないか……？」

……この方法を改良すれば……。

遠距離攻撃のスペルカードも、弾幕も作れるんじゃないか？

「幽真？ 何してるのよ、早く晩御飯を作りなさいよ」

考え事をしていたせいで、霊夢が後ろに居ることに気づかなかった。

「ああ、悪い……ちょっと待っててくれ」

「……？」

今度は……お菓子に靈力を練り込む。
つまり、靈力を材料に加えてお菓子を創るイメージだ。

「……これだ、これだよ……！」

完成したお菓子の矢には、靈夢が出してた弾幕に似ていた。

……やっぱり、靈力入りのお菓子があれば、弾幕も新しいスペルカードも作れる……！

ついに、俺も遠距離攻撃が出来るぞ……！

……取り合えず、嬉しい気持ちを抑えて……集中して改良点を探した。

改良点を探し当てて、改良をする……。

この技の名前は……まあ、後で考えよう。

俺は……弓を構えて、矢を放った。

「すみませんでした！」

「……もういいわよ」

……俺は、地面に正座をして頭を下げている。

つまり、土下座をしているのだ。

なぜか？ それは……。

「……まさか、矢一本で、桜の木を折るなんて……馬鹿げてるわ」

そう、初めて創った霊力入りのお菓子の矢が……木を折ってしまったのだ……。

まさか、あんなに威力があるとは思わなかった……!!

ちなみに、矢は砕けてしまったが……今、思うと……貫通しないでよかった……更に被害が広がるどころだった……。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「……そんなに、謝られると逆に怖いわ」

オヤシロ様並みに謝っていると、霊夢に引かれてしまった。

でも、いくら、集中していたと言え……神社の桜の木を折るなんて……霧島幽真、一生の不覚だよ!!

「別に良いわよ、桜の一本や二本……それより、早くご飯にしましよ」

……逆に、なんで本人がどうでも良さそうなんだろうか？

「……何よ、その目は……いいじゃない、やっと霊力の使い方が分かったんでしょ？」

「え、まあ……な」

「なら、もつと喜びなさいよ」

「え……？」

俺が唾然してると……。

霊夢が、ため息をついて言葉を続けた。

「あんなに、頑張ってたじゃない。それで、良い結果が出たんでしょ？ 折れた木なんか気にしなくていいわよ」

弱冠、恥ずかしくなったのか、霊夢は顔を背けながらそんな事を言っていた。

「ほら、早くしなさい」

霊夢は、俺の手をつかんで引っ張って行った。

……なんか、メチャクチャで変わってる人だと思う……でも……。

「意外と優しい？」

「………なんで、疑問なのかしら？」

なぜか、誉めたつもりなのに、霊夢に睨まれた……。

………せめてものお礼に………今日は、腕をふるってお菓子を創ろう。

………本当は、作りたいんだけどなあ………。

でも、心が隠ってれば同じかな？

霊夢に引っ張られながら、そんな事を考えていた。

「「ふう………」」

俺と霊夢は、晩御飯（お菓子）を食べ終えて、食後のお茶を飲んでいた。

「………霊夢、お茶を淹れるのが上手いな………」

「毎日飲んでるんだから、当たり前でしょ？」

無い胸を張り、自信満々に言うが……。
それって、仕事が無いから……。

「違うわよ、仕事が終わったからお茶を飲むの」

「ちなみに、基本的な一日は？」

「掃除して、お茶を飲んで……掃除して……お茶を……」

徐々に声が小さくなっていった……。

……生活が苦しいのに、仕事が無いって大変そうだな。

「……そう言うあんたは？」

霊夢が睨み付けながら、俺に聞いてきた……話の流れからすると、
永遠亭の仕事だろ？

「そうだな……姫様を起こしたり、姫様の話し相手になったり、姫
様のおやつを作ったり……」

「もういいわ、うるさい」

……自分から聞いてきた癖に……自分勝手だな。

……そんな、感じて話をしていると……。

「れえ〜むう〜!!」

なんか、幼い声がした気がする……。

「……飲み会から帰ってきたみたいね」

「帰ってきた……誰が？」

霊夢の答えを聞く前に……ふすまが開いた。

「ただいまあゝ!!」

……やって来たのは、酔っていて顔が真っ赤な少女だった。
しかも、ただの少女ではない……頭に長い二本の角が生えている。

……あの角、絵本で見たことがある気がする……確かその絵本の妖
怪は……。

「鬼？」

「ん？ あんたはだれだあゝ!？」

幼女は、何かの構えをした……格闘技か？

……これは、また怪我するパターンか？

いくら、方通行の格好をしてるからって、殴られるのは嫌なんだ
が……

「萃香、待ちなさい。 一樣、お客でお賽銭を入れてくれたから、
殴っちゃ駄目よ」

止めてくれたのは嬉しいけど……色々と、ツッコミにくい言い方を
しないで欲しい。

「お客う？ 名前はあゝ!？」

萃香と呼ばれてた幼女が、俺に近づいてくる。
物凄く酒臭いが……俺は笑顔で挨拶をした。

「霧島幽真だよ、君は？」

「伊吹萃香！ よろしく〜!」

萃香ちゃんが、ハイタッチを求めてきた。
俺はそれに答えるて、ハイタッチをしたが……………ふむ、萃香ちゃ
ん……………意外と力が強いな。

ハイタッチをしたら、手首が変な風に曲がって激しい痛みがするが、
気にしない事にした。

「……………あーあ、折れてるわね」

……………霊夢、そこは言わない約束だろ？

……………酔っぱらいは力の加減をしないから、気を付けようね！

まあ、萃香ちゃんは見た目通りに鬼だ。

鬼特有の怪力は、さっき手首の尊い犠牲で証明されたしね……………。

「ふうーん、幽真はここに修行に来たのか？」

小一時間位で、萃香ちゃんは酔いから少しだけ覚めたようだ……………。

「うん、霊力の使い方を教わりにね」

「霊力かあ……………格闘なら教えられたのになあ」

萃香ちゃんが、残念そうに肩を落とした……………。

……いや、良い機会じゃないか？
鬼だから、格闘は強いだろうし……きっといい相手になってくれそ
うだ。

「いや……良かったら教えてくれないかな？」

「お！？ 本当！？」

一気に萃香ちゃんの顔が笑顔になる。
うんうん、幼女……いや、子供は笑ってるのが一番だよな。（もち
ろん、実年齢は気にしない）

「幽真……あんた、死ぬわよ？」

霊夢が、呆れたような表情で俺を見ていた……。
そりゃ、そうだよな……。

さっき鬼の怪力のせいで、痛い目にあつたのに……格闘の修行をし
てもらうなんて……自殺に近いだろう。

「大丈夫だよ、多分、死なないと思うし」

「はあ……勝手に死になさい」

霊夢は呆れ返って、お茶を飲んでいた……。

……なんか、酷いこと言われたけど気にしない。

「久しぶりに、体を動かすぞ〜！」

「……お手柔らかにね」

張り切る萃香ちゃんに連れられて……神社の外に出た。

第十二話、成果（後書き）

……輝夜を無理矢理だした結果がこれだよ！！
でも、出したかったんです……後悔はないツス

……よかったら、感想をください！

第十二話、鬼と拳で語るしー！（前書）

第十二話……… 始まります！

ゆっくりしてっつねー！

第十三話、鬼と拳で語ろう！

夜の神社は暗いが……月明かりのお陰で、全く見えない訳じゃなかった。

……そろそろ満月か……。

「それじゃ〜ルールを決めるよ！」

「ルール……？」

「そうだよ〜、妖怪と人間が戦うんだから、ルールを決めるんだよ！」

萃香ちゃんの話では……。

幻想郷では、妖怪と人間が戦う時は、ルール（時間制限）を決めて戦うらしい。

確かに……妖怪と人間（俺は、幽霊だけだな）では体力の差が違いすぎるからな……。

……そして、又も実戦での修行か……。

ちなみに、ルールは……。

『萃香ちゃんに一発クリーンヒットを当てれば、俺の勝ち。』

『俺が、力尽きれば、萃香ちゃんの勝ち。』

俺に有利なのは、修行のためらしいが……。

一発、クリーンヒットすれば勝ちにしてくれるとは……よっぽど、自信があるのだろう。

「それじゃ、かかってこい！」

萃香ちゃんは、両手を上げて、かかってこいアピールをする。
……可愛いけど、手加減はしないよ！

「行くよ！」

第十三話、鬼と拳で語ろう！

俺は、萃香ちゃんに近づいて、強化した右ストレートで攻撃をして
みたが……。

「……踏み込みが足りないよ？」

あっさりと、片手で防がれてしまった。

振りほどこうとしたが……ガツチリと捕まっていた。

「そりゃ〜！」

そして、萃香ちゃんは片手で俺を投げ飛ばした。

「嘘だろっ!？」

投げ飛ばされた俺は、石の置物にぶつかった……背骨が大変な事にな
った、具体的に言っていると折れた。

見た目幼女なのに、片手で俺を投げ飛ばせるのか……やっぱり強い
な……!!

「なに〜？ もう終わりか〜！？」

「ま……まだまだ！！」

俺は、能力で背骨を直して、立ち上がり……殴りに行く……今度こそ！

「だからあ〜！」

「うあああああ〜！？」

また、片手で捕まれて、今度はジャイアントスイングだよ！？
腕が遠心力で、もげるほど痛い……あ、肩が外れた。

「ぐつあ〜！？」

今度は、投げ飛ばされずに、一回停止をして、俺を地面に叩きつけた……！！

「だからあ〜力任せに殴らないの！ 腰と踏み込みい〜！！」

大急ぎで、体を修復していると……萃香ちゃんが怒っていた。

……いや、それどころじゃないんだが……！！

「しょうがないな〜私が見本を見せるから……ちゃんと見てよ？」

「えっ!?!」

そう言つて、地面に転がつてる俺に拳を降り下ろす……マジかよ……！！

「あぶねえ……！！」

転がって拳から逃げる、ちなみに……俺のかわりに、殴られた地面は凹んでいた。

俺は体を完全に直す暇もなく立ち上がる。

完璧に直さないと、立ち上がるだけでも激痛が襲う……。

「次行くよ〜！」

また、萃香ちゃんは構えた……ちよつと、待ってくれよ!!

「それえ〜!!！」

掛け声は可愛いのに……めっちゃ、豪速球な拳が来た!!

「ひゃっ!!！」

俺は情けない声をあげて、ギリギリ避ける!

あんなの当たったら、直す直さないの問題じゃなくなるだろ!?

「幽真、やる気あるの〜!?!」

……萃香ちゃんがこちらを睨んでいた……。

……良く考えたら、俺が修行をしてくれと頼んだんだっけ……。

……なら、逃げてばっかりじゃ駄目だろ。

死ぬつもりで挑め……相手は鬼だ、手加減無用!

修行でも、全力で挑まなきゃ意味がないだろ!

腹を括れ、霧島幽真!

俺は体を直し終えて……萃香ちゃんを見つめた……。

「萃香ちゃん……もう一度、やってみてよ」

「ん……やる気になった？」

萃香ちゃんは、俺が覚悟を決めたことに気づいたようだ。

「まあね」

「……じゃあ、いくよー!!」

萃香ちゃんの拳が迫る。

……集中だ、集中しろ……。

そして……俺は、萃香ちゃんの拳を、当たる寸前で避けた。

「やるね……!!」

「……もっと、本気で来ても大丈夫だよ？ それとも限界？」

「……強気だね、でも好きだよ……そういうのさ!!」

より一層、激しくなる萃香ちゃんの拳のラッシュだが……。

「幽真……凄いな、当たらないよ!!」

萃香ちゃんが、喜びの声を上げた。

……さてと、そろそろ覚えれたかな？

「ふっ!!」

ラッシュが止まったのを見計らい、強化した右ストレートで反撃をした。

やはり片手で受け止められたが……。

「……幽真、本当に見て覚えたようだね……！」

どうやら、殴り方のコツは掴んだか……。

ようやく、俺に張り合いが出てきたらしく……萃香ちゃんは、嬉しそうに笑っていた。

「ありがとう。じゃあ……こっから反撃だよ……！」

俺は、萃香ちゃんの手を振りほどいて……。
スペルカードを取り出して、宣言をした。

「強化「鋼菓子」！」

……最近、負けてばかりだから……得意な接近戦では活躍してみせる……！！

俺は萃香ちゃんに接近する。

そして、蹴りを繰り出したが……あっさりと腕でガードされてしまった。

「やるね……楽しくなりそうだよ！」

蹴り返してくるが、鋼菓子+強化のお陰で、上手くガードに成功した。

……しばらく、俺と萃香ちゃんの戦いは続いた。

「幽真く！ もっと飲めえく！！」
「あ、ああ……」

萃香ちゃんが、後ろから抱きついてくる……。
やっぱり、すっごく酒臭い……。

なぜか、修行が終わった後に……俺と霊夢と萃香ちゃんの三人で、
お酒を飲むことになった。

まあ、修行の結果だけ……当然、俺が負けた。

途中までは、お互いにクリーンヒットがなく……身を削るような、
攻防戦が続いていたが……。

最後は、俺の渾身の一撃にカウンターをされて……ダメージの蓄積
が限界まで達し……俺が力尽きた。

「すっかり、萃香に気に入られたわね……」

霊夢がそう呟く……寝ていた所を、萃香ちゃんに叩き起こされて、
軽く眠そうだった。

でも、ちゃんとお酒は飲んでいるが……。

「幽真は面白いし、気に入ったよー！」
「はいはい……分かったわよ」

萃香ちゃんが俺を抱き締めながら、そんな事を言っていた。

……まあ、今回の修行で色々学べたけど……。

一番の成果は……萃香ちゃんに気に入られた事かな？

気に入った理由は、萃香ちゃん曰く、「面白くて、強いから」だそうだ……。

負けたのに、なんでだろう？

気になり、詳しい理由を聞いてみる事にした。

「萃香ちゃん、具体的に、俺のどこが気に入ったの？」

「ん？ ん？？」

萃香ちゃんは、難しい顔をして考え込んでしまう……。そして、子供特有の無邪気な笑顔でこう言った。

「なんとなく！！」

「……そっすか」

まあ、なんとなくそのオチは予測できたよ……。

萃香ちゃんは、何かを思い出したらしく……手を叩いた。

「あっ、あの目が好き！」

「あの目？」

話の流れからすると、俺を気に入った理由だよな？

萃香ちゃんは、俺を睨んできた。

もちろん、酔っているせいか……全然怖くない。

「こんな感じの目が気に入った！」

普段は、目付きが悪いと言われぬから……。

……多分、俺が集中した時の目が好きらしい。

「そうか……ありがとう」

イマイチ、良く分からないが……理由はともかく、好かれるのは悪い気はしない。

俺は萃香ちゃんの頭を撫でた……。

……気持ち良さそうにしてる萃香ちゃんは、可愛いな……。

「幽真、あんた鼻の下が伸びてるわよ？」

「伸びてない！」

霊夢がジト目でこちらを見ていた。

さらに、ジト目からのため息のコンボを決めて……。

「……まあ、人の趣味にとやかくは言わないけど……萃香をあんまり毒牙にかけるのは止めなさいよ？」

「待て、霊夢、俺の趣味を勘違いしてないか!？」

明らかに、俺の性癖をロリコンか何かと勘違いしてないか!？

霊夢は目をそらしながら……。

「大丈夫よ、萃香は妖怪であんたより歳上だから……」

「なあ、なんで目をそらす!？　そして、人の話を聞いてたか!？」

「えー……幽真は、私の事が好きじゃないの？」

待ってくれ、萃香ちゃん!!

今その質問は、とんでもない地雷だろ!？

「もちろん、好きだけど……!!」

「うわ、認めたわ」

「認めてねえよ!!」 霊夢は、最後まで人の話を聞けよ!!」

俺はあくまで、子供が大好きなだけなんだよ!!

……ああ、ダメだ。

これじゃ、ロリコンのレツテルは剥がれない!

COOLになれ! 霧島幽真……!!

この状況を打破する渾身の一手を……!!

「……………」

俺が打開策を考えていると……背中に居る萃香ちゃんが眠そうだった……。

「萃香ちゃん、眠い?」

「大丈夫……まだ、飲める……」

「萃香、寝たければもう寝ていいわよ?」

霊夢も、心配しているようだ。

ここで一番、お酒を飲んでいるのは萃香ちゃんだっただし……いくら相手が俺でも、あれだけ動けば疲れるだろ。

しかし、萃香ちゃんは首を横にふって……。

「まだ、幽真と飲むう」

と、駄々を言っていた。

……俺は、萃香ちゃんの頭を撫でて……。

「……明日も飲もうか？ 明日はおつまみを一杯用意するからさ」
「本当！？」

「本当だよ……だから今日はお開きにしない？」
「ん〜……分かった〜」

なんとか、納得してくれたようだ……。でも、あの様子じゃ……覚えてないかもね。

霊夢は、限界寸前の萃香ちゃんを寝かしつけに行った。

残された俺は、月を眺めながら残りのお酒を飲んでいた。体は、疲労がたまっていて疲れきってるはずなのに……眠れない。

「眠れないの？」
「まあね」

萃香ちゃんを寝かしつけ終わった、霊夢が戻ってきて……俺の隣に座った。

「……萃香、よっぽどあんたの事を気に入ったみたいね」

なんだ、またその話か……。

俺は、お酒で喉を潤してから……返事をした。

「……気に入られたみたいだな、俺は負けたのに……変わった子だな」

「幽真も、十分変わり者よ」

「いきなり、スペルカードを宣言してきた奴に言われたくないな」

お互いに軽口を叩きながら、お酒を飲んでいった……。

「で、なんで眠れないのかしら？」

霊夢が、唐突にそんな事を聞いてきた。

「まさか、萃香に興奮して眠れないとか……」
「それはないから、安心しろ！」

俺は、霊夢が言い切る前に否定した。

……マジで、ロリコンじゃないか疑ってるのかよ。

今……俺が眠れない理由か……良く分からないけど……。

「理由なんていいよ、今は寝ないで飲んでいたんだよ」

まだまだ、寝る気分になれないのは……きっと、今日一日で沢山、色んな事があつて楽しかったから……余韻に浸りたいのかもしれない……。

もちろん、根拠もなければ、意味も無いが……。

「……はあ………」

霊夢は、呆れた顔をしていたが……。俺のコップを奪ってお酒を酌んで渡し……自分のコップにもお酒を酌んだ。

「でも、しばらく付き合ってあげるわ」

「……ありがとうな」

俺と霊夢は、しばらく月を見ながら、二人で飲んでいた……。

第十三話、鬼と拳で語らう！（後書き）

脱字、誤字の指摘や感想をお待ちしております！

第十四話、新しいスペルカード（前書き）

うーん、今回は、本編と言うより……番外編……に近いかもしれませんね……

では、第十四話始まります！

ゆっくりしてってね！

第十四話、新しいスペルカード

「うっ……………ふぁ……………」

私は、布団から起き上がる……………昨日、幽真に付き合ひすぎて飲みすぎた……………まだ、眠い。

「……………あ……………朝御飯作らなきゃ……………」

いつもは、朝御飯なんて作らない……………いや、お金が無くて作れないけど……………。

一様、お客……………幽真がいるから作らなきゃダメよね……………。

昨日は、無理を言つて作つてもらつただけに……………朝食まで作らせるのは気が引けるわね。

まあ、幽真が入れたお賽銭があるし……………朝食代ならなんとかなるはず……………。

そんな事を考えながら、巫女服に着替えて……………髪型を整える。

「あ……………食材なんかあつたかしら？」

朝食を作るにも……………食材が無ければ話にならない。

朝から、空を飛んで里まで行くのは面倒ね……………。

取り合えず、朝食分だけの食材があればいいけど……………。

私は、食材を確認しに台所に向かうことにした……………。

「なんだか、いい匂いがするわね……………」

台所に向かう最中に……お腹が減るような、いい匂いがしてきた。気になって台所に急ぐと……幽真が料理をしていた。私に気づいて……ニッコリと笑顔で挨拶してきた。

「おはよう、霊夢」

第十四話、新しいスペルカード

「……なんで、あんたが料理してるのよ？」

「いや、一泊のお礼に朝食くらい作るのかな」と思ってた……」

……私が思わずポカーンとしていたら……。

「台所を勝手に使ってるのは多目に見てな？」

と、笑顔で言葉を付け足してきた。

朝から幽真は、元気そうだった。

………なんで、私より飲んでいたのに………そんなに、元気なのかしら？

なにを作っているのか、気になり見てみると………魚と、味噌汁、たくあんなど………朝食の定番を作ってるようだった………。

「幽真、普通の料理も作れるのね………」

「とんでもない偏見だな………一様、使用人だぜ？」

使用人がなんの関係があるか、分からないけど………気になることが

あった。

「この食材はどうしたの？」

確か……台所には……魚も、たくあんも……味噌もなかったはずなのに……。まさか……。

「買ってきたに決まってるだろ？」

「……お金はどうしたのよ？」

「自腹に決まってるだろ？」

幽真は……当然のように返してくる。

……私は唾然としてしまった、その様子を見た幽真は笑いながら……。

「どうせ、ろくな物食べてないんだろ？ お菓子だけじゃ栄養片寄るしな」

……確かに、まともな食事をするのは久しぶりだけど……。

普通、一泊のお礼に……そこまでする？

わざわざ、朝早く起きて、里まで行って、食材を買って……なおかつ、朝食を作っている。

……私が思った事は二つ……一つは、『バカじゃないのかしら？』

もう一つは……。

「……なんだ、その哀れな子を見る目は……？」

幽真が戸惑いながら、そんな事を聞いてきた。

私、そんな目をしていたのかしら？

私は、自信を持って幽真に思ったことを伝えた。

「幽真は、きつといいお嫁さんになるわ」

「……ここでも、言われるのか……それ」

昔にそんな言葉を言われたことがあるようだ。

嫌な思い出なのか……すつごく、遠い目をしていた……褒めたつもりだったのに。

「「うちそつさま」

「霊夢、食い過ぎじゃないか……？」

幽真が呆れ気味に呟く……。

失礼ね、大盛りご飯三杯を食べただけじゃない。

……うん、幽真の料理が、予想以上に美味しかったわね……。

確か、永遠亭で働いてるって言ってたわよね？

今度、ご飯を貰いに行きましょう。

「で、萃香ちゃんはまだ寝てる？」

幽真が、食べ終わった食器を片付けながら、そんな事を聞いてきた。

「萃香なら、まだ寝てるはずよ？」

「そっか、昨日、あれだけ飲んでたしね……一様、朝食を置いておこうか……」

幽真は、萃香の分の朝食を用意した後……「ちよつと、外に出るな？」と言いつつ残して、部屋を出ていった。

……。なんとなく、何をしているのか気になり……。部屋に出てみると……。

幽真は、弓を削り出して……。弦を目一杯引いて……。離す。

それを、真剣な表情で、ひたすら繰り返してやっていた……。

「良くやるわね……」

私は、縁側に座り……。なんとなく、眺めてることにした。

「おーい、霊夢〜！ 幽真〜！」

ちよつと、幽真の素振り（？）が二百を越えた頃に……。魔理沙がホウキにのってやって来た。

「珍しいわね、こんな早くに来るなんて」

私が声をかけると、魔理沙は私の隣に座って答えた。

「いや、幽真に会いに来たんだ」

「幽真に？」

こんな朝早くに来るほど、大変な用事なのかしら……？

でも、魔理沙には慌ててる様子は見られないし……。どういう事かし

ら？

「幽真つて、結局は何しにここに来たんだ？ 気になってしょうがなくてな」

……なんか……色々とアホらしくなってくる質問ね。

私がつめ息をついていると……魔理沙は、私の湯飲み取って、飲みかけのお茶を飲み干していた。

「むっ……これは、霊夢が淹れたお茶だな」

「勝手に、人のお茶を取らないで欲しいわね……」

私がそう呟くと、魔理沙は空になった湯飲みを私に渡してきた。

……なんで、お茶を淹れた人が分かるのかしら？

「……で、幽真は何しに来たんだ？」

「相変わらず、人の話を聞かないわね……」

まあ、長い付き合いだから魔理沙に注意をしても、無駄だと言っているとは知ってるけど……。

私は、魔理沙に幽真が、ここに修行をしに来たことを伝えた。

「だから、幽真はあれをやってるのか？」

魔理沙は……まだ、素振りをしている幽真を指差した。

……集中してるみたいだし、もしかしたら、魔理沙が来たことに気づいてないのかしら？

「違うわよ、私は何も言っていないわ」

「自主的にか……まあ、霊夢に何かを教わろうなんて間違えてるぜ」
失礼ね、私だって教えたわよ。
幽真は勝手に、霊力の扱いを理解していたみたいだけど……。

「じゃあ、幽真はどんな修行をしたんだ？」

「一様、私も教えたし……夜は、萃香と修行をしていたわよ？」

しばらく、魔理沙と幽真の事で話をした……。

すると、魔理沙は幽真の方を見て……こう呟いた。

「萃香に気に入られたのか……霊夢、なかなか見所があると思わな
いか？」

「さあね、私から見れば……ただの真面目な奴にしか見えないけど
ね」

「霊夢から見れば、ほとんどの奴が、真面目に見える気がするけど
な」

失礼ね、幽真は本当に真面目よ？

……かなり、損をする性格だと思うけどね。

「……よっっ」

どうやら、幽真は素振りを終えたらしく……息をはいて、肩を回
していた。

そして、気配に気づき……こちらを向いて、やっと魔理沙が来てい
ることに気づいたようだ。

「あ、昨日の……魔理沙だったけ？」

「ああ。昨日、お前に体当たりをした魔理沙だぜ！」
「……胸を張って言わないでくれないかな？ 結構、痛かったんだよっ。」

幽真は疲れたような顔をしていたけど……相手は、魔理沙だから諦めなさい。

……幽真も、同じことを思っているのか、諦めたようにため息をついていた。

「ちよつと、待っていてくれ。今、お茶を……」

「あ、お茶ならもう飲んだから結構だぜ？」

「本当か？」

……あくまで、私の飲みかけを奪っただけだけどね。

「取り合えず、座れよ」

魔理沙は自分の隣に座るように促した。

どうでもいいけど……なんで、あんたが上から目線なのかしら？
幽真は気にした様子もなく、魔理沙の隣に座った。

「で、幽真は修行をしにきたんだって？」

「ああ、良い修行になってるよ」

魔理沙の質問に、幽真は笑顔で答えた。

「へー……じゃあ成果は、どんな感じなんだ？」

「うーん、一樣、新しくスペルカードを作ったくらいかな？」

幽真は、スペルカードらしき紙を取り出した。

……いつの間に作ったのかしら？

……私が見た感じでは、作ってる暇なんてなかったように見えるけど……。

「まあ、アイディアはあったんだよ。……ようやく、出来るようになったから、スペルカードにただけだよ」

幽真が、私の様子を見て、嬉しそうに……そんな事を言っていたけど……。

それでも、十分だと思う。

「ふうーん……じゃあ、試してみるか？」

「試す？」

「ああ、私と実際にスペルカードルールで……」「止めなさい」

私は、魔理沙の頭を軽く叩く。

多分、後に続く言葉は、「スペルカードルールで、戦ってみないか？」でしょうね……。

……魔理沙のマスタースパークが神社に当たったりしたら大変な事になるわ。

「イタツ！ 何するんだよ……大丈夫だよ、手加減はする……」

「嘘ね」

あんたに、手加減が出来るわけないじゃない、負けず嫌いの癖に。良く考えたら……幽真も幽真で、どんなスペルカードを作ってるかわからないし……戦わせたら、本当に神社が危ういわ……。

私は、「霊夢、そこは「嘘だー！」って言わないと……」「と意味が分からないことを呟いている幽真に、作ったスペルカードの内容を聞

いてみた。

「で、どんなスペルカードを作ったのかしら？」

「ん？ そうだな、一樣、四枚作っててな……」

取り合えず、幽真から簡単な説明を受けたけど……。

実際に見てみないと……良く分からないような説明ばかりだった。

「はあ……」

「もちろん、お菓子だから見た目も綺麗にしてあるよ？」

「そこは、心配してないわ」

私がつめ息をつくとき、幽真がどう捉えたのか分からないけど……変なフォローをしていた。

やっぱり……止めといて正解だったわね……。

何が起こるか分からないわ……。

「なあ、霊夢」

「嫌よ、お断りだわ」

「……まだ、何も言っていないぜ？」

魔理沙が、涙目でこちらを見ていた……。

どうせ、後に続く言葉は、「本当に神社には当てないから」「云々でしょ？」

あんたの発言なんて、お見通しよ。

「だって、お菓子を操る能力のスペルカードだぜ？ 霊夢も気になるだろ？」

「食べられないお菓子に、興味はないわ」

「またまた、霊夢は素直じゃないな」

魔理沙は、肘をグリグリと押し付けてくる……正直、うざったい。

「なあなあなあ、頼むよ〜！」

……そろそろ妥協をしないと、色々キリが無さそうね……。

………なんで、魔理沙は幽真と戦うことに、こだわることかしら？
見るだけなら、発動させて眺めるだけでも良いじゃない……。

「………そうね、幽真が神社には当てないと、約束できるならいいわ」
「出来るよな!？」

幽真は、いきなり迫ってきた魔理沙に驚いていて、目を丸くしていた。

まるで、話を何も聞いてないのに同意を求められたように……つまり、聞いてなかったわね。

「ああ………はい？」

「ほら、霊夢。幽真もこう言ってるだろ？」

………明らかに分かってない気がするけど……。
もう、面倒になってきたわ……。

「はあ、わかったわよ………」

………まあ、なんだかんだ言って、幽真の技が気になるのは確かだし
ね。

相手が、魔理沙なのは………気の毒だけど。

第十四話、新しいスペルカード（後書き）

……どうでした？

今回は、霊夢視点だったので……色んな意味で大丈夫でしたか？

感想をくれると、更新が頑張れる気がします……お願い致します！

第十五話、初めての遠距離戦（前書き）

……更新、遅れてごめんなさい！

でも、クオリティはいつも通り……だけど、第十五話始まります！

ゆっくりしていいってね！！

第十五話、初めての遠距離戦

「出来るよな!？」

「ああ……はい？」

……ごめん、なにが？

なんか、霊夢と魔理沙がイチヤイチャしてたから……邪魔しては悪いと思つて……姫様の事を考えていたが……。

魔理沙が顔を近づけて、凄んできたので思わず、ろくに話を理解せずに返事をしてしまったが……何が出来るつて？

「ほら、霊夢。幽真もこう言ってるだろ？」

「はあ、わかつたわよ……」

魔理沙はしてやったり顔で、霊夢は逆に、心底めんどくさそうな表情をしている……。

……さて、何のお話で？

「ほら、早くやるぜ!」

「……えっ?」

魔理沙は、片手にホウキを持ちながら、片手で俺を引っ張って神社の真ん中に連れていく……。

「んじゃ、いくぜえ」

魔理沙はトンガリ帽子に手をいれて、なにかを取り出した……。

……見る限り、あれは……金属で出来てるように見えるが……?」

そんな、事を考えていると、魔理沙はそれをこちらに向けて……。

「恋符「マスタースパーク」！」

ああ、そう言えば、スペルカードを試すために勝負ご的な話をしたな。

まさか……これはその勝負？

「……超展開乙？」

そこまで、気づけたのは良かったが……。気づいた時には、全身に激しい痛みが襲った。

第十五話、初めての遠距離戦

「……し……死ぬかと思った……」

俺は、なんとか体を直して立ち上がった……。

あのアイテム凄いな……あんなに小さいのに、驚きの火力を持っていた……。

……幻想郷に来て、早くも二週間がたったが……二番目に痛かった

……。 (一番は、師匠のお仕置き)

「なんだよ……ちゃんと、避けるとか、迎え撃つとかしてくれよ
〜！」

不満そうな顔をしているが……いきなり、大技をやってくるのは反

則じゃないか？

いや……話を聞いてなかった、俺が悪いのかな？

取り合えず、状況を正しく理解するために……魔理沙に確認を取ることにした。

「……なあ、これは、俺のスペルを確認するための戦いなんだよな？」

「そうだぜ？」

当然の様に言葉を返してきた。

なるほど、状況は理解できたが……気になることがあったので聞いてみる。

「じゃあ、なんで……そつちから、撃つてくるんだ？」

……一瞬、なぜか、変な空気が流れて……。

「戦いに情けは無用だぜ！ 撃ってきたら撃ち返せ！」

と、輝かしい笑顔で告げてきた……。

……なぜだろ、子供にイタズラされて、怒るに怒れない状況にいるみたいだ……。

反撃したくたつても……すぐに発動出来て、あの威力に対抗できる技なんかないんだけど……。

「魔理沙……いきなり、マスタースパークなんて撃つたら、反撃も何も無いわよ？」

霊夢が、「予想通りの展開ね……」みたいな顔をしながら、魔理沙をなだめた……。

……多分、霊夢の事だから、俺が話を理解して無いことをも、分かっていたのだろう……。

「……まあ、霊夢がそう言うなら……ほれ、かかってこい！」

魔理沙は胸を力強く叩き、なぜか「良いことをしたぜ」的な表情をしていた。

……俺、勝負するなんて言ったけ？

……色々ツッコミどころがありすぎる……それとも、俺が気にすぎなだけか……？

もう、考えるのを諦めて……一枚の紙……スペルカードを取り出した。

まあ、過程はどうであれ……勝負するなら……勝ちたいよな？

「甘符「綿菓子」の雲」……！！」

俺は、霊力を加えて、ふかふかで……雲みたいに大きな綿菓子を創った。

「綿菓子の雲……？」

霊夢も魔理沙も……不思議そうな……いや、呆れた表情をしていた……あれ？

「あれ、反応……薄くない？ 綿あめの雲だよ？ ……嬉しくない

「？」
「その年になつて、綿あめの雲で喜べるのは……あんたか、よつぽど脳内がお花畑な人だけよ？」

霊夢の言葉が、俺の心の弱点にヒットした！

……わ、悪いか！？

未だに、あの雲が全部綿菓子ならいいのにな……とか思つてて悪いか！！

「もう、行け！！」

半分、ヤケクソ気味に叫び……綿菓子の雲を空に打ち上げる……。

「目標捕捉、降れ！！」

魔理沙に目掛けて……綿菓子の雲から、霊力が籠った「飴」が降ってくる。

「綿菓子から、飴の雨か……なんとつか定番だな……魔符「スターダストレヴァリエ」！！」

苦笑しながら、雲から発射される飴を撃ち落としていく魔理沙……。

……俺は、弓を創りだし……構える。

「俺も忘れないですよ？」

霊力入りのお菓子で創った矢を何発か、魔理沙に目掛けて放った。

「……くっ！？」

矢を寸前に避けた魔理沙だが……攻撃の手を緩めただけに……撃ち落とせなかった餡が、魔理沙に降り注ぐ。いやぁ、遠距離攻撃って……便利だね……。強化して殴ってた頃が、懐かしい。

「ああ、面倒な技だぜ……！」

魔理沙はホウキに乗って、空を飛ぶが……。空を飛んでも……雲からは逃げられないよ。

「分裂、困め！」

綿菓子雲は、分裂し……魔理沙の前に立ちふさがり……困むように広がった。

そして、四方八方から餡を発射する。

「……なるほど……本当に面倒な技だぜ……！」

餡を避けながら……上下左右に散らばった雲を睨みながら、魔理沙はそう呟いた……。

「でも、私には関係ないぜ……！」

またも、魔理沙はヘンテコな道具を取り出した……。ヤバイな……周りを無視して俺を狙う気か……。確かに、マスタースパークの火力とスピードなら、本体を狙った方が手っ取り早いよな……。

「集結！ 俺を守れ！」

「恋符「マスタースパーク」！」

発射する前に、雲が俺の前に集まり、マスタースパークを受け止めるが……。

(……ダメだ、限界か?)

綿菓子雲は……霊力と砂糖の固まりみたいなもの。

……撃ち出されている飴は、雲の中で雲に貯まっている霊力と砂糖を材料に作られている……つまり、飴を撃ち込めば撃ち込むほど……

……あの雲は小さくなる……。

……この大きさでは、マスタースパークを止めるには……大きさが足りない……かな?

そんな事を思っていたら……綿菓子雲が、マスタースパークと共に消えてしまった。

「相打ちか……」

魔理沙が、そう言っていたように聞こえた。

どうやら、マスタースパークを防ぎきれたようだ……。

綿菓子雲は消えてしまったなら、さっさと……追撃といきますか……!

「……んじゃ、次のスペルを披露だ!」

俺は、もう一枚のスペルカードを取り出し、宣言する!

「甘符「七色のお菓子」!」

弓に『発射したお菓子に、七色のうちのどれか一つの色の、トッピングをする』の追加設定を付けた。

そして、靈力を材料に加えたお菓子の矢を……ひたすら乱射する。

ちなみに、色によってトッピングの味が違う……例えば、「赤、イチゴ味」・「橙、オレンジ味」・「黄、バナナ味」・「緑、抹茶味」・「黒、黒蜜味」、「白、ミルク味」・「紫、ブドウ味」……虹の七色を基本に作ってみただけ……青と藍は白と黒に変えた。

「へえ……なかなか、面白い技だぜ……」

カラフルな矢が、魔理沙を襲うが……空を飛んでいる魔理沙に、なかなか当たらなかった。

くそっ……こうなったら、集中して連射スピードを上げるしかないか……！！

「集中ッ……！！」

俺は、次々とお菓子の矢を創り……連射のスピードを早めた……。しかし……魔理沙の飛ぶスピードの方が早く……矢が当たらない……。

「どうした、その程度か？」

魔理沙が、余裕の表情で……そんな事を言っていた……。

「くそっ……相性が悪いのか……？」

この技は、見た目に凝りすぎたか……この技はもっと改造しよう……。

気づくと……俺の残りの霊力も少ない……これ以上の攻撃は、霊力の無駄か？

俺は、矢を射つ手を止めた。

「どうかしたのか？」

魔理沙は、空から降りてきて、俺の表情を伺っている。

俺は、しばらく自分が勝つための方法を考えて……魔理沙に……一つの提案をした。

「魔理沙、次で終わりにしないか？」

俺は、一枚のスペルカードを取り出して笑みを浮かべた。

……さも、勝てる自信があるように。

「……いいぜ、その誘い乗った！！」

魔理沙は、俺の誘いに喜んでるようだ……。

自分でも……分かってる、あんなバカみたいな火力を出せる魔理沙に、一騎討ちを持ちかけるのは……無謀としか言いようがない……実際に、魔理沙は、かなり一騎討ちに自信があるように見える。

でも、綿菓子雲や、お菓子の矢が通用せず……しかも、エネルギーもわずか……。
なら、一騎討ちで、渾身のスペルに勝機をかけるしかない……。

（霊力の使い方をマスターした、お陰で……大分、強くなれたと思

ったのにな……………)

……いや、今はクヨクヨ考えてたってしょうがない……………勝つために全力を尽くすだけだ。

俺は、魔理沙を見つめ直し……………。

「行くぜ、魔理沙!!」

俺が作ったスペルカードの中で、一番威力があるはずのカードを掲げ、発動を宣言する!!

「甘符「お菓子の巨人」!!」

……俺は、お菓子で巨人を創り出した。

見た目は、ゴーレムに近い。

上半身だけで、腕がかなり太いタイプの巨人だ。

「いつけえー!!!!」

お菓子の巨人が、魔理沙に巨大な拳を降り下ろす!

しかし……………魔理沙は余裕の笑みを浮かべていた。

「恋心「ダブルスパーク」!!」

まずは、マスタースパークを一発撃つ……………巨人の腕に当たり、腕が砕けた。

「もう一発!!」

……魔理沙は、もう一発のマスタースパークを発射した……。

なるほど、マスタースパークを二発連続で撃つのか……シンプルだけど……強いスペルカードだな……。

「防御しろー！」

もう一発のマスタースパークを片方の腕で防ぐが……。

二発目のマスタースパークが、巨人の腕を貫き……頭に命中した。

崩れ落ちて、消えていくお菓子の巨人……ここまでだな。

「はぁ……負けだ、降参だ、お手上げ侍だ……」

俺は、両手を上げて座り込む……。

結果は惨敗……少しは強くなれたと思ったのに……まだまだ、師匠のようにはなれそうにないな……。

「まあ、幽真も中々強かったぜ？ もう、煙りすら出ないぜ……」

魔理沙は、手を差しのべてきた。

その手を掴み立ち上がる。

そして、俺の腹が盛大に鳴った。

「腹減ったな……」

……靈力も腹の中も……空っぽの状態だからお菓子が創れない……。改めて思うけど……俺の能力は……本当に不便だよな。

「なんだ、腹減ってるのか？」

負けたショックと、腹減りで、シヨボくれていると……魔理沙はスカートの中に手をいれて、金平糖を取り出した……。
今、スカートの中から出した！？

「ま……魔理沙、どこにしまってるんだよ！？」
「どこって、スカートの中だぜ？」

……魔理沙は全く気にした様子がない……。

なんだ、魔女はスカートの中に何かを入れて持ち歩くのか……？
武器をスカートの中に隠してるキャラなら知ってるが……よく落ちないよな……。

「慌ててどうしたのかしたのか？ 下着でも見えか？」

魔理沙、回答に困る質問を、いきなりするのは止めてくれ……いや、いきなりじゃなくても止めてくれ……。
ちなみに、下着は見えてないからな。

「まあ、幽真も思春期だから……ね？」

霊夢が縁側からお茶を飲みながら、そんな事を言っていた。
なんだ、その理解ある母親のような台詞は？

「そうか、ならしょうがないぜ」
「そうよ、しょうがないの……」

なぜか、うなずき合う二人……ああ、ダメだ……ツツコミたいのに……頭がクラクラする……。
ヤバイな、本気で限界みたいだ……。
「おい、幽真!？」

魔理沙の叫び声が聞こえた。

気づくと俺は、地面に倒れていた……。

……エネルギーが切れて、徐々に意識が失われていくのが分かった……。

俺は、静かに目を閉じることにした……。

第十五話、初めての遠距離戦（後書き）

……さて、最後までご覧になってくれたなら、解るでしょうか？

私のネーミングセンスの無さが！！

スペルカードの名前を、迷い続けて更新が遅れました！（結局、適当にそのままになったけど……）

……誰か、幽真君のスペルカードに、良い名前をつけてください…

……。
私には無理です……。

……長くなってすみません、感想をお待ちしていますー

第十五話（番外編）、実験と天狗と朝御飯（前書き）

この話しは、十三話の後のお話です！

十五話（番外編）と書いてありますが……。

実際は、十三話、十四話の番外編です。

時間は、十三話の最後から、始まります。

……あと、長いです、二話分くらいあります。

第十五話（番外編）、実験と天狗と朝御飯

「ごめん、私はもう寝るわ……あんたも早く寝なさいよ……」

「ああ、おやすみ」

「寝るときは、適当に空いてる部屋を使っていいわよ……」

霊夢は、部屋に戻ろうと、よろよろと立ち上がった……。
危なかつしいな……。今にも倒れそうだ……。
しょうがない、部屋まで送るか……。

「大丈夫か？ 部屋まで送……」

「大丈夫よ」

なぜか、霊夢は警戒していた……。親切で、部屋まで送ろうとしただけなのに……。てか、せめて言わせてよ……。
霊夢は、やっぱり、今にもぶっ倒れそうな、ふらふらとした、足取りで部屋に戻っていく……。

……後で、廊下に転がってないか確認しよう。

第十五話（番外編）、実験と天狗と朝御飯

霊夢が居なくなつて……。縁側には俺一人になつた……。

「……結構、飲んだな」

萃香ちゃんの修行の後の宴会でも、少し飲んだし……霊夢と二人でも、結構飲んだ。

今更だが……俺って、意外に酒に強いのか？

「まあ、いいや……二日酔いしなさそうだし……」

最後に、コップに残っているお酒を飲み干す。

そして、夕方の事を思い返した……。

桜の木をへし折った、霊力入りのお菓子の矢についてだ……。

「霊力入りのお菓子か……」

原理は全く分からないが……。

霊力を材料に加えるイメージをすると、実際に霊力が加わり……威力が増す……。

「なんでだろうな？」

威力が増す理由を、考えてみることにした……。

霊力は思いの力……と言うことは、思いが籠ると……お菓子が強くなる？

……料理は愛情……と同じ原理か？

じゃあ、料理に霊力を入れれば……同様に威力が上がるのか……？
料理の威力って……なに？

よくギャルゲにある、食べた瞬間に倒れる料理の事か？

……ダメだ、考えても全く分からない……。

と、言うか……俺の能力事態に、分かってないことが多いからな……。
考えるだけ、無駄か？
……それとも、俺の頭が悪いただけか……？

「思考がズレてる……COOLになれ、霧島幽真……」

お酒のせいか……軽く混乱していた頭を、一回リセットする。

（今は、細かいことを考えずに……霊力入りのお菓子をどうやって、弾幕に結び付けるかだよな……）

即戦力になることは、確かだし……原理がどうこうより、使い方を考えた方が有意義のはずだ。

「一樣、やってみたい事はあるんだよな……」

例えば、綿菓子で雲を作って、飴の雨を降らせてみたり。
お菓子で、巨人やロボットを作って戦わせたり。
あと、お菓子のお城も作りたいし……。

上げたら……キリがないから止めておこう……。

「……取り合えず、試してみるか！」

俺は、立ち上がった……実際に創ってみて、弾幕に使えるかどうか判断することにした。考えるな、感じる！ って奴だな。

「ふう……まあ、こんなものか……」

まずは、外で霊力入りのお菓子を試し……空き部屋を借りて、外での実験結果をまとめて、どうスペルカードにするか考えていたら……真っ暗だった、空が少しだけ明るくなっていた……。

「うっわ……もうこんな時間か……」

俺は、背伸びをしながら……実験結果を元に、出来上がった四枚のスペルカードを眺めた……。

「スペルカードの名前は……まだ、決めなくていいや……」

いくらなんでも、いきなりスペルカードを使うような、超展開乙なバトルイベントはないだろ……。

凝った名前は、後で考えればいいや……。

（そろそろ、寝ないと辛そうだな……）

仮眠でも取っておこうと思って……自分の腕を枕にして、横になり……目を閉じてみる。

……。

「……………眠くならないな」

しばらく、目を瞑って横になっていたが……。

結局、眠気は襲ってこなかった……。

「おかしいな……不眠症にでもなったか？」

神社まで全速力で走ってきて、霊夢に問答無用で攻撃されて、魔理沙に跳ねられて、萃香ちゃんと殴りあって、お酒を飲んで、徹夜で実験して……。

これだけ、疲れてる要因があって……全く、眠くなかった……。

「取り合えず……後片付けをするか……」

俺は、起き上がり……明かりを消して……。

実験は終わって必要が無くなった……能力のお菓子で創った、机と鉛筆と紙を消した。

「……あ、そうだ。 霊夢はちゃんと部屋で寝たのかな？」

そして、酔っていた霊夢の足取りが、危なかった事を思い出す。

「ちよつと、見回ってくるか……」

霊夢の部屋は、何処だか分からないが……取り合えず、神社の中を適当に歩いて、霊夢が転がってなければいいや……。

俺は、立ち上がり……部屋のふすまを開けて廊下に出た……。

「予想通り……かな？」

廊下を歩いていると、一つの部屋のフスマが開いていた……。

気になって覗いてみると……服を脱ぎかけで力尽きている霊夢がいた……。

「……はあ、布団すら敷いてないじゃないか……」

取り合えず、押し入れから布団を出して敷く……。

次に、霊夢の脱ぎかけの服を脱がせて、布団に入れて……脱いだ服を畳み枕元に置く……。

……なんだろう、手をかかる娘の世話をしている母親の気分だ……。

「まあ、こんなものでいいか……」

いつまでも、少女（俺より強いけど）の部屋に勝手に居るわけにはいけないよな……。

俺が、さっさと立ち上がり……部屋を出ようとすると……。

「……せ……」

霊夢の苦しそうな声が聞こえた。

……どうかしたのだろうか？

「生活費があ……」

「……嫌な夢を見てるみたいだな……」

……少女の寝言で「生活費が……」なんて聞けるとは……貴重な体験だ。

俺は、心配した自分を恥ずかしく思いながら、部屋の外に出た……。

「全く、心配して損したな……」

俺は、ため息をついて……早く、さっき使っていた部屋に戻ることにした……。

「……でも」

寝言で言うまで……霊夢の生活は苦しいのか……？

そう言えば……魔理沙が、霊夢は良く空腹で倒れてる……とか言うてたな……。

大事のはずなのに、笑って話してたから、冗談だと思っていたが……。

……予定を変更して、俺は、台所に向かうことにした……。

「うわっ、なにもないな……」

まさかと思って、台所で食材チェックをしていたら……なにもなかった……。

「……ど、どうやって、今まで生きてきたんだろ」

俺は、家庭教師のバイトと仕送りで、潤っていたから分からないが……。

……これが、本気で収入がない人の暮らしなのか……？

そして、俺が創ったお菓子を頼張っていた霊夢を思い出す……。

「よっぽど、餓えてたのか……」

……やっぱり、お菓子だけじゃ栄養が偏るよな……。

いつか、空腹じゃなくて栄養失調で倒れそうだし……。

「しょうがない……朝飯ぐらいは、作ってやるっ」

一泊のお礼として、お菓子だけじゃなく……ちゃんとした食事を作ることにした。

取り合えず、買い出しだけ……まだ、外は暗いから……人間の里まで、歩くのは危険だよな……。

「……試しに使ってみるか……」

俺は、買うものを頭に思い浮かべながら、外に出た。

「お菓子の巨人！」

俺は、スペルカードをかかげて、お菓子で出来た巨人を作り出す……。
あ、スペルカードをかかげたのは、なんとなくだから……意味はない。

「んじゃ、運んで貰おうかね」

俺は、巨人の手のひらに乗り……巨人を浮かばせる……。

「乗り心地はいいけど……」

歩くのが危険なら、空を飛べば安全なはず……だよな？

飛んだことなんて、無いから分からないし……幻想郷は何が起こるか分からない……まあ、歩くよりはマシなはず。

……目立つかも知れないけど……妖怪には脅しに使えるし……人には、見られないように、人間の里の近くで降りれば大丈夫だろ……ちなみに、巨人に投げて貰って人間の里に向かう案もあったけど……。確かに目立たないし（？）、早く到着出来るけど……死にそうだから止めといた。

「……お給料……以外と使っちゃったな……」

俺が乗ってる反対の、巨人の手には、様々な食材が積んである。まだ朝方なのだが……人間の里には、開いてるお店が多くて助かった。

お陰で、萃香ちゃんとの約束も果たせそうだ。

「ん……なんだあれ……？」

何かが、物凄い速さで、接近してきている事が確認できた……。

「女の子か？」

取り合えず、巨人を止めて、待機させることにする……。接近してきたのは、背中には、黒い翼が生えていて、空を飛んでいるのにミニスカートの女の子だった。

そして、こちらにたどり着くなり……女の子が、俺と巨人の写真を撮影してきた。

「ちょ……いきなり、何してるんだ!？」
「なにして……撮影してるだけですよ?」

問いかげに、少女は、悪気をを全く感じられない答えを返してきた

……。

……面倒な事になりそうだが、無視も出来ない。

俺は……少女に話しかけてみる……。

「普通は、撮影許可をしてから撮影しないか?」

「じゃあ、撮らせて頂きますね、ありがとうございます!」

「撮影してから許可を貰おうとしてる上に、まだ、許可すらしてないんだがな……」

今度から巨人に乗って、空を飛ぶのは止めよう……目立つと、変なものに絡まれるからな……。

「あやや? どうかしましたか? 疲れた顔をしています……」

「……ああ、凄く疲れたよ。だから、帰るな」

やっぱり、面倒な事になったので、さっさと逃げようと、巨人を動かすが……。

「待つてくださいよー! まだ、貴方の取材が終わってないんですから!」

「俺の取材……?」

「はい、私の本命は貴方なんですからね?」

なんか、色々と誤解されそうな表情と言い方をしているが……。
少女は、俺に用事があるらしい。

「で、用件は？」

「……そこは、ツツコンでくださいよ……あの類いのポケはスルーされると悲しいんですから……」

ああ、知ってるからスルーしたんだ。

……何故だろう、この少女から俺と同類の匂いがする……。

「取り合えず、霧島幽真さん……ですよね？」

「……なんで、俺の名前知ってるの？ ストーカー？」

「ストーカーではありません、新聞記者ですから」

「……そこを、真面目な顔で返さないでくれないかな？」

「さっきのお返しですよ」

そんな、感じで全然話が進んでいるようで、進まないから……結果を纏めて話そう。

彼女の名前は、射命丸しやめいまる文あや。

天狗の新聞記者で、「文々。新聞」（ぶんぶんまるしんぶん）という新聞を作っている……永遠亭にも届いていて、俺も読んだことがある。

内容は、なんつーか……面白いけど、情報収集には使えない新聞だった。

で、なぜ、彼女が俺に取材を申し込みに来たのかと言つと……。

「……富士あんみつの完食者を探したら、都合良く俺が、目立つものに乗って空を飛んでいたから……ねえ」

「あやや？ なにか不満でも？」

「別に、不満はないが……後悔はしてる」

……やっぱり、巨人に乗って空を飛ぶのは金輪際止めておこう……。

「良いじゃないですか、お陰で私のような美少女に会えたんですから」

「悪いが……俺は、黒髪は好きだが、ショートには興味がないんだ」

こんなにも、面倒な天狗に絡まれるから。

しばらく、取材とやらに付き合わせられた……。

もちろん、脱線はしまくるし……お互いに、ボケてはスルーを繰り返して、全然進まなかったが……。

「はあ、疲れた……」

ようやく、新聞記者から解放されて……博麗神社の台所にたどり着いた……。

「……でも、あの新聞記者との話しは、意外と楽しかったな」

確かに、疲れはしたが……あの新聞記者のお陰で、少しは元気が出てきた。

今度は、時間と体力があるときに喋りたいな。

「さてと、霊夢が起きる前に、作っちゃおうか……」

俺は、エプロンを装着し……調理を始めた。

そして、朝食作りが大分終わった頃に……。

霊夢が起きてきたようだ……。

「おはよう、霊夢」

振り向いて、霊夢に笑顔で挨拶をする。

「……なんで、あんたが料理をしてるのよ？」

霊夢は俺の事を、呆然として見ていたが……正気に戻ると、そんな事を言っていた……。

「いや、一泊のお礼に朝食くらい作ろうかな〜と思ってさ……」

流石に、食生活が心配だから〜なんて言ったら怒るよな？
でも、嘘は言っていない。

「台所を勝手に使ってるのは多目に見てな？」

又も呆然としていた霊夢に、笑顔でそう言った……。

「幽真、普通の料理も作れるのね……」

霊夢は、俺が作っている物を覗いて……感心したように呟いた。

「とんでもない偏見だな……一様、使用人だぜ？」

永遠亭で働き初めて、姫様の健康のために、普通の料理も、更にも手くなったしな。

それに、外の世界では、親がないから、自炊は基本だったし。

「この食材はどうしたの？」

「買ってきたに決まってるだろ？」

「……お金はどうしたのよ？」

「自腹に決まってるだろ？」

質問を返していく度に……霊夢はあきれ返っていた……。

「どうせ、ろくな物食べてないんだろ？ お菓子だけじゃ栄養片寄るしな」

その様子が面白くて……つい、口が滑ってしまったが……気にせず笑顔でごまかした。

すると、霊夢が……なんつーのかな？

バカにしつつ、尊敬してるような目をして、こちらを見ていた……。まあ、要するに……。

「……なんだ、その哀れな子を見る目は……？」

そんな感じの目で見られていたので、少し戸惑ってしまった。

「幽真は、きつといいお嫁さんになるわ」

俺が戸惑っていると……なぜか、霊夢が胸を張って……昔のトラウマをえぐってきた。

「……ここでも、言われるのか……それ」

幽真です……小学生の頃に、クラスの壁新聞で「お嫁さんが似合う子ランキング」で……ぶつちぎりで、一位を取ったことがあります。……しかも、殿堂入りしました。

……霊夢は、寝たつもりらしいが……喜べないな……。

「霊夢……そんなに慌てて食わなくても……」

俺のトラウマが抉れてから、数分後……。

今は、霊夢が一心不乱にご飯を食べていた……。

「おかわり、早く!」

「は……はい!」

あんまりの気迫に、敬語になりつつ……俺は、ご飯を盛っていた……。

「ごちそうさま」

「霊夢、食い過ぎじゃないか……?」

霊夢は、山盛りのご飯を三杯も食べきっていた……。

ちなみに……沢庵一枚で、余裕で山盛りのご飯を食べきっていた……生活、本当に辛いんだな……。

「で、萃香ちゃんはまだ寝てる?」

一樣、霊夢から萃香ちゃんの分の朝食は守りきった……。下手すると、俺の分も萃香ちゃんの分も、食べそうな気迫を出していたし……。

「萃香なら、まだ寝てるはずよ?」

どうやら、お腹一杯になって、霊夢は落ち着いたらしい……。よかった……。あの時の霊夢は、本当に怖かった……。

「そっか、昨日、あれだけ飲んでたしね……。一樣、朝食を置いておこうか……」

俺は、ちやぶ台に一食分の食事を用意して……。

「ちよっと、外に出てくな?」

と、霊夢に言つて……。外に出た……。

先ずは、弓を作り出して……。弦を引いて……。離す。

また、弦を引いて……。離す。

もう日課になりつつあるこれを、集中してやっていた……。

……。俺が弓を使ってる本当の理由は、師匠に憧れて……。

……。だから、少しでも弓の扱いを上手くなって、少しでも師匠に近づきたい……。

その一心で、弦を引いていた。

「……よっし」

目標回数が終わったので……。弓を消して、肩を回す……。ふと、縁側の方を見ると……。霊夢と白黒の魔女がいた……。

「あ、昨日の……魔理沙だっけ？」

俺が、近づいて話しかけると……魔理沙は笑顔で答えた。

「ああ。昨日、お前に体当たりをした魔理沙だぜ！」

「……胸を張って言わないでくれないかな？ 結構、痛かったんだよ？」

まあ、魔理沙は何言っても無駄なタイプだからな……。

俺は、諦めたようにため息をついた。

それより、お客が来てるんだから、お茶でも入れなきゃな……。

「ちよっと、待っていてくれ。今、お茶を……」

「あ、お茶ならもう飲んだから結構だぜ？」

「本当か？」

そうか、霊夢が先にお茶を入れたのか……。

でも、湯飲みが1つしかないのは……なんでだろうな？

「取り合えず、座れよ」

魔理沙に促されて、俺は、魔理沙の隣に座った。

「で、幽真は修行をしにきたんだって？」

「ああ、良い修行になってるよ」

ここに来たお陰で、近距離、遠距離の両方を学べたからな……。

「へー……じゃあ成果は、どんな感じなんだ？」

……成果か……成果と言うのかは解らないけど……。

「うーん、一樣、新しくスペルカードを作ったくらいかな？」

一樣、そう答えておいた……。

すると、霊夢が驚いたような表情をしていたので、「こつ付け足す」とにした。

「まあ、アイディアはあったんだよ。……ようやく、出来るようになったから、スペルカードにしたらただだよ」

元々、やってみたい事はあったから……一から考えた訳じゃない。徹夜で実験しただけだから、実際に大した事はないのだ。

「ふうーん……じゃあ、試してみるか？」

魔理沙が、いたずらっ子のような笑顔を浮かべて、そんな事を言っていた。

「試す？」

「ああ、私と実際にスペルカードルールで……」「止めなさい」

魔理沙が言い終わる前に、霊夢が魔理沙にチョップをして黙らせた……。
結構、勢いよくやっていたから……痛そうだ。

「イタッ！ 何するんだよ……大丈夫だよ、手加減はする……」
「嘘ね」

その後、霊夢と魔理沙は何かを言い合っていたが……。

「霊夢、そこは「嘘だ!!」て言わないと……」

俺は、唯一そこだけは、気になっていた……。
幻想郷ではひらしは、知られていないからな……残念だ。

「で、どんなスペルカードを作ったのかしら？」

霊夢が、こちらを向いて、そんな事を聞いてきた。

「ん？ そうだな、一樣、四枚作ってな……」

取り合えず、俺は、今朝に作ったスペルカードの説明をした……。

「はあ……」

説明が終わると、霊夢がため息をついていた……。

ああ、そうか……男の俺が作ったスペルカードだから……きっと、
綺麗な弾幕が無いとか思われているのか？

「もちろん、お菓子だから見た目も綺麗にしてあるよ？」

「そこは、心配してないわ」

……じゃあ、なんの心配をしているんだ？

霊夢の表情を見ると、意外と深刻な悩みのようにだし……。

「なあ、霊夢」

……魔理沙が、霊夢に泣きついていた。

なんとなく、その光景を見れずに、目をそらして……。

（ああ、姫様のお世話をしたいなあ……）

しばらく、魔理沙と霊夢が話していたので……。

俺は、なんとなく姫様の事を考えていた。

↳そして、第十五話へ

第十五話（番外編）、実験と天狗と朝御飯（後書き）

珍しく暇で……やりたい事を詰め込んだら……こんな長文に……。次回からは、いつも通りの長さです。

では、感想と誤字、脱字の指摘お願いしますね？

第十六話、『死因』（前書き）

……気づくとまた、長くなっていた……。

今回は、コメディー多目の、ちょっとだけシリアスなお話です。

では、第十六話始まります。

ゆっくりして行ってね！

第十六話、『死因』

「気絶した人に……この仕打ちは……げほげほ！」

魔理沙との戦いの末に……エネルギー切れで気絶し……なんとか、正気に戻ったけど……。

今の方が、気絶していた時以上にダメージがあった……。

原因は……霊夢、魔理沙、萃香ちゃんの看病(?)だ……。

「おい、大丈夫か？ ほれ、これでも飲めよ」

「いらぬよ……さつき、たらふく飲まされた……」

色んな意味で、死にかけている俺に、魔理沙は、笑顔で酒を進めてきた。

「いつき！ いつき！」

「萃香ちゃん、これは宴会じゃないからね？」

起きて間もないはずなのに、酔っぱらっている萃香ちゃんが、瀕死の俺に一気に飲みコールをしてきた……。

「全く、看病してあげたのに……文句ばかりね」

「霊夢、冷静に考えろ。あれを看病と呼べるなら、医者はいらない」

数分前、幽真がエネルギー切れで気絶中

「大変だ、霊夢！ 幽真が倒れちゃったぜ！」

「大丈夫よ、空腹で倒れてるだけよ……私には分かるわ」

「流石だな、霊夢……極貧生活で、よく倒れてるだけの事はあるぜ！」

「任せなさい、私が幽真を救ってみせるわ……」

「今、幽真の死亡フラグが立ったぜ！」

「魔理沙！ 幽真の口を開けなさい！」

「了解だぜ！」

「おりゃあああああ！」

「おお……気絶してるのに、口に金平糖を詰め込むなんて……流石、霊夢だぜ！」（色んな意味で）

「これで、安心ね……」「なにが、安心だか解らないけど、安心だな」

「あら……変ね、幽真の顔が真つ青よ？」

「喉に詰まったんじやないか？」

「……その可能性は考え付かなかったわ……」

「その可能性は、真つ先に考え付かないか？ 気絶してる時点で」

「霊夢、幽真は？」

「あら、萃香……ちようどいいわ……ひょうたんを貸しなさい」

「え、なんで？」

「幽真を助けるためよ、いいから貸しなさい」

……で、不運な事に……ここで、金平糖の糖分でエネルギーが充填されて……意識が戻ってしまった。

目覚めた時には、少女三人に押さえつけられながら、金平糖を無理矢理噛まされて、酒で流し込まれる……惨劇が起きていた。

口の中は、金平糖を無理矢理、噛まされたせいで切れたし……。気管に酒と金平糖が詰まるし……苦しくて、暴れると殴られた。（

霊夢に）

正に、「看病」と書いて「ごうもん」と呼ぶ、状況を味わえた。

く回想修了く

「私達は悪くないわ」

「悪くないぜ」

「悪くないぞー」

少女三人は、下手をすれば殺人未遂になりかねない、看病をしておきながら反省の色が見られなかった……。

……なんか、どうでも良くなってきたよ……。

幻想郷に来てから、俺の常識とか、命の大切さとか、色んな物が失われつつある気がする……。

「……はあああ」

考えるのを止めて、深くため息をついた……。

……でも、結果はどうであれ、看病をしてくれたんだ。

あの状態で放置されるよりかは……うん、放置された方が、マシな気がしたのは気のせいだよな？

「さてと、幽真も蘇生した事だし……お茶でも飲みましょう」

「お、賛成だぜ。戦った後だから、喉がカラカラだしな」

「霊夢くお茶よりお酒がいい〜！」

……まあ、今は過ぎたことを気にせずに……お茶の準備をした方がよっぽど有意義だよな？

「ほら、早く来なさい……お茶菓子が欲しいわ」

「了解だ、取って置きのを用意しよう」

霊夢にそう言って、洋服の汚れを叩き……三人の元に歩いていった。

「そう言えば……幽真は、いつ帰るんだ？」

しばらく、お茶と話が進み……ちょうど会話のネタが無くなった頃に、魔理沙がそう切り出してきた。

「あ、ほら……幽真と、戦ったけどさ……十分、霊力を扱っていたように見えたから……だって、霊力の扱いを、習得するために来たんだろ？」

「……確かに、そうね。ちゃんと、弾幕にもなってたし……」

なぜか、慌てている魔理沙の言葉を聞いた、霊夢も、そんな事を呟いていた……。

……確かに、師匠の命令の「霊力の使い方をマスターする」は、もう昔に終わっている。

ここにいる理由は……無いのは確かだ……。あんまり長い間、永遠亭のお仕事を休むのは……気が引けるな……。

「もう帰っても、いいんじゃないのかしら？」

俺が考え込んでいると、霊夢の言葉が聞こえてきた。

そして、付け足すように言葉を続ける。

「用事は、もう終わったんでしょ？　ちゃんと、仕事があるなら、明日か今日にも帰りなさい」

……セリフだけ見ると、冷たく思えるが……そう言って貰えるのはありがたい。

自分から帰ると言うより、他人に言われた方が帰りやすいからね。

「そうだな……明日の朝辺りに帰らせて貰うよ」
「……分かったわ」

俺がそう言つと……霊夢は、どうでもいいように、相づちをしていた。

「え、幽真、帰っちゃうの？」

突然、萃香ちゃんが、残念そうにそんな事を呟いていた。

「うん、俺にも仕事があるからね」

「私も、幽真のスペル見たかった！」

……ああ、萃香ちゃんが起きたのは、ちょうど決着がついた頃だと聞いたしな。

「なら、萃香ともう一戦だな！」

「それだけは勘弁してくれ！」

「……なんだ、男らしくないぞ？」

「男らしいと、ただの無謀は大きな違いがあるからな……」

魔理沙が、親指を立てて、笑顔で、恐ろしいことを言つてた……。
相手は、あの萃香ちゃんなのに……こんなに疲労しきった状態で戦つたら……。

「全身骨折か、死亡に、三百円をかけるわ」

「賭けるなよ！」

……霊夢って、優しいのか人でなしなのか……良くわからないよな……。

しばらく、四人で談笑をしていると……。

何も無いはずの空間から……穴が空いて……いきなり、誰かが現れた……。

長い金髪で、傘を持っている女性だった……初対面なのに……なぜか、嫌な感じがした。

「あら、紫じゃない……何しに来たのよ？」

霊夢が、現れた女性に話しかける。

すると、女性は……優雅な笑顔で「暇だから、遊びに来たわ」と答えた。

「あら、貴方……」

女性が、俺に気づいて……驚いたと言うより……珍しい物を見つけたような顔をしていた。

「……どうした？ 幽真、紫が来てから顔色が悪いぜ？」

魔理沙が心配して、俺の顔を除き込んできた。

俺は、短く「いや、大丈夫だ」と答え……紫と呼ばれた女性を……もう一度見てみた。

やはり……俺は、この女性を知っている。

……でも、どこで会ったのかわからないし……。

なぜ、こんなに……気持ちが不安定になるのか……全く、分からなかった……。

「…………紫、幽真と知り合いなのかしら？」

俺の様子を見た、霊夢が問い詰めるように、女性に聞いていた。

「まあ、知り合いの部類に入るわね…………私が、外の世界から連れてきたのだもの」

…………外の世界から連れてきた？

不安が、恐怖に変わっていく。

でも、その不安も恐怖も…………正体が分からない…………。
俺が、何に恐怖を感じているのか、何に不安を感じているのか…………
全然、分からない、分かるわけがない。

「貴方は、覚えているかしら？」

「…………何をだよ？」

「この世界に来る前の事よ」

…………ああ、分かった、分かってしまった。

何を不安に思ってたのか、恐怖を感じていたのか…………。

俺は、『死因』を…………外の世界での最後を…………思い出すが怖いんだ。

この、女性は俺が知りたくない『死因』を知っている。

だから、その事を言われるのを…………思い出すキツカケを与えられる事を…………恐れているのだ。

なんだよ、なんだよ、なんですか…………？

なんで『死因』を思い出すが、死ぬことより怖いんだよ！！

「……覚えてないみたいね……。一つ……聞いて貰っていいかしら？」

「……何ですか？」

「もう、脅えなくていいわよ。私は……もう、貴方と関わらないようにするわ、安心しなさい」

……その言葉を聞いた途端に、俺は安堵をしてしまった。

いいのか……俺？

このまま……彼女との関わりを断ち切って……逃げようとして……。

女性が、微笑みながら……また、空中に穴を開けた。

「紫、どこに行くのよ？」

「帰らせて貰うわ……私が居ると、せつかくのお茶が、不味くなるみたいだしね」

……。
霊夢の問いかけに答えて、手を振って……さっさと、帰ろうとする……。

俺は、無意識に立ち上がって……叫んでいた。

「紫さん……！」

俺は、大声で紫さんを引き留める。

紫さんは、大声に驚いたと言うより……俺が声をかけてきた事態に驚いているようだ。

「えっと……ごめんなさい！……せつかく、ここに来たのに……その、俺のせいで……帰るはめになって……てか、脅えて……えっと……」

謝りたいのに、伝えたい事があるのに、言葉が見当たらない……。
……ダメだ、これじゃ余計に失礼じゃないか。
確かに、色々と言うことはあるけど……。今は、必要な用件だけを、
短く伝えることにした。

「今度、永遠亭に来てください、今日のお詫びにお菓子をご馳走しますから!! えっと……。これからも、お願いします!!」

取り合えず、伝えたいことは伝えた。

……。なんにも、考えずに叫んだけど……。
意味とか文法とか、色々大丈夫かな？

「ぶっ……。あはははははは!!」

俺の言葉を聞いた、紫さんはお腹を抱えて大爆笑をしていた。
あれ、そんなに可笑しい事を言っちゃった？

「くっくっく……。面白い子ね……。自分にとって毒にしかならない相手に……。これから、お願いします……。あははははは！ げほげほっ!!」

紫さんは、笑すぎて蒸せてしまった……。

「はあ……。はあ……。貴方の「私を拒絶したくない」気持ちは……。十分、伝わったわ……」

笑いすぎて苦しそうにしていたが……。
それでも、まだ、紫さんは、楽しそうに笑っていた。

「分かったわ、今度、貴方が作ったお菓子を、ご馳走になりに行くわ」

「はい！ お待ちしてます！」

「……またね、幽真」

そう言い残して、紫さんは空中に空いた穴に消えてしまった。

……どうやら、結構、帰ってしまったらしい。

「あれ……？」

俺は、体に力が入らなくなってしまい……地面に座り込んでしまった。

……足が、ガクガクと震えている。

「大丈夫か！？」

魔理沙が、大慌てで俺に近づいてきた……またも、魔理沙の差し出してきた手を掴み立ち上がる。

そのまま、フラフラの俺を縁側に座らせてくれた……。

やっぱり……俺よりよっぽど、魔理沙は男らしいな……。

「あはは……」

座っても、まだ震える足を見ていたら、意味が解らなすぎて……笑い
いが込み上げてきた。

もう……自分でも何が何だか……意味わかんねえよ……。

「……幽真、どうしたの？」

萃香ちゃんが、かなり心配そうに、こちらを見ていた。

ごめん、萃香ちゃん……俺も良く分からないから……答えられずに黙っていた。

「……霊夢、悪い……軽く寝たいから……空き部屋……借りるぞ」「いいわよ。……おやすみなさい」

なんだかんだで……霊夢は、優しいな……。それとも、今の俺が弱々しすぎて、話しにならないだけか？

俺は、立ち上がり……一人になりたくて足早に、朝に居た部屋に戻ることにした。

俺は、布団に大の字になって横になって、落ち着くまで、意味もなく天井を眺めていた……。

しばらくして、ようやく落ち着いてきた……。
……ちよっと、思考の整理をして見ることにする。

「……俺の最後か……」

前に言ったと思うが、俺は、死んだことは分かっているが、『死因』が思い出せない。
今まで『死因』について……考えた事、いや、考えないようにしてたんだろうな。

「あー……全く、意味わかんねえ……」

軽く頭が痛くなってきたが……思考を止める程度では無かったから、考える事を続ける。

……何より、気になったのが紫さんを見ての、『過剰な反応』だ。あの時、紫さんに『死因』を言われることが……冗談を抜きで、死ぬより恐ろしかった。

「『死因』を聞くのが、死ぬより恐ろしく感じた……ねえ……」

……どんな、酷い死に方をしたら……こんな目に会ったろうな？……なんとなく、自傷癖のせいで死んだと思っていたが……その可能性を、普通に『考えられる』時点で違う事が分かった。

「もういいや……考えるのが面倒に……なって……」

混乱状態から、落ち着いたので……今までの疲れが、一斉に眠気になって襲ってくる……。

……俺は、早々と眠気に敗北していた。

目覚めて、まずは時間を確認するために、襖を開けた。

外は、ちょうど夕方から夜に変わる……ちょっと前らしく、少しだけ暗かった。

外の空気を吸って……思いつきり背伸びをする……。

「うっし！ 完全復活！！」

頭と体が、とてもスッキリとしていた。

やっぱり……睡眠って大事だよな……。

「さてと……俺には、やることはあるよな」

部屋に戻り、布団を畳んで、押し入れにしまい……。とある約束を守るために……台所に向かった。

「……あれ？」

台所についたのはいいが……。萃香ちゃんと約束した、宴会の食材が無くなって……。状況

……状況を冷静に確認すると……。調理した形跡が見られる……。

「……まさか……」

「あ、幽真……そこに居たのか？ ほら、早くいくぞ！」

「えっ……ちょー!？」

魔理沙が、俺を見つけるなり……。手を握って引っ張っていく。嬉しそうなのはいいんだが……。引っ張る力が強くて、ちよっと痛い。

「どこに……?」

「いいから、黙ってついてくればいいんだぜ！」

……連れていかれた部屋には、俺が買った宴会用の食材で、作られた料理が並んでいた。

「これは……」

俺が、驚きの表情をしていると……。

先に部屋に居た、二人がこちらを向いた。

「幽真、早く座りなさい。あんたを待ってたんだから……」

「ああ……すまない」

霊夢に言われた通りに、畳に座った。

俺が座ったのを確認すると、萃香ちゃんがコップに、お酒を並々に注いだ。

「ほい、幽真の分！」

「あ、ありがとう、萃香ちゃん……」

俺は、溢さないように、両手でコップを受けとる。

すると、魔理沙が立ち上がり……。

「これより、飲めや騒げや……楽しい宴会を始めるぜー!!」

「「イエイイ！」」

「え……このノリは、なに!？」

なんか、俺以外、酔っぱらった並みのテンションだった!

俺は、尋常じゃない、三人のテンションの高さに戸惑っていた……。

「ちなみに、料理の材料、お酒は幽真の自腹提供だから、気にせず飲むぜ〜!」

「「イエイイ！」」

「いや……別にいいんだけどさ」

いくら、スッキリしてるとは言え……寝起きで、このノリについていくのは、かなり難しいと思うが……。

「それじゃ、酔いつぶれたいか〜!! 騒ぎまくりたいか〜!!」
「オー!!!」

「ノリが、高校生のクイズ選手権なんだが!？」
「……酔いつぶれたいか〜!？」

魔理沙は、チラチラと、こちらの様子を伺いながら、もう一度言うていた。

……乗るしかないのか、この一昔前のノリに……。

「お……おー!!!」

俺は、拳を掲げて思いっきり叫んでやった!!

魔理沙は、満足そうにうなずいて……お酒の入ったコップを持った。

「それじゃ、乾杯!!!」

「『かんぱーい!!!』」

俺は、溢れないように、先に一口飲んで……三人と乾杯をした。

「元気そうだな……安心したぜ」

「え?」

魔理沙が、俺の隣にやって来て、そんな事を呟いていた。

「ほら、紫の時さ……ちょっと……えーと」

頑張つて、言葉を探しているようだ……魔理沙も魔理沙なりに、俺を気遣ってくれているらしい。

「心配してくれてるのか？」

「ああ、まあ……な」

魔理沙は、照れ臭そうに目を反らしていた。

「ありがとう、心配してくれてさ……嬉しいよ」

「そ、そうか……な、ならいいんだぜ！」

誤魔化すように、コップのお酒を飲み干している……。

「幽真、どーんー!!」

「イデエ!?!」

その様子を微笑ましく見ていた俺に、後ろから萃香ちゃんが突撃してきた……。

とっさに手をついたから、大丈夫だったが……危うく、畳に頭突きを喰らわせる所だった。

「……萃香ちゃん、毎回、突進してくるのは止めてくれないかな？」

「ん？　なんで？」

振り向くと、嬉しそうにニコニコしている萃香ちゃんの顔が見えた

……。

……お持ち帰りは……ダメですよ、分かっています。

ちなみに、レンタルは……やってませんよね、分かっています。

「いや、なんでもない」

「そう？　それより、幽真、約束……覚えてくれてたんだね」

さらに、強く後ろから抱き締めてくる……痛いけど、萃香ちゃんな

りに、ちゃんと加減がされてる事が分かった。

「当たり前だよ、萃香ちゃんは俺が約束を破ると思った？」

俺が、イタズラっぽく笑いながら、そう言つと……。

更に、萃香ちゃん表情が明るくなって……抱き締める力を強めた

……。

「……流石だね〜私が認めた男だけあるよ〜！」

「……な……なか……み……！！！」

萃香ちゃん！ マジで一回離して、骨と内蔵が……！！

「萃香、そこら辺にしてやれよ」

この状況で、魔理沙が制止に入ってくれた……。

流石、魔理沙だよ……これで助かったな……。

「幽真が倒れたら、お菓子が食べられなくなるだろ？」

……ああ、俺の心配じゃなくてお菓子の心配か……。

「ああ、ごめんね？」

萃香ちゃんは、急いで離れてくれたが……。

……内蔵は潰れず済んだけど……心が負傷した。

「ほら、助かったなら、早くお菓子を出示なさいよ」

今まで、ずっと食べてばかりだった霊夢が、机をバンバンと叩いて、急かしてくる……。

……本当に、霊夢は、意地きたな………食いしん坊だな。

でも……アルコールと糖分のコンビって………太る定番なんだが………。
まあ、場の空気を悪くするのは嫌だし、黙っておこう………。
でも、洋酒に合うお菓子は知ってるけど………。

このタイプのお酒に合うお菓子は、流石の俺でも知らないな………。
………洋酒以外のお酒に合うお菓子か………図書館があれば調べに行っ
たけど………人間の里にそんな所は無かったしな………残念だ。

「わかったよ………なんかリクエストある？」

取り合えず、今は、リクエストを聞いて創る事にした。

「キノコ」

「3日、4日、腹持ちするもの」

「酔えればなんでも」

「それは、お菓子のリクエストだよな!？」

さて、誰かどのリクエストだか分かるかな？

………もう面倒だから、でっかいホールのケーキ（お酒が入ったチョコ
コレートで創った、小さいキノコが沢山乗ってるタイプ）を創って
おいた………。

「ねえ？ 私のリクエストは？」

「3日、4日、腹持ちする食い物自体ないからな？」

第十六話、『死因』（後書き）

……気づくと、五万アクセスを越えていました。

やっぱり、p v 突破記念！とかやってみたいですね。

……何をやればいいのか、分からないけどさ！

感想と脱字、誤字の指摘お願いします。

第十七話、博麗神社での最後の夜（前書き）

……やっと書き上がりましたよ、遅れた言い訳は……あとがきで言います。

遅れてても、クオリティーはいつもどおりですが……第十七話始めます!!

ゆっくりしてってね!

第十七話、博麗神社での最後の夜

「……………ん？」

目が覚めると、何となく体が重く感じた……………。
重く感じていた原因は……………俺を、腕を枕にして寝ている萃香ちゃんだった。

俺は、起こさないように萃香ちゃんを、腕から下ろす……………別に、少ししか残念だとは思ってないよ？
思わず下ろしちゃったけど……………もう一度、腕枕しようなんて……………少ししか考えてないよ？

俺は、別の物に意識を向けようと……………萃香ちゃんから目線を離すと……………開けっ放しの襖から、月明かりが差し込んでいるのが分かった……………。

「夜って言うより……………真夜中の空だよな？」

確か……………俺が覚えている、宴会での最後は……………。
魔理沙に、スカートの中に物を収納する極意を教わってた気がする……………。
かなり、真剣に。

「何を教わってたんだよ、俺には女装癖はいらねえよ……………」

数時間前の俺へのツッコミを終えて、外の空気を吸おうと立ち上がる。

「うお!？」

一歩踏み出した途端に、酒の瓶を踏んでしまい……見事に転んだ。
……ファーストキスを畳に奪われてしまった。

「……………自傷癖持ちでも……………これは、キツいな……………」

顔を押しさえながら、フラフラと立ち上がる……………。
そして……………部屋の惨劇に気づく……………。

転がる空の酒瓶、汚れた食器、食べ物やお酒が零れて汚れた畳と机、
衣類が着崩れている少女……………まさに、様々な意味で地獄絵図だった。

「……………ふ、ふふ……………」

この状況を見て……………つい笑みがこぼれてしまった……………。
神は言っている……………。

「この部屋を片付けろ……………!!」

俺の掃除スキルが火を吹くぜ!!

こうして、俺と汚れた部屋との戦いが始まった。

第十七話、博麗神社での最後の夜

(なんだか……………騒がしいわね……………)

物音が聞こえたから……私は、目覚めてしまった。
そして、目覚めて真っ先に見たものは……。

「全く……放置しておく訳にも………」

……とか、ぼやきながら……寝ている魔理沙の衣服に、手を伸ばしている幽真の姿が見えた。

……大変ね、変態がいるわ、魔理沙が襲われている最中ね。
私は、ゆっくりと立ち上がって……幽真に近づいた……。

「あ、霊夢……おき………」

正義の鉄拳を喰らわせてやった。

「……全く、それなら早く言いなさいよ？」
「あのさ、明らかに問答無用だったよな？」

正座をしている幽真が、ため息をついていた。
頭から血を流しながら……。

「しかも、トドメの一撃までやったよな？ 普通の人間だったら死ぬ威力の」

失礼ね、ボコボコに殴った後に、お腹に蹴りを喰らわせて、最後に空き瓶で、頭をぶん殴っただけじゃない……。

……どうやら、幽真は、魔理沙の服装を直そうとしただけらしい……。
……よく考えたら、それも中々問題があるわね……もう一発殴つと
こうかしら？
でも、これ以上……畳に血を付けたくないし……勘弁してあげましょ
う……。

「今、すっごい、命拾った気がする……変わりに、凄く酷い扱い
された気がするけどさ……」

幽真は、安心したような、悲しいような……複雑な表情をしていた。
……まあ、本人も口ではゴタゴタ抜かしてるけど……反省はしてる
みたいだし……魔理沙には黙っててあげるわ。

「それより、早く片付けを終わらせるわよ」

片付けだって、わざわざ夜にやらなくても……。
流石に、今起こすのは可愛そうだから……朝になったら、魔理沙と
萃香を叩き起こして手伝わせばいいのに……。

本人曰く、この汚れた部屋を見て、我慢できなかつたらしい……。
……本当に、損をする性格をしてるわね。

「……悪いな」

一人で片付けるつもりだったらしい幽真は、なんだかやりきれない
顔をしていた。

「私が住んでるんだから、私が片付けるのは当然でしょ？」

私が、当然の事を言うとは……幽真は苦笑しながら、「確かにな」と
呟いて、頭の血を拭き取ってきた。
その様子は、ちよっと可愛そうだった……ちよっと、やり過ぎたか
しら？

俺達は、思ったより早く、片付けを終わらせた……。

霊夢も俺も、中途半端に寝てしまったせいで……眠れなくなった。
だから、魔理沙と萃香ちゃんを、別の部屋で寝かせて……宴会をし
ていた部屋で、二人で、お茶を飲むことにした……。

「以外と早く終わったな」

俺が、会話のキャッチボールを求めて、話しかけたが……。
霊夢は、俺の方を見ずに「そうね」と短く呟いただけだった……。
会話のキャッチボールが終了してしまった。

……霊夢は、難しい顔して、なにかを考えてるようだ……いいや、
しばらく黙ってよ……。
そう思ってお茶を含んだ瞬間に……。

「幽真は、いいお嫁さんになれるわ」

「んぐう……！」

いきなり、トラウマ抉られた!?

なんとか、無理矢理お茶を飲み込んで、噴水になることだけは防いだ……。

「でも、幽真は、良いお嫁さんになるわ」

「二度も言うな!!」

なんか、難しい顔をして考えてると思ったら……そんな事を考えていたのか……？

「いいか？ 霊夢、良く聞けよ？」

誉めたつもりなのであるが……いつまでもトラウマを抉られる訳にはいかない……。

ここは、ハッキリと言うべきだ……俺は、お嫁さんなんか似合わない事を!!

「……なんで、泣いてるのかしら？」

「いいから聞け!!」

泣きたくなるわ! なんだ、この状況!?

なんで、男の俺がお嫁さんなんか似合わない事を、少女に説得しなければいけないんだ!!

「いいか、霊夢。そもそも……俺は……男だ」

……心の負担が半端ない……折れそうだ、挫けそうだ……色々。

「先ず、男はお嫁さんなんか似合わない! 男の娘は別問題だが……少なくとも、俺のような男は似合わない!」

分かるだろ！？俺より、小さくて可愛らしい男の娘の方が似合うだろ！？

でも、俺は、真逆だ……背が高い方だ！！
つまり、似合わないはずなんだよ！！

……え、意味分らない？

俺が一番知ってるよ！！（逆ギレ）

つか、なんで俺が男女混同の「お嫁さんが似合う子」ランキングで一位なんだよ……それが間違ってるんだよ！！

「そうかしら？ 意外と……」

あれだけ言っても、霊夢は……俺をチラチラと見て、満更でもない表情をしていた。

「頼む、これ以上……この話題はやめてくれないか？」

……俺は、涙目になってお願いをする。

……いや、もうお願いだけじゃ……霊夢は止められない……！

「そ……それより、宴会の料理！ 作ってくれてありがとうな！」

霊夢が何かを言う前に……俺が、無理矢理にでも、話題を宴会の事にする事にした。

俺の必死さに気づいた霊夢は……（しょうがないわね……）とか思っ
ってそんな顔をして、ため息をついていた。

「美味しかったでしょ？」

「ああ、もちろん。しかし……よく、宴会のための材料だと分かったな？」

「分かるわよ、それぐらい……勝手にやって迷惑だったかしら？」
「いや、むしろ嬉しかったけど……」

でも、少しだけ残念だったかもな……。
約束は俺が作る約束だったし……用意も手伝いたかった……。

「言いたいことがあるなら言えば？」

なんだか、霊夢が少しだけ怒ってるような表情をしていた。
どうやら、残念な思いが顔に出ていたらしい。

俺は、慌てて「違う、違う」と否定した。

「ほら、俺がおつまみとか作る約束だったじゃん……俺、寝込んでたぞ」

「つまり、あんたは、一人だけ仲間はずれにされたのが悲しいと……」

霊夢は、俺が言いたいことをズバリと言っていた……。

「……あはは、正解」

「回りくどい言い方をするわね……」

回りくどいって言ってる割りには、即答したよな？

しばらく、二人で宴会の話で盛り上がっていたが……。
喋ることもなくなり……しばらく無言が続いた。

「ふぁ……」

霊夢がアクビを噛み殺していた……。

……結構、話したからな……そろそろ、眠くなる時間か……。

「眠いか？」

「……まあね」

そう答えながら、アクビで出た涙を指で脱ぐっていた……

……霊夢は、とても眠そうだった……。

「そろそろ、寝るわ……幽真は、どうするの？」

「俺？ 俺は……」

霊夢は眠そうだけど、正直に言っつて、眠くない。だつて、昼寝もして夜も少し寝たからな……。

「まあ、俺も……湯飲み洗ったら、寝るわ」

でも、寝ないとダメだろ……永遠亭の朝は早いし……変な習慣がついても困るしな……。

布団を被つて横になれば、寝れるだろう……。

「……そう、おやすみ」

「おやすみ」

霊夢は、自分の部屋に。

俺は、飲んだ湯飲みを持って台所に向かった。

……まあ、今回はかなり意識もハッキリしてるし……見回る必要なんてないだろ……。

早く洗つて、さっさと寝ないとなあ……。

皆さん、こんばんわ……霧島幽真の怪談(?)アワーのお時間です。

……世の中には、どうしようもなく不思議な事って……どうにもあるみたいなんですわ。

あれは、俺が洗い物を終えて……借りてる部屋に向かったんですよ……。

そしたら、フスマが開いていたんですよ……。

そこから見えたのは……畳んだはずの布団が敷いてあって……膨らみがあったんですよ……。

私、思わず「え、怖っ」と呟いてしまいました……。

そして、部屋の中に入ったら……看板があったんですよ。

その、『畳』に思いつき刺さってる看板を見ると……こう書いてあるんですよ……『起こしてね!?!』

私、びっくりしてしまいました……あまりにもツツコミ所の多さに、冷や汗が止まりませんでした……。

世の中には、不思議な事があるんですよ。

「……さてと、この状況を本当にどうすればいいんだ」

愉快地素敵に「霧島幽真の怪談アワー」風に回想をしたが……。本当に、この状況はホラーだと思う、色んな意味でな。

でも……本当に布団の中身は誰なのだろうか……?

「起こせって書いてあるから……起こした方がいいよな?」

俺は、布団に近づいて……揺らしてみた。
反応がない、もっと強く揺らしてみる事にする。

「……………うう……………なによう？」

布団から、長い金髪の女性が……………起き上がる。

一瞬、魔理沙だと思ったが……………違った。

俺は、半分呆れつつ……………布団にいた女性に話しかけた。

「なにやってるんですか……………紫さん」

「……………ん？ あ、幽真……………おはよう」

「……………おはようございます」

取り合えず、挨拶をされたので挨拶を返したが……………。
早く、この状況の説明が欲しい。

「それより、紫さん……………なんで俺の布団の中に……………？」

まあ、正しくは俺の布団じゃないけどな。

すると、紫さんは髪型を、手で直しながら俺の質問に答えた。

どうやら、紫さんは、わざわざ夜中に、俺とお話に来たらしい……………。
しかし、宴会の後でみんな、酔い潰れていて……………お話どころじゃな
かったらしい。

だから、お菓子の良い匂いがする、俺のお布団で寝てた……………。
ちゃんと起こしてくれるように、看板を作っ……………。

「なるほど……………そうだったんですか……………」

俺は、ツッコミ所を幾つかスルーして……なかなか、髪型が直らずに苦戦している紫さんに、お菓子で作ったクシを渡した。

「あら、ありがとう」

……紫さんがクシで、髪をとかしていた……。長い髪っていいよね……。しばらくして、俺のご褒美タイム……じゃなくて、紫さんが髪型を直し終わった。

「わざわざ、深夜にここを訪れたのは……私が貴方と……幽真としっかりと話したい事があったのよ……」

紫さんが、俺を真っ直ぐに見つめてくる。やはり、目が合うと……体が強ばってしまっ、目を反らしたくなってしまう。

まだ紫さんが怖い……違うな、紫さんが知っている『死因』は怖いけど……。

紫さんは、『死因』について語らないと言った。

俺は、その言葉を信じる。

だから……紫さんを、怖がる理由なんて一つもないはずだ。

俺は、絶対に紫さんから目を反らさない。

「……幽真は、この幻想郷に来て……良かったかしら？」

……なんだ、そんな事かよ……。

俺は、拍子抜けしながら、驚くほど簡単だった質問に答えることにした。

「良いに決ってるじゃないですか、むしろ……お礼が言いたいですね」

この世界に来て、俺はとても充実している。

……だってさ、ここでは……料理の腕が上がれば喜ばれて、キレイにお掃除をすれば誉められて、お菓子を作れば皆で食べてくれる……。

それに、好きな人の近くに居れるんだぜ？

とっつても、警沢で素晴らしいと思わないか？

「紫さん……ありがとうございました」

……少し泣きそうになりながら、俺は紫さんに頭を下げた。

「……そう……合格ね」

「合格？」

「こっちの話よ」

顔を上げると……紫さんは、嬉しそうに笑っていた。

「あ、これをあげるわ」

紫さんが、取り出したのは……小さい注射器で、受け取って見ると、中に液体が入っていた。

「これは……？」

「鎮静剤よ」

「なんで、そんな物を持ち歩いてるんですか!？」

鎮静剤って持ち歩く物なのか!？」

俺が慌てていると、その様子を紫さんは、面白そうに見ていた。

「貴方が、私を見て、暴れだしたり……拒絶反応が出たら使おうと思っただけ……必要なかったみたいね」

……なるほど、それなら鎮静剤を持ち歩いてても領ける……。でもさ……。

「貰っても困ります」

「……私からのプレゼントを貰ってくれないのかしら……?」

俺が鎮静剤を突き返すと、紫さんは、悲しそうな表情をしていた……。

霧島幽真は、鎮静剤を手に入れた!

誰かに、押し付け……プレゼントしてみよう!

「ねえ、貴方のお話が聞きたいんだけど……良いかしら?」

俺が、この鎮静剤の処理方法について検討していると……紫さんから話しかけられた。

「俺の話……ですか?」

「そう、幻想郷に来てからの話をね……」

そんな、俺の話聞いて楽しいのかな?

疑問に思いつつ……俺はひたすら、永遠亭での話をした……。

……紫さんは、俺の話をしつかりと聞いていてくれた。

すっかり、夜も更けて紫さんの方が眠くなって、スキマ（なにも無い場所から空く穴の名前だっさ）で帰っていった。

「…………ふあ…………」

俺も良い感じに、話疲れて眠たくなってきた…………明かりを消して、布団の中に入る…………。

……明日は、やっと永遠亭に帰れる。

久しぶりに、姫様に会える、姫様の声が聞ける。

師匠に結果を報告するのも楽しみだ。

ウドンゲさんに、長い間仕事を任せてしまったから、謝らなくては…………。

てゐは…………どうせ、ニンジンのケーキを作れとせがまれるんだろうな…………。

俺は、そんな事を考えながら…………完璧に眠りに落ちた。

第十七話、博麗神社での最後の夜（後書き）

……では、遅れた言い訳ですが……。

文化祭があつたんです……夜遅くまで準備してる上に、絵の締め切りまであつたんです……。

でも、明日で文化祭が終わるので……また、更新頑張ります！

感想、お願いします！

第十七話（番外編）、只今帰宅中（前書き）

……また、更新が遅れてしまった……。

例の如く、言い訳は後書きで……。 （最近、言い訳多くて、ごめん
なさい）

では、気を取り直して……第十七話（番外編）が始まります！

ゆっくりしていいってね……！

第十七話（番外編）、只今帰宅中

「……………」

無言で起き上がり、まだ眠い目を擦った…………。

………… ちょっと嫌な夢を見ていたお陰で………… かなり、目覚めが最低だ。
嫌な夢の内容は…………… 俺が死ぬ夢だ。

………… 夢の中の『死因』は………… それは、酷いものだった…………。

「はあ……………」

よりによって、狂ってる自分自身に殺される夢とか………… 不吉過ぎる
だろ。

………… もしかして、そんな夢を見たのは………… 本当の『死因』の件で精
神的に疲れているのか？

「クソツ………… 寝てえな」

本当だったら、楽しい夢を見ることを期待して二度寝をしたいけど
…………。

博麗神社から、歩いて帰るとなると………… 朝のうちに出不ければ、永
遠亭に帰るのは、夜になるかも知れない…………。

「嫌な夢は………… 忘れるのが一番だよな？」

きつと、早く帰って、姫様の愛らしい姿を見れば………… こんな、暗い
気持ちは晴れるはずだ…………。

「さてと……………」

そう決まったら…………真っ先に、俺のやることは、決まっている。

霊夢に殴られない内に、畳に刺さってる看板を片付けなければ…………。

「…………紫さん、なんで看板にしたんですか？ 置き手紙とかでいいじゃないですか…………」

数時間遅れて、紫さんにツッコミを入れながら…………取り合えず、捨てやすいように、看板を解体することにした。
これ…………どこに、捨てればいいんだろうな？

取り合えず、看板の解体が終わり…………解体時に出た、細かい破片の掃除まで終わらせた。

「解体、終わったが…………どこに捨てればいいんだ？」

俺は、解体が終わった看板を持って…………外に出ようと、フスマに手をかけようとすると…………。

「幽真く？ あ、起きてた？」

勝手に開いたと思ったら…………先に萃香ちゃんが、フスマを開けて中に入ってきた…………。

どうやら、まだ寝てると思われたらしく…………朝、起こしに来てくれたらしい。

……ちくしょう、萃香ちゃんに起こして貰いたかった……！！

「おはよう、萃香ちゃん」

「おはよ〜！」

俺は心で悔し涙を流しながら……笑顔で挨拶をすると、萃香ちゃんが右手を上げて愛らしく挨拶を返してくれた……。

……落ち着け、COOLになれ霧島幽真……！！

「……ねえ、その板はどうしたの？」

俺が必死で、お持ち帰り衝動を押さえていると……萃香ちゃんは、解体した看板を指差していた。

「ああ、まあ……色々あったんだよ……。それよりさ、これを捨てたいんだけど……」

「分かった！ 私に任せろー！」

萃香ちゃんは、俺から、元は看板だった板を奪うように持っていた……。

任せろって事は……捨ててくれるのかな？

俺はどこに、捨ててればいいか分からないし……ここは、萃香ちゃんの好意に甘えよう。

「……じゃあ、任せるね？」

「任された〜！ あと、霊夢が珍しく朝食なんて作ってるから、早く食べた方がいいよー？」

萃香ちゃんは、「急がないと、幽真の分無くなっちゃうよ〜？」と付け足して、可愛らしく神社の奥の方に歩いていった。

……朝食か、ちよ〜ど腹が減ってたんだよな……。

「……………どこで、用意されているんだろう」

……………まあ、そんなに広い訳じゃないし……………。
昨日、宴会した部屋にでも行ってみるか……………。

と、昨日宴会した部屋に向かって見ると……………やはり、霊夢と魔理沙
がいた……………。

魔理沙は朝食を食べていて、霊夢はお茶を飲んでいる。

「お、起きてきたか？ おはよう！」

朝食を食べていた魔理沙が、俺に気づき……………お箸をおいて挨拶をし
てきた。

「ん？ 萃香はどうしたんだ？」

「ああ……………。ちよつとな、頼み事をして……………すぐに来ると思う」
「ふーん？」

そこまで話したら、魔理沙は、またお箸を手に持って朝食を食べ始
めた……………。

「ほら、早く食べなさい、冷めるわよ」

「おっ……………ありがとうな」

気づくと霊夢が、俺の分の「飯をよそってくれている。

俺は、適当な場所に座って……霊夢から箸とご飯を受けとり、食べ始めた。
すると、廊下の方から足音が聞こえてくる……多分、萃香ちゃんかな？

「幽真」 捨ててきたぞ？」

予想通りに、萃香ちゃんが走ってた足音だったようだ。
萃香ちゃんは、到着するなり俺の隣に座った。

「萃香ちゃん、ありがとうな？」

「うん！」

俺がお礼を言うと、萃香ちゃんが元気良く頷いていた。

「捨ててきたって……何を捨てたのかしら？」

霊夢が、疑いの眼差しでこちらを見ていた……。

あー、もしかして、俺が何かから問題を起こして、萃香ちゃんに証拠隠滅を頼んだと思われてる？

「いや、それが……」

ここで、嘘を言つとややこしくなりそうだから、ちゃんと「紫さんが、夜中に訪ねてきて、置いていった看板を、萃香ちゃんに捨てて貰った」と言っておいた。

「紫が夜中に訪ねてきた………？」

霊夢が、なぜか驚いた表情をしていた……。

確かに、夜中に訪ねてくるのは珍しいけど……そこまで驚く事なのか？

「ああ、少し話をしたら、帰っちゃったけどな」

「……まあ、いいわ」

特に問題が無いと思ったのか……ただ単に考えるのが面倒になったのかは、分からないが……霊夢は、適当に話を切り上げてお茶を飲んでいた。

……でも、紫さん……鎮静剤まで用意して……本当に俺と話しに來ただけなのだろうか……？

別に何か目的が……そもそも、あの薬の出所……まさか……。

「幽真、どうした？ お腹一杯なのか？」

萃香ちゃんの声が聞こえて、やっと嫌な思考が止まってくれた。

「いや……まだまだ、食べるよ」

俺は、萃香ちゃんに笑顔でそう言って、ご飯を口に運んだ。
なぜか、その後……色々と考えてしまい……。

とても美味しい朝食なのに、ハシが進まなかった。

「……そろそろ、帰るな？」

食べ終わった後に、少しだけ話をしていたが……そろそろ、出ない

と間に合わないかもしれないし……。

……色々と確認する事が出来てしまった。

「じゃあねー幽真ー、また飲もうな〜！」

「いいね……今度は、俺がおつまみを作るからね？」

「お〜！」

よほど嬉しいのか、両手を上げて喜んでいた……。

……お持ち帰りが無理なら、奥の手……永遠亭で宴会でもするか……？

「……また、来ても良いわよ？」

そんな事を考えていると……霊夢にしては、珍しく歯切れ悪く言うていた。

むしろ、こっちからお願いしようとしていたのに……霊夢から言うてくれるなんて……まあ、気に入られたと思うていいのかな？

「ああ、お菓子を沢山持って、遊びに来るよ」

「……楽しみにしてるわ」

「ああ、楽しみにしてくれ……じゃあな」

やっぱり、霊夢は素っ気なく返事をしているが……何となく、嬉しそうに見えるのは気のせいかな？

「魔理沙も、じゃあな」

「……ああ」

……何故か、魔理沙の俺を見る目が……心配そうだった……。少し気になりながらも……立ち上がって、縁側まで行って、地面に

置いてある運動グツを履いていると……。

「あー、待ってくれー!」

魔理沙が、俺の隣にやって来て……手にはホウキが握られていた。

「人間の里まで、送ってくぜ?」

と、魔理沙らしい元気な笑顔でホウキを見せてきた……。

……どうやら、ホウキに乗せてくれるようだ……。

「……いいのか?」

「ああ。私も、ちょうど人間の里に用事があったんだ」

……確かに、歩いて帰るよりも……空を飛んだ方が早いのは、昨日の朝で実証済みだ……。
なら、しょうがない、早く姫様の居る永遠亭に帰るために、乗っけていって貰おう。

「それじゃ、お願いするな?」

「おう! 任せろだぜ!」

もつぶつちゃけると、魔女のホウキに乗って空を飛んでみたいだけです……!

そして……今、俺は……念願の魔女のホウキで空を飛んでいます……!

……まあ、魔理沙の後ろに乗っけて貰ってるだけだよ……でも、嬉しい！

「すげえ……本当に、ホウキで空を飛んでる……」
「ちゃんと、掴んでるよー？ 落ちたら死ぬぜ？」

俺が感動していると、魔理沙に注意されてしまった……。
……ぶっちゃけ、ここで落ちるより……いつぞやの、魔理沙の突進に比べたら平気だと思うが……やっぱり、落ちたら痛いので、魔理沙の背中にしがみついた。

「……にしても、幽真は軽いな……」
「そりゃ、体のお菓子を軽くしてるからな」

一応、今の俺の体重は、子供と変わらない位に操った。
あんまり、軽いと風で飛ぶかもしれないしね……。
……風で飛ばされて、また遭難とかシャレにならないし。

「なるほど、便利な能力だよな」
「……戦闘には微妙だけどね」

……まあ、まだ俺が使いこなせていないだけかも知れないが……。
しばらく、世間話が続いていたが……人間の里に近くなった頃に……。

「なあ、幽真……気分は晴れたか？」

魔理沙が、唐突にそんな事を言ってきた……。

「なんか、朝からずっと悩んでたみたいから……一緒に空を飛べば、気晴らしになると思ったんだが……どうだ？」

魔理沙は、顔だけこちらに向いて……ニカッと笑っていた。

……魔理沙なりに、俺を心配してくれてようだ。

「ああ、もちろん、最高だよ！」

「うんうん……なら良いんだぜ」

俺が笑顔で返事をする、魔理沙は満足そうに頷き……前を向き直した。

「本当にありがとうな……ちょっと、嫌な夢を見ちゃってさ……色々と考えちゃったんだよ……」

俺は、思わず弱音を吐いてしまった……。

一瞬、空気が悪くなると思ったが……。

「そっか……なあ、幽真……なんか、色々大変そうだけど……私も、相談に乗るくらいなら出来るから……遠慮なく頼ってくれよな？」

……やっぱり、魔理沙は優しいな。

俺は、軽く泣きそうになったが……涙を堪えた。

「……ありがとうな。今の言葉だけで、随分と楽になった」「気にすることはないぜ、一度、弾幕で語り合った仲だろ？」

魔理沙の顔は見えないが……魔理沙らしい元気な笑顔で笑っているのがわかった。

魔理沙との、友情が深まった所で、ホウキが高度を低くしていた…
…どうやら、人間の里についたようだ。

地面に足が付くと…俺と、魔理沙は、ホウキから降りた。

着地点の近くに、迷いの竹林があった…。

どうやら、魔理沙が、迷いの竹林の近くに下ろしてくれたようだ。

「送ってくれて、ありがとうな」

「二度もお礼はいらないぜ？　じゃ、私は行くぞ？」

「ああ、またな」

魔理沙は、人間の里の方に歩いていった…。

しばらく、その背中を見つめて…俺は永遠亭に向かうことにした。

魔理沙のお掛けで、かなり元気が出てきた。

…これなら、姫様に会っても恥ずかしくない、明るい笑顔が出来るはずだ。

…さてと、早く帰って色々と、師匠に報告をしなきゃな…。

俺は、何から話そうか迷いながら、迷いの竹林に入ってしまった。

第十七話（番外編）、只今帰宅中（後書き）

……さて、言い訳ですが……風邪を引いてるのに、バイトが三日間連続であって……頑張った結果、悪化したんです。

……テストも近いし、又も更新が遅れる予感……。

取り合えず、更新を早くするように頑張るので……これからも、よろしく願います！

感想を頂けると、嬉しいです！

第十八話、永遠亭に到着（前書き）

やっと書き上がった……。

バイトやテスト勉強の休憩中、通学中に書いたのでクオリティーは低いかな？

でも、第十八話始まります！

ゆっくりしていったね……！！

第十八話、永遠亭に到着

俺は、博麗神社での修行を終え……永遠亭に帰るために、迷いの竹林を歩いていていた……。

迷いの竹林の事は、てゐに協力して貰ってなんとか覚えたから、迷うことなく永遠亭に向かっている。

「おっ……あれは」

見覚えのある白髪で、リボンが特徴的な少女を見つけた。

まあ、迷いの竹林を悠々と歩ける少女なんて、アイツしかいないだろ……。

「おい、妹紅ー！」

俺は、大声で竹林を歩いている少女……妹紅に声をかけた。

……後ろからこっそりと近づいて、驚かしてやるうかと考えたが……。

殴られそうだから、ちゃんと声をかけることにした……。

しかし、妹紅は何かを考えてるよう……俺の声に気づかず歩いている……。

「妹紅！ もーこー！ 妹紅さーん！」

俺が幾ら呼んでも気づかない……。

もしかして、無視されてる？

「でも、無視されてるには……歩くペースが普通だし……」

まあ、ウダウダ考えてないで……近づいて確認すればいいか……。俺は、早歩きで妹紅に近づく……。そして、肩に手を置こうとした……その瞬間だった。

「誰だっ！！」

妹紅が、俺の脇腹辺りに、鋭いハイキック仕掛けてきた。

……妹紅の肩に置こうとした手を、強化してハイキックを止める。

「……あー、手が痛い……」

「……なんだ、幽真か」

ちゃんと気づいてくれたので、妹紅の足を離した……。

……意外な所で、萃香ちゃんとの修行（と書いて、ケンカと呼ぶ）の成果が発揮されたな。

「久しぶりだな」

「久しぶり……か？ まだ、三日しかたってないぞ？」

あれ？ そうだっけ？

そう言われれば、そんな気もしてきた……。

……えーと、つまり……。

「た、大変だ……三日も姫様の姿を見ていないだど！？」

「……相変わらずだな、お前」

博麗神社での出来事が濃すぎて忘れていた、驚きの事実に愕然としていると……妹紅が可哀想な子を見る目をしていた……。

そんな事はどうでもいい！！

俺は、早く姫様に会いたいただけなんだ！！

「ほら、妹紅！ 早く永遠亭に行こうぜ！」

俺が妹紅の手を握って、永遠亭まで走ろうとする……。「ま……まて！」と言って、俺の手を振りほどいた。

「どうした？」

「ど、どうしたじゃないだろ……なんで、私の手を握った？」

なぜか、妹紅が若干顔を赤くして睨んでいた……。

手を握っただけなのに、少しだけだが、顔を赤くするまで怒るとは……ちょっと、ショックかな……。

「すまない……」

「……いや……別にそこまで落ち込まなくても……」

妹紅は俺から、目線を外して小さな声で喋っていた。

「と、とにかくだ！ 今日、気が変わったから輝夜の所に行かない！」

小さな声で喋っていたと思ったら、いきなり、大きな声で喋りだした。

……えっ、俺に触れるのは、予定を変更するほど嫌ですか？

「……なんで？」

「なんでもだ！ とにかく、お前は早く帰ってやれ！」

俺が詳しく理由を聞く前に、妹紅は俺に背を向けて帰ってしまった……。

「……………本当に帰っちゃったな」

まだ、妹紅と色々と話していたかったんだが……。しょうがないから、妹紅に言われた通りに、早く永遠亭に帰ることにした。

「あれ？ 幽真？」

永遠亭からちよつと離れた場所で……………てゐが、ウサギ達と遊んでいた。

「てゐか……………相変わらず、仕事してないんだな」

「何言ってるの？ ウサギ達の面倒を見るのが、私の仕事だよ」

このサボリウサギは、胸を張って、誇らしげに言っている。

まあ、確かにそれも仕事と言えるか……………？

「それより、てゐ。 姫様って起きてると思うか？」

「うーん……………多分、まだ寝てると思うよ？」

「やっぱりか……………」

なんとなく予想していたが……………。

姫様の生活は気紛れで、朝起きて一日起きてる事もあれば、ずっと寝てる日もある。

大半は、朝起きて、昼間に寝て、夕方に起きるパターンが多い……………ちなみに、俺は、姫様が寝ている昼に買い出しや、その他の用事

を終わせている)

「まあ、残念だったね」

てゐは俺の隣に来て、肩ではなく、背中をぽんぽんと叩いていた……。

「……んじゃ、俺は行くぞ？」

「もう行くの？ 少し遊ばない？」

てゐがそう言うと、ウサギ達が、俺の周りに集まって俺を見上げている。

要するに、早く遊んで欲しいって事だな。

「はいはい、師匠に報告したら、遊んでやるから……ちょっと待っててくれ？」

俺は、ゆっくりと座り……ウサギ達の頭を撫でながら、言い聞かせるように言った。

ウサギ達には、俺の言葉は通じないはずなのだが……ウサギ達は、俺の周りから、離れてくれた。

立ち上がって今度は、てゐの頭に手を置いて撫でる……久しぶりに撫でたが……やっぱり、てゐの髪の毛は触り心地良いよな。

「てゐも、待っててくれよ？」

「……しょうがないねえ」

てゐは、欧米風にやれやれと、肩をすくめている。

名残惜しいが、てゐの頭を撫でるのを止めて……永遠亭に向かって歩き出した。

最後に……視界の端に見えたてゐが、笑いを堪えたような表情をしていたのは気のせいか？

てゐると別れた後……俺は、無事に永遠亭に到着した。

師匠に帰って来たことを、報告をするために……師匠の研究室に向かっている……たまたま、廊下でウドンゲさんを、見かけたので、ウドンゲさんにも帰ってきた事を伝える事にした。

「ウドンゲさん」

すると、妹紅とは違って、ウドンゲさんは、すぐに俺に気づいて振り返り……嬉しそうに笑顔を浮かべてくれた。

「あつ……幽真君、おかえりなさい。あれっ？」

ウドンゲさんが、笑顔から急に、不思議そうな表情をしていた。

「どうかしました？」

「いや、背中に何か……」

背中？ 背中がどうしたんだ？

俺は、背中に手を伸ばして探ってみる。

すると……何かに触れたので、それを剥がしてみると……。

『ロリコン』と書いてある紙だった。

「てゐの仕業か……」

だから、俺は、ロリコンじゃねえよ……。

俺は、ため息をついて、紙を握りつぶして丸めた……。次に会ったら、てめには、ゲンコツかデコピンの刑だな。

「本当に張ったんだ……」

ウドンゲさんが、赤くて大きな目を丸くしている。

俺は、気になったので詳しく聞いてみることにした。

「……どういふ事ですか？」

「あつ……えつと、ですね」

どうやら、この紙は俺が、てめに黙って博麗神社に行ったから、帰ってきたら罰として張るために、二日前に用意していたらしい……。

まあ、確かにてめに、黙って行ったのは確かだが………寝てたじやん、お前。

わざわざ、起こして報告をしたら……絶対これ以上のイタズラをされたに違いない……。

丸めた紙をポケットに閉まって、この話を終わらせる事にした。

「それより、長い間仕事を任せてすみませんでした」

「……本当、大変でしたよ」

なぜか、ウドンゲさんの顔が急に曇りだした……。

あるえ？ ……まさか、地雷踏んだ？

案の定というか、ウドンゲさんが暗い顔のまま……ボソボソと喋り出した。

「師匠のお仕事に、家事はまだしも……姫様はむちゃぶりまでしてくるし……後、私が忙しくしていると、てゐがイタズラしてきたりとか………」
「……えっと、ごめんなさい」

余りの怖さについて謝ってしまった……。
ストレスって……恐ろしいね。

「良いんですよ、幽真君が来る前は……はあ」

もしかして、最初に素敵な笑顔を浮かべてたのは、俺が帰ってきて仕事が減るからですか？

まあ、確かに姫様のお願いは無茶なのが多いけど……でも、そのワガママな所も姫様の魅力なんだよね。
もちろん姫様の魅力はそれだけじゃ……。

「それじゃ、私はこれで……幽真君も早くお師匠様の所に……」

「あ、そうですね……」

ウドンゲさんの一言で、なんとか正気に戻れた。

危ない、危ない……危うく夜まで姫様の魅力について考えてしまう所だった……。

「あの、その……愚痴を言ってしまったってごめんなさい……」

「……別にいいですよ。むしろ、俺でよければ愚痴くらい……お茶とお茶菓子を付けて、じっくり聞きますよ？」

そんな謝らなくて良いことを、ウドンゲさんは真剣に謝っていたので……俺は、あえて少し茶化した感じで返してみた。

「……ありがとう、幽真君……またね」

最後にウドンゲさんは、笑って歩いていった……。とにかく……俺は師匠の研究室に向かうことにした。

「失礼します」

俺は、研究室のフスマを開けて、中に入った……。

師匠は、ちょうど休憩中なのか……椅子に座ってお茶を飲んでいた。

「あら……おかえりなさい、早かったわね」

師匠が、お茶を机に置き……椅子を指差して、俺に座るように促す。俺は、促されるままに椅子に座った。

「ええ、長い間仕事を休むわけにはいきませんから」

「……その心意気はいいけど、ちゃんと修行の成果はあるのかしら？」

師匠が、俺の目を真っ直ぐに見つめながらそんな事を聞いてきた。

「もちろんです。先ずはですね……」

内容を簡単にまとめると……実験の事や、名前は適当だが……実際にスペルカードにして、魔理沙と戦った事を話した。

「……ふむ、短期間でも、ちゃんと修行をしたみたいね」

話を聞き終わった師匠は……椅子の背もたれに寄りかかって、笑顔で満足そうに、こちらを向いていた。

思い返すと……博麗神社での修行は……あれ、修行したっけ？

なんか、怪我して宴会しての記憶しか……まあいいや。

博麗神社に行つて……俺は、少しだけ強くなれたし。

霊夢に負けて、萃香ちゃんに負けて、魔理沙にも負けたけど……。ルーミア戦も合わせて、4連敗中か……。

「幽真、なんか泣きそうな顔をしているけど……大丈夫？」

「……大丈夫です。まだまだ、頑張らなきゃなと思っただけです

……」

「……？ まあ、その心意気は良いと思うわ」

……師匠に報告も終わったし、まだ、夕飯まで時間はあるし……自分だけでも能力のトレーニングしよう。

……憧れの能力を手に入れたのに、弱いままは嫌だしね。

「それでは、師匠……俺は、そろそろ失礼します」

「ええ、なかなか興味深い話が聞けたわ」

俺は、立ち上がってフスマを開けて出ていこうとすると……。

「あっ……幽真」

「はい、なんですか？」

「……たまには、ケーキが食べたいんだけど……作ってもらえるかしら？」

師匠にしては、珍しいお願いだった。

まあ、それぐらいお安いご用だ。

「分かりました、すぐに作ります！」

「待ちなさい、夕飯の後に作ってみんなで食べましょう」

俺が、大急ぎで台所に向かおうとすると……師匠が素晴らしい提案をしてきた。

「わかりました！ 腕によりをかけますね！」

「ええ、楽しみにしてるわ」

振り替えてそう言うと、師匠は楽しそうに笑っている。

俺は、なんのケーキにしようかと考えながら研究室を出ることにした。

「さてと……まずは、スペルカードの名前でも決めるか……いやいや、もつと霊力入りのお菓子の実験を……」

……強くなるために、自主トレをするのはいいが……。具体的に、何をしようか決めていなかったので、廊下を歩きながら、考えてる最中だ。

「あら、幽真じゃない」

……この素晴らしいお声は……！

俺は、即思考を止めて声の元に振り返った。

「おかえりなさい」

振り返ると……俺を見て笑顔を浮かべている姫様が居た。感激のあまり声が震えるのを、なんとか押さえて……姫様に話しかけた。

「姫様、起きていらっしやっただんですか？」

「ええ、今起きたのよ」

やっぱり、久しぶりに見る姫様は相変わらず可愛らしかった……。俺が見とれていると、姫様は急にため息をついた。

「もう、幽馬が居ないから大変だったわ……」

「大変だった……とは？」

「幽真が居ないと、おいしいオヤツとお茶が無いのよ……ウドンゲが作るお菓子は、微妙だったし……」

……なるほど、ウドンゲさんが荒れてた理由が分かった気がする。確か、ウドンゲさんはお菓子が作れなかったはずだし……。

「すみませんでした、姫様……今度からは、気を付けます……」

「ん、分かればよろしい」

姫様は、俺の様子を見て、満足そうな顔をしてうなずいていた……。……もう一度、謝ればもう一度その表情をしてくれるのかな？

「ところで、幽真は今暇かしら？」

「はい、今は暇ですよ？」

自主トレ？ なんだっけそれ？

「それじゃ、お出かけしたお話を聞かせてくれないかしら？」

どうやら、姫様は暇だから俺の話が聞きたいらしい……。

まあ、確かに話せるネタは沢山あるし。

姫様を退屈にさせずにすむだろう。

「はい、分かりました。俺の話でよければ……」

「それじゃ、私の部屋にお茶を持って来てちょうだい……待ってるわよ？」

ひ、姫様の部屋で二人でしゃべるのか……？

……とにかく、いらん煩惱が沸いてくる前にお茶の準備をする事にした。

「……き、緊張するな」

久しぶりに姫様と話すから、ただでさえ緊張をしているのに……姫様の部屋で二人つきりねえ……。

別に、変なことは考えていないが……少しは気持ちはわかるだろ？

俺は、整えなくてもいいのに、服装と髪型を整え……お茶が乗ったお盆を持ち直して……フスマに手をかけた。

「失礼します、お待たせしました」

すると、姫様は振り替えて……笑顔で俺を歓迎してくれた。

「さ、早く部屋に入って」

「はい、かしこまりました」

フスマを閉めて、机の上にお盆を置き、座った。

すると、すぐに姫様はお盆の上からお茶を取って口に含んだ。

「……おいしい。幽真は、お茶の修行をしてきたのかしら？」

どうやら、霊夢に教わった美味しいお茶の淹れ方を気に入ってくれたらしい。

姫様、ご満悦。

俺は、心でガッツポーズ。

「ありがとうございます、でも、俺は霊力の扱い方を学んで来たんです」

「霊力？」

姫様が、可愛らしく首を傾げていた。

さて……俺も、少しだけ緊張が解けてきたし……そろそろ、話あげましょうか？

「ええ……さて、修行のお話は……どこから話しましょうか？」

「そうね、最初ね」

「最初から……ですか？」

「ええ」

『最初から』とだけ言って、姫様は俺が喋り出すのを、待ち遠しそうに、ニコニコしながら待っている。

最初からか……ど、どこから話せばいいか……なかなか迷うな……。

「そうですね……じゃあ……」

あんまり、姫様を待たせる訳には行かないので……。とにかく、師匠に命じられた所から話始めた。

……一応、姫様が退屈しないように、持てる限りの話術(?)をフル活用して話したつもりだ。

そのお陰か……姫様は退屈そうな素振りをせずに、ずっと俺の話を聞いてくれていた。

「ふう……なかなか、興味深い話ばかりで楽しかったわ」

話が終わると、姫様は、お茶を一口飲んで……俺が、もう何度惚れ直したか分からない笑顔を向けてくれた。

「そういつただけて、嬉しいです」

ちよつと、喋りすぎて喉が痛いけど……姫様が楽しめたからいいや……。

「ねえ、幽真……貴方のスペルカードには、まだ名前が決まってるのよね？」

「はい、まだ正式には……」

すると、姫様は嬉しそうな顔をして……俺に素敵な提案をしてくれた。

「私が、そのスペルカードの名前を決めていいかしら？」

「……………良いんですか？」

「ええ、幽真のスペルカードの名前のインスピレーションが沸いてきたのよ」

これは、嬉しい申し出だ……………。

それに、姫様ならきつといい名前をつけてくれるに違いない……………。

「それじゃ、お願いします」

「えーと、先ずね……………」

こうして、俺のスペルカードに名前がついた訳だが……………。

「ありがとうございます……………。俺、すっごい嬉しいです……………」

軽く泣きそうになりながら、姫様にお礼を言った。

なんたつて、姫様が……………こんなに可愛らしい姫様が俺のために、スペルカードに名前をつけてくれた……………その事実が嬉しすぎて……………涙が……………。

「大袈裟ね、これぐらいいくらでもしてあげるわよ」

そんな、涙が出るほど嬉しい事をしてくれたのに……………更にそんなお言葉までくれるなんて……………姫様、惚れ直しました。

そして、俺のスペルカードの名前が決まり、姫様の素晴らしさを再確認した後……………しばらく、話していると、話題が富士あんみつの話になった。

「……………私も食べたかったわ……………お持ち帰りは出来ないのかしら……………？」

お持ち帰りか……団子とかならまだしも、あんみつのお持ち帰りは……。

「うーん……富士あんみつは、賞金がかかってましたし……量的にも持ち帰るのは不可能かと……」

「そつよね……」

そう短く呟いて、姫様は何かを考えていた……。

そして、何かが閃いたらしく……俺に笑顔で、こつ提案をしてきた。

「そつだ、幽真」

「はい、なんででしょうか？」

「私と実際に、富士あんみつを食べにいきましょうっ？」

第十八話、永遠亭に到着（後書き）

やっと、スペルカードの名前がきまりましたー！

星屑さん、RED／RAVENさん、ありがとうございます！
物凄く助かりました！

あと、八万pvを越えました！

こんな、駄文を読んでもいただいてありがとうございます！！

では、感想と脱字、誤字の指摘をお願いします！

第十九話、金がない？ 働こう。(前書き)

……やばい、本当にバイトのせいで時間がない。

遅れてごめんなさい！

遅れたけど、クオリティーは……いつも通りです

では、第十九話始まります！

ゆっくりしてってね！

第十九話、金がない？ 働こう。

「私と実際に、富士あんみつを食べにいきましょう？」
「…………え？」

今、姫様が…………とても珍しい事を言ってた気がするが？
夢か？ 幻聴か？ ついに姫様の魅力にやられて、俺の頭はおかし
くなつたのか？

「幽真？ ……………とおっ！」
「はっ……………！？」

ペチツと姫様が、俺の頭にチョップをした。
音からして、全く痛くない。

姫様の可愛らしいチョップのお陰で、なんとか正気に戻れたが…………。

「ひ、姫様、今なんと…………？」
「だから、富士あんみつを食べに行きましょう？」

…………いや、落ち着け…………COOLになれ霧島幽真。
俺は、得意気に笑っている姫様の可愛らしくも美しい顔を見て、落
ち着くことにした。

まさか、姫様が自分から出掛けようと言い出すなんて…………。
珍しい事もあるんだな。

俺は、笑顔で姫様を褒めて差し上げる事にした。

「とつても、いい考えだと思いますよ？」
「でしょ？ 後、もう一つお願いがあるんだけど……………」

どんなお願いなのか分からないが……姫様は、俺の様子を伺っていた。
ええ、こんなに可愛らしいお顔でお願いされたら、死んでもなんでも叶えちゃいますよ。

「はい、なんでしょうか？」

「皆には、黙って欲しいんだけど……いいかしら？」

「はい、わかりました」

……あれ？ つい、姫様の頼みだから、反射的に返事をしてしまったが……皆には、黙って欲しい？
えっと、つまり……？

俺が、その言葉の意味を考えると……姫様は、とびっきりの笑顔を浮かべ嬉しそうに……。

「ありがとう、幽真。 私ね、お忍びつてのを体験したかったのよ」

ああ、なるほど。

皆に黙って欲しい理由は、お忍びの気分を味わいたいからか。もう、発想が可愛らしいなあ、流石、姫様だよな！。

「それじゃ、さっそく明日行きましょ？」

「明日ですか、かしこまりました」

「じゃあ、私は寝直すから……お夕飯が出来たら起こしてね？」

姫様が寝るために、服を脱ぎ出そうとしたので……心のハードディスクに保存の準備……ではなく、お盆の上に湯飲みを二つおいて、

「では、失礼しま……（今日は白か）……した！」と早口で言っ
て、ハヤテのごとく部屋を出た。

「あ、危うく、血の海になるところだった……」

華麗に二つの死亡フラグ（1つは、鼻血フラグ。もう、1つは師匠にフルボッコされるフラグ）を回避した俺は、鼻から垂れた赤い液体を吹いて、湯飲みを洗いに台所に向かう事にした。

（しかし、お忍びに憧れるなんて……本当に姫様は、可愛らしいなあ）

でも、普段外を出歩かない姫様が出掛けたいなんて……。富士あんみつが、余程食べたいんだな。

（……でも、なんか引つ掛かるんだよな）

なぜか、どうしても色々と気になってしまい、台所に向かう足を止めて考えた……。

（姫様は、お忍びで行きたいと言って、皆にはナイショだと言って……ん？）

……つまり、話をまとめると……。

明日、俺と姫様の二人で里に行って甘味処にあんみつを食べに行く。

（えーと……ま、まさかまさかのまさか！？）

それって……世間一般では、デートって呼ぶんじゃない？

(落ち着け、落ち着け、COOLに……COOLになれ!)

俺は、三回くらいお盆を落としそうになりながら、落ち着こうとしているが……。

姫様とデートだぜ!? 冷静になれるか!?

「らりるれろ!? らりるれろ!?!」

ダメだ、焦りすぎて、日本語が喋れてない……。

深呼吸だ、深呼吸をするんだ!!

「はぁーすうーはぁーすうーはぁー……ゴホツゴホツ!」

ただでさえ、酸素が不足しているのに、吐いてから吸ってしまったせいで蒸せてしまった。

でも、蒸せたお陰で、落ち着きを取り戻せたから……結果オーライだな。

(よく考えたら、デートではないだろ……)

蒸せて冷静になったら、元も子もない考えに至ってしまった。

俺は、案内役として姫様と一緒にいるだけだし……なにより、姫様はデートだと思ってはいないだろう。

うっわ、一人で、勝手に盛り上がって、はしゃいで恥ずかしい。

一瞬、自傷行為しそうになったが……見られたら大事なので、気合いで押さえる。

まあ、デートじゃないのは少しだけ残念だが……デートじゃなくて

も、スツゴく嬉しいのは確かだし、珍しい姫様の外出だ……俺以上に楽しんで欲しい。

「あ、そうだ……」

ポケットから、財布を取り出す……うーん、宴会の材料費に金を使
いすぎたか……資金が心もとない。

……師匠に頼んでみる？

いや、働いてないのにお金を貰うわけにはいかないし……黙って姫
様を連れ出すことが、師匠にバレたら、俺がお仕置きされる。

「バイトでもするか？ でも、そんな都合が良い……」

そこまで小声で呟いたが……ふと、前に、お世話になった魔法の森
の方面にある古びたお店、香霖堂が頭をよぎった。
あそこなら、バイトさせてくれるんじゃないか？

「よし、行ってみるか……」

とにかく、今は時間がおしい。

俺は、お盆の上の湯飲みを洗いに台所に向かうことにした。

「ゆ、幽真君……どうしたんだろ？」

私は、走っていった幽真君を呆然と眺めていた。

お師匠さまのお仕事が終わったから、台所でお茶でも飲もうと思っ
て、台所に向かっていたら……。

幽真君が、お盆を持ったまま、廊下に立っていたのが見えた。
どうしたのだろうと思って、声をかけようとする……。

「らりるれる！ らりるれる！」

(ええ！？)

……いきなり、かなり動揺している様子で、大声をあげ始めたと思
ったら……。

「はあーすうーはあーすうーはあー……ゴホッゴホッ……！」

今度は、深呼吸に失敗して蒸せている……。

私は、怖くなって声をかけるのをやめた……いや、かけられなかつ
た。

(な、なに？ 幽真君は壊れちゃったの？)

私が混乱してる間に……逆に、幽真君は冷静になっていて……財布
の中身を見ながら難しい顔をしていた。

「よっ……」

最後の方は聞き取れなかったけど……。

幽真君は、お盆を持って走って行ってしまった。

「……幽真君、又、疲れてるのかな？」

前にも、幽真君はストレスが爆発して、「手首を切りたい」と言い出すほど、おかしくなっていたし……。

（また、なにか悩んでるのかな？）

私が相談に乗れるといいんだけど……。後で、さりげなく聞いてみようかな？

私は、台所に行くのは、しばらく止めておこうと思……引き返す事にした。

「いくぜ……」「スイーツ オブ ガーディアン」！！

俺は、わざわざスペルカードを掲げてから、お菓子の巨人を創り出した。

掲げた理由は……姫様に名前を貰ったから、さっそく使いたかっただけだけだ、深い意味はない。

ちなみに、俺（お菓子）を守る守護者だから、「スイーツ オブ ガーディアン」と命名したらしい。

とてもシンプルで、俺は、姫様に名付けてもらった嬉しさもあり、十二分に気に入っていた。

「よつと……んじゃ、行きますか」

俺は、巨人の手のひらに乗った。

もう、コイツには乗ることはないと言ったが……空を飛んだ方が歩
くより何倍も早い。

「……お金がないから行けないなんて、洒落にならないからな」

姫様のためにも、俺のためにも……なんとかして、お金を手に入れ
なくてはいけないのだ。

まあ、そんな思いとは裏腹に……急いでる時に限って……嫌な偶然
とはあるものである。

「あやや？ また巨人さんに乗ってるんですか？」

前にも同じ状況で会った、顔見知りの新聞記者が話しかけてきた。
よし、無視しよう。

「俺は、何も見ていない！！」

「ちょ……… 出会い頭に豪快に無視しないでくださいよ！？」

全力で無視しようとしたが……天狗の新聞記者、射命丸文しゃめいまるあやは俺の横
に並んだ。

「悪いが……俺は急いでるんだよ」

「………なんか、私の事を厄介者だと思ってるませんか？ 厄介者です
けど」

厄介者の自覚はあるのかよ……。

俺の冷たい態度に、明らかに不満そうな表情を浮かべていたが、何
かを思い付いたようで、笑顔に表情を替えて、俺の前に立ちふさが

った。

「で……なんで、そんなに急いでるんですか？」

射命丸は、メモ帳を取り出して、既に取材モードに入っていた。

……だから、無視したかったんだよ。

「ほらほら、早く白状した方が身のためですよ？」

白状したら、その事を根掘り葉掘り聞くんたる？

そっちのほうか、身のためにならないだろ。

とても楽しそうに笑ってる射命丸に、俺は心底つまらなそうな顔を
してやった。

「はあ……だから、俺は急いでるんだよ」

「ええ、なら早くネタを提供してくださいよ」

これはあれか？

空を飛んで、楽をしようとした罰なのか？

……困ったな、こいつに急いでる理由なんか喋ったら、最終的に姫
様がお忍びであんみつを食べに行く事までバレるのは必須だ。

もし、俺が白状したら……。

『白状する 新聞にされる 姫様のお忍びの計画がバレる 姫様の
好感度ダウン& a m p ; 師匠のお仕置き』

「幽真さん？ どうかしました？ お顔が真っ青ですけど？」

「……なんでもねえよ」

顔が真っ青なのはお前のせいだよ！……と言ってやるうと思っただが。

射命丸が、俺が何を隠してるのか想像して、明らかに楽しそうな顔をしていたので……怒る気が失せてしまった。

「なあ、射命丸」

「はい？　なんでしよう？」

「今度、取材の手伝いでも、お前の新聞でお菓子作り特集でも……なんでもやってやるから……今は何も聞かずにどいてくれないか？」

このままじゃ、ラチがあかないから……ダメもとでお願いをする。

「あ、なら分かりました」

「……え？」

「その条件で、今日は勘弁してあげます」

ダメもとでお願いをしたはずだが、射命丸は、本当にあっさりと了承してくれた。

「ああ……ありがとうございます」

俺は、心の中で首をかきげながら、お礼をいった。

なんか、また地雷を踏んだ気がするのには気のせいだよな？

「では、急いでる貴方に私、射命丸がサービスして差し上げます！」
「……はい？」

すると、射命丸が俺の横に回って……俺の両腕をつかんだ。

「この幻想郷最速である私が、目的地までひとつとびして差し上げますよ！」

「いや、別に……」

「さあ、目的地をどうぞ？」

……まさか、目的地を言うまで離さないつもりか？

しょうがない……俺は、体のお菓子を軽くして「んじゃ、香霖堂まで……」と言った。

「分かりました、振り落とされないように気を付けてくださいね？」

お前が、俺を掴んでるんだから気を付けるのはお前だと思うんだが？
心の中でそう、ツツコンだ瞬間……すごいスピードで、飛び出した。

「うあああああああああ！？」

……幻想郷最速は、嘘じゃなかったみたいだ。

第十九話、金がない？ 働こう。(後書き)

いつも、この「東方 永葉抄 く俺の主は月の姫」を見てくださ
つてありがとうございます！

なんですすね……アクセスが九万を越えて、pvも一万越えちゃい
ました！

本当にありがたい限りです！！

……更新スピードもクオリティーも上がるように頑張るので……こ
れからもお願いします！

では、感想と誤字、脱字の指摘をお願いします！！

第二十話、香霖堂でのお仕事&アップデート(?)前夜にて……(前書き)

大体10日ぶりの更新です!!!

遅れてごめんなさい!

最近、スランプで全然書けなかったんです!!!

……頑張って笑える話を書いたつもりなので、最後まで読んでください。

では、第二十話始まります!!!

第二十話、香霖堂でのお仕事&mp・デート(?)前夜にて……

「あ、そろそろ、香霖堂ですね……。幽真さん、着地の準備をお願いしますね?」

「え?」

「では、また。約束忘れないくださいね?」

ちらりと見えた射命丸の顔は、笑っていた気がする。

……ちなみに、気がするのは俺は既に地面に落下していて、遠くに射命丸の顔が見えたからだ。

落下してる理由? 至極簡単な理由だ。

射命丸は、か弱く脆い人間(と同じ構造のお菓子)に対して、特に説明もなく手を離れたから。

「嘘だろ!?!」

俺は、無様に受け身をとれずに地面に着陸して、顔面でスライディングすることになった。

……確かに急いではいたが、顔面でスライディングするほど急ぎたくなかったぞ。

(あの、新聞記者……覚えてるよお)

ふらふらと立ち上がって、顔を直す……。あくまで直すだけだから、痛みは引かない。

しかし、姫様との約束のために、激しい痛みと新聞記者への怒りを堪え、香霖堂のドアを開いた。

このお店の店主は、いつもの椅子に座り、いつものように本を読んでいた。

「いらっしやい。今日は何をお求めかな？」

俺が入ってきた事に気づくと、本から目を離してにこやかな笑顔で挨拶をしてきた。

「いや、今日は買い物じゃない」

「それじゃ……僕と喋りにでもきたのかい？」

「違う、違う」

俺は、手を軽く振って否定した。

駄弁りに行くだけなのに、顔面着地するほど急がない。

……まあ、どんなに急いでも顔面スライディングはしたくないがな。まだ、顔が痛いです……。

「ちょっと、頼みがあるんだけど……」

俺は、霖之助に働かせて欲しいと頼んでみる。

夕飯の支度があるので『なるべく、短時間で終わる仕事』条件に頼んでみた。

「ふむ、別に構わないよ？ ちょうど良く君に頼める仕事があるんだ」

「本当か!？」

働きたいと言う頼みを聞き終わった霖之助は、条件があるのに意外とあっさりと了解してくれた。

「でも……急にお金が必要なんて、どうしたんだい？」

本にしおりを挟んで、棚にしまいながら霖之助はそんな事を聞いてきた。

俺は、お金が必要な理由……つまり、姫様のお忍びの事を言うべきか言わぬべきか悩んだが……。

「ああ、まあ……言ってもいいが、秘密にしてくれよ？ 特に新聞記者にはな？」

姫様には悪いが、霖之助にはお忍び計画を話すことにした。

うまい言い訳が思いつかないし、なんとなく下手な嘘を言つと面倒な事になる気がしたのだ。

俺がバイトしたい理由を聞き終わると……なぜか、満足げに霖之助は頷いて「いやあ……青春だね」と呟いていた。

「なにがだよ」

なんか、小さい頃に会った親戚にいるうざったいオジサンみたいだな。

……と心で思いつつ、霖之助にツッコミを入れた。

「それじゃ、さっそく……デートの資金を稼ぐために、張り切ってお仕事しようか？」

俺のツッコミを無視して、閉鎖な空間で働いている某超能力者のように、霖之助はニヤニヤしている。

……そんな、イケメンスマイルを浮かべてる、霖之助の顔面を殴り

たくなつた。

「殴るよ?」

「あははっ、ごめんごめん。 からかい過ぎたね」

「……………はあ」

働く前に疲れてしまった俺を他所に、今日の霖之助は楽しそうに笑っていた……………なんだろ、このやるせない気持ち。

「それじゃ、君に頼みたいお仕事なんだけど……………」

さて、話を本題に戻すと……………今回、頼まれたお仕事は『外の世界の道具の使い方を教える』事だった。

前にも説明したと思うが……………霖之助の能力は、「道具の名前と用途が判る程度の能力」である。

名前と用途は判るが、使い方までは判らない。

そこで、外来人である……………つまり、外の世界から来た、俺に外の世界の道具の「使い方」を聞きたいらしい。

「先ずは、これなんだけど……………分かるかい?」

霖之助が、商品の山から最初に取り出したのは……………百円シヨップなどで売っている「ゆで卵を綺麗に輪切りにする」道具だった。

「どうも、刃が付いてないんだが……………壊れてるのかい?」

「これは、刃が無くても切れるんだよ」

口で言うより、便利グッズの類いは実践をした方が早い。

俺は、ゆで卵のそっくりのお菓子を、実際に輪切りにしてみた。

すると、霖之助は「へえ〜」と呟き、道具を持って一言。

「へえ、ギロチンの要領なんだね」

「確かにそうだが……他に例えはなかったのか？」

食い物を使う道具を、処刑道具で例えて欲しくないんだが。

「それじゃ、〇〇〇？」

「……悪かった、ギロチンでいい」

霖之助が何に例えたかは、各々の想像に任せる。

俺からは何も言わん。

「次は、これなんだけど……」

霖之助の手には、一本の傘が握られていた。

見たところ、ボタン一つで開くタイプのようだ。

「これは、分かるだろ？」

俺は、傘を受けとって縦に持ち直し、開こうとボタンを押すと……。

「うあ！？」

傘の先つぼの部分から、ポスツと静かな音がしたと思ったら、先端から煙が出ていて天井に穴が空いていた。

……弾丸出てきた！？

「ああ、そうやって使うのか……」

「霖之助、これは本当に外の世界の道具なのか？」

少なくとも、こんな銃刀法違反している傘は見たことが無いんだが……。
とにかく、このぶっそうな傘を適当な商品の影に隠しておく事にした。

「次は、これかな？」

「……………え？」

俺の手に渡されたのは……………古い日本人形だった。

髪型はおかつぱで、赤い着物を着ている。

……………なんで、人形の使い方なんて聞くんだ？

「……………これは、使い方なんてないだろ？」

「でも、髪が伸びるらしいんだけど……………どうすれば伸びるんだい？」
「の、伸びるのか!？」

まさか、その風貌で髪が伸びるって……………呪いの日本人形!？
俺は、思わず一步後ろに下がってしまった。

「どうしたんだい？」

「いや、その……………」

霖之助が人形を持って、こちらに近寄ってきた。

心配してくれてるのは嬉しいが……………まずは、人形を置いてくれよ、近づけるな!!

大体、呪いの人形の使い方なんて……………!!

「ん？ 使い方？」

……あー、なんとなくんだけど、オチが分かってしまった。
気を取り直して、霖之助から呪い（？）の日本人形を受けとり……
色々と探ってみる事にした。

まあ、結論から言つと……呪いの人形ではなかった。

紐を引つ張ると髪が伸びるように作られた……小道具だったようだ。

「……なんつーか、香霖堂つて品揃えが凄いな」

「はははっ、ありがとうございます」

……その後も、色んな道具の使い方を説明したが……。
さっきの傘や人形のように、変わつてる物から、日用品、電化製品
など……語る気力が無くなるほど種類豊富だった。

「うん、今日はこれぐらいでいいかな？ お疲れさま」

「……ああ」

霖之助がそう言ったので、短く答えて椅子の背もたれに思いつきり
寄りかかった。

予想以上に疲れた原因は、香霖堂の品揃えが凄いせいなのか、外の
世界の道具が凄いせいなのか……もう、どっちでもいいか。

「それじゃ、これがお給料だよ」

「ありがとうございます！」

「い、意外と現金だね？」

俺は、椅子から、一秒より早く立ち上がり霖之助から、お給料が入
っている封筒を受けとる。

……意外と封筒が厚かった。

「こんなにいいのか？」

「もちろんだよ、すっごく助かったからね」

まあ、これだけあれば……明日のお忍びで金銭的に困ることは無いはずだ。

さて、ここでの用事が終わったので後は帰るだけなのだが……。

「……なあ、霖之助？」

「なんだい？」

「この薬の名前とか用途は分からないか？」

そう言つて、俺はポケットに入りっぱなしだった紫さんから貰った、小さい注射器を見せた。

「いや、僕の実力はあくまで道具に対してだから、薬の事は分からないよ」

「まあ……そうだよな」

もしかしたら、俺が調べ無くても霖之助なら分かるんじゃないかと思つたが……根本的に無理だったか。

「薬の事なら……永遠亭で調べるのが一番だと思つけど？」

……だよなあ。

俺は、さっさと注射器をポケットにしまった。

「悪いな、変な事を聞いちゃってさ」

「いいけど……それより、早く帰らなくていいのかい？」

霖之助が窓を指差してるので、窓の外を見ると空が赤くなっていた

……夕方になりかけているようだ。
……って、ヤバくね!?
夕食を作らなきゃいけないんだ!!

「わ、悪い！ 俺、もう帰るからな！」

俺は、給料が入った封筒をポケットに突っ込んで外に出ようとする
と……ドアを開けた瞬間に、霖之助に肩を掴まれた。

「あ、これもあげるよ」

無理矢理店の中に戻されて、大きな紙袋を押し付けられた。
中には、何が入っているか解らないが……意外と重い？

「貰っているのか？」

問いかけてみると、霖之助は頷いた後に、胡散臭い笑顔を浮かべ手
を降っていた。

貰っていいと解釈し、遠慮なく紙袋を貰う事にする。

「明日のデートに使うといいよ。それじゃ、またのご来店をお待
ちしているよ？」

「ああ、ありがとうな」

俺も手を振り替えし、紙袋の中身を確認せずに、店の外に出て……
お菓子の巨人を創り出し、手のひらに乗り込んだ。

「さてと、急がないとなあ」

俺は、あの騒がしい新聞記者に会わないように祈りながら……お菓

子の巨人の手のひらに乗って、永遠亭に向かった。

祈りが通じたのか、偶然なのか……射命丸には遭遇せずに、すぐに永遠亭に帰れた。

なんたる、前にもそんな事が在った気がするが………気にしない、気にしない。

途中で、遊ぶ約束をほったらかした為ので、てるとウサギ達に怒られたが……なんとか遅れず夕飯を作り終える事が出来た。

今は、夕飯の洗い物を終え、師匠に頼まれた食後のデザートケーキを作るために、台所に立っている。

俺は、長袖の袖を捲って自分用のエプロンを装着した。

創ってばかりで、手作りでお菓子を作るのは久しぶりに感じてしまふ。

「ちょっと、張り切ってみるか……」

「……まだあー？ 待ちくたびれた」

「今、幽真君が作ってるから静かに待ってなさいよ」

退屈そうにしながら、文句を言っているてゐを叱りつけた。
しかし、まだてゐは、台所でデザートを作っている幽真君に対して
文句を言っている。

「全く、遊ぶ約束も忘れてたし……幽真は甲斐性無しだね」

「遊ぶ約束してたの？」

「ん？ うん、してたんだよ。でも幽真は勝手にどっかに出掛け
ててさあ」

ああ、夕飯の少し前に、廊下で幽真君がてゐと兎たちに囲まれて、
苦笑いしながら頭を下げてる所を見たっけ。

……どうやら、お昼（私が幽真君の奇行を見たとき）に急いでたの
はどこかに行くために急いでいたようだ。

「それにしても……幽真にしては時間がかかってるわね」

「お、お師匠様まで……」

てゐだけではなく、お師匠様まで幽真君のケーキが待ちきれないよ
うだ。

そう言えば、デザートを作るように頼んだのもお師匠様なんだよね？

……実は、お師匠様……甘いもの好きなのかな？

「……何かしらその目は？」

「い、いえ、なんでも……」

つついジロジロと、お師匠様の事を見てしまった。

危うく見てただけなのに、叱られてしまふところだったわ……。

とにかく、お師匠様から視線を外すと、輝夜様が何かを考えて呟い

ている。

「二段……いや、五段かしら？」

「何がですか？」

「ケーキの段数よ」

「どれだけ、大きいのを期待してるんですか……」

私が聞くと、輝夜様は内容は置いておいて、とても真剣な様子で答えてくれた。

五段のケーキって……おとぎ話の中でしか出てこないんじゃないの？

「幽真だったら、あるいは……」

「お師匠様!？」

気づくと、お師匠様もケーキの段数について考えている。

……やっぱり、お師匠様は甘いもの好き？

「賭けをしない？ ケーキの段数を当てるだけの簡単なのを……」

「てめ、あんたは黙ってなさい」

幽真君、大丈夫かな？

本人が知らないところで、半端なくハードルが上がってるけど……。

「お待たせしましたー!」

そんな、最悪なタイミングでふすまの向こうから幽真君の嬉しそうな声が聞こえた。

すると、ふすまが開いて……幽真君が片手で、五段のケーキを持っていた。

「本当に五段作っちゃってるよ!？」

私は、思わず大声を出してしまった。

その後、幽真君は「姫様が喜んでくれると思い作った、作ってて楽しかった、後悔はしていない」と語っている。

……もちろん、輝夜様は大変喜んでいた。

俺は、入浴を済ませ濡れた髪を拭きながら部屋に戻っている。

「あー……なんか、眠いなあ」

……うん、流石に五段は作りすぎだな。

楽しかったけど、地味に腕が痛い。

後悔はしていないが、少し反省をしていたら自室の前にたどり着いた。

(明日は、大切な用事があるし……早めに寝よう)

部屋に入って、布団を敷こうと思っていたら、霖之助から貰った紙袋が目に入った。

そう言えば、中身を確認せずに貰ったが、これは何が入ってるんだ？

「明日のデートで使えって言ってたよな。デートじゃないけど」

俺は紙袋を机に置き開けて、手を入れてみる。

触った感じでは……洋服が入っているようだ。

「なんだ、勝負服でもくれたのか？」

紙袋の中身を出すと、白と黒のフリフリが……メイド服が出てきた。

「メイド服！！？」

え、なに？ 霖之助は何がしたいの？

デートにメイド服？

どんな神経をしていれば、男にメイド服を勝負服として渡せるの？

「まさか、姫様に着させろって事か？」

そうだ、もしかしたら、霖之助は俺のではなく、姫様のメイド服を用意したのかもしれない。

メイド服をちゃんと広げて確認する。

少なくとも女性が着るサイズではなく。

試しに自分の体に合わせると……俺の体にピッタリなサイズだった。つまり、姫様ではなく俺が着るためのメイド服のようだ。

「あはっ……笑えねえ冗談だなア」

この状況がアホらしくて笑いが零れてしまった。

今すぐ、霖之助の元に駆けつけて「どこの次元に、メイド服をデートに着ていく男がいるんだよ」とツツコミたい。

確かに、姫様は冗談が分かる素敵な女性なのでウケそうだが、俺の男としてのプライドが許せない。

「……片付けよ、一刻も早く」

自分の体にメイド服を合わせてる姿なんて、見られたら即終了のお知らせだろう。

なぜか、メイド服を綺麗に畳んでいると……涙が出そうになった。

「幽真君、まだ起きてるかな？」

私は、幽真君がお風呂から上がったと聞いたので、お昼の事を聞きに行くために幽真君の部屋に向かっていた。

(やっぱり……また、何か悩んでるのかな？ 私が相談に乗ればいいんだけど)

普段は、とても真面目で頼りになる幽真君だけど……色々と溜め込んでしまう性格をしている。

それに、前に「手首を切りたい」と言ってしまうほど悩んでいたから……今回の事も余計に心配なのだ。

さて、幽真君の部屋の前にまで来たのはいいけど……。

「……あれ？ 少しだけ開いてる」

部屋のフスマが若干開いていた。

……すると、女物の服を自分の体に合わせている幽真君の姿が見えた。

(ええええええええええ！?)

もう一度、除き込むと……やっぱり、女物の服……メイド服かな？
メイド服を握りしめている幽真君の姿があった。

(……み、見なかった事にしよ)

私は、フラフラとしながら幽真君の部屋を離れる事にした。

(な、なにかの間違いなのかな？ それとも……幽真君に女装癖が……?)

私の頭では、考えても考えても全然分らないけど……1つだけ、
わかったことがある。

最近……幽真君が怖いです。(色んな意味で)

第二十話、香霖堂でのお仕事&amp;デート(?)前夜にて……(後書き)

さて、次回は姫様との甘い甘いデートのお話しに……なるかな？

スランプ&amp;バイトで更新は遅れそうです……。

では、感想や誤字、脱字の指摘をお待ちしていますー。

第二十一話、お忍び計画当日（前書き）

お久しぶりです！ 忘れられてませんかよね！？

二ヶ月ぶりの更新ですよっっっ！！

ようやく出来た！！

っー訳で……第二十一話始まります！

ゆっくりしていったね！！

第二十一話、お忍び計画当日

さて、なんやかんやで色々あったが、今日は姫様のお忍び計画の当日である。（言っても昨日発案されたのだが）

昨夜は、姫様と二人で出掛けるのに緊張もせずにくつりと眠れた。その理由として、皮肉にも霖之助がくれたメイド服のお陰で大分脱力してしまい、あの後すぐに寝付いてしまったのだ。

今度、霖之助にはお礼として、とても綺麗だが当たったら痛い飴の雨でも見せてあげようと心に決めている。

「さてと……」

目覚めた後、台所で朝食を作り終えた俺は、姫様のお部屋の前にいた。

朝起きた時に……本当に今更だと思うが、具体的に出掛ける時間を決めていなかった事に気づいてしまった。

なので、急いで朝食を作り終え、朝起こすついでに出掛ける時間を聞くために姫様の部屋の前に居るのだ。

「失礼します。　姫様、朝食の用意が出来ましたよ？」

俺は、姫様に見られても恥ずかしくないような笑顔で部屋のフスマを開けた。

結果から言わせて貰うが、姫様に出掛ける時間を聞いてみると……。

「んー、幽真のお仕事が終わったら行きましょ？ あと、もう少し寝かせてちょうだい……」

と言つて、姫様は小動物のように可愛らしく布団に潜ってしまった。余談だが、その姿が可愛らしすぎて、しばらく起こすことが出来なかったのは言うまでもない。

今の時間帯は大体2時を過ぎた頃で、お日様の位地はまだまだ高い。しかも、そろそろ梅雨の時期らしいのだが……今日は晴れていて暖かく、見事なお出かけ日和だった。

「良い天気だなあ……」

すっかりお日様の良い匂いになったお布団を取り込んでいたら、無意識にそんな事を呟いていた。

（今日は運がいいな……日頃の行えがいいお陰か？）

晴れてる上に、家事もこれが終われば終わり。

しかも、師匠がウドンゲさんと出掛けていて不在（なんの用事なのかは知らないが）つまり、姫様を連れだしてもバレはしない。

つと……自分でもしみじみ思ってしまうほどに、今日は運が良いのだ。

（なにより、師匠が出掛けてるのは都合が良い……良すぎる位だ）

もし師匠に姫様を連れ出すことがバレたら、確実にお仕置きされる。その、お仕置きの心配がないのは本当にありがたい。

（まあ、師匠は姫様には甘いし、過保護だからな。　気持ちは分かるが）

もちろん、俺も姫様にはお菓子に負けないぐらい極甘な自信がある
（断言）

俺は、布団を持って各部屋に仕舞いに行った。

「ふっふっふ……家事は終わったようだね、幽真」

さて、家事を終えて姫様を迎えに行こうとした瞬間だ。

俺の天敵（色んな意味で）の幸運を運んでくれるはずの白兔と、ウサギ達に幸せへの道（廊下）を塞がれた。

「てゐ、何かようか？」

「ふっふっふ……」

てゐが悪党のようにまた笑い出した。

相変わらず、見た目は子供なのに悪役の顔が似合うな。だから、嫌な予感しかしない。

「幽真、家事はもう終わったよね？」

「ああ、終わったが。　それが……」

「じゃあ、遊ぼう？」

どうした？ と聞く前に早押しクイズ並みのスピードでてゐは答え
た。

……まさかとは思うが。

「なあ、俺が家事を終えるまでずっと見張ってたのか？」

「もちろん」

それはそれは見事なドヤ顔で、てゐは答えてくれた。

参ったな、そこまでするとは……昨日遊ぶ約束をバックレたせいか？

「ほら、兎達も早く幽真と遊びたいってさ」

てゐの周りにいたウサギ達が、俺の足の周りに集まり見上げていた。

……その純粋な視線に弱いんだよな、俺。

いつもだったら、俺が折れて遊んであげるのだが……。

「悪い、今日も遊べないんだ」

しかし、このままてゐの策略に引っ掛かる訳にはいかない。

なにせ、今日は姫様が珍しく自分から外出しようとしているんだ…

…姫様の決心を俺の用事で無駄にすることは出来ないだろ？

お忍び計画がバレないように全力でこの場を誤魔化してみせる。

「……なんで？」

てゐが不満そうに睨んでいる。

やはり、昨日遊ぶ約束を無視した事を根に持っているようだ。

それは予想内なのだが……。

(さて、どうやって誤魔化せばいいんだ?)

しかし、長い間悩んでいてはられない。
適当に誤魔化してみることにした。

「ほら、今日は師匠がいないだろ? 一樣、俺が居ないと……」

「少し位大丈夫でしょ?」

「流石に姫様を一人には出来ないだろ?」

珍しく俺にしては上手く誤魔化せている方だと思う。

このまま、てゐが外に遊びにいけば姫様を連れ出すのがもっと楽になるはず……だったのだが。

「じゃあ、ここで遊ぼうよ」

早くも限界が来てしまった。

永遠亭は広いから遊べるには遊べるし、姫様を一人にさせる事はない。

内心、冷や汗を流しながら……必死にこの状況を打開する術を考え
たが……全く思い付かない!

「幽真、どうしたの?」

「待っててくれ。今、上手い言い訳を考えてるんだ」

「上手い言い訳?」

「……あっ!?!」

俺は、慌てて口を塞ぐ……ついつい口を滑らしてしまった。

そんな、ギャグでは定番だが現実ではあり得ないミスをした俺に
対する、てゐの可哀想な子を見る目が……とても辛い。

「……はあ」

そんな目線を送られた上に、心底呆れたようにため息をつかれた……泣きたい、泣いていい？

これは、観念して姫様のお忍び計画を素直に打ち明けて諦めてもらうしかないか……。

「相変わらず、幽真は嘘が下手だね。分かったよ……今日は勘弁してあげる」

「え？ 勘弁って？」

「今日は、私達だけで遊んでくるよ」

てゐは、少しだけ不満そうな顔をしてウサギを一匹抱き上げた。

……なんだ、どんな心境の変化が起きたのか？ それともアホすぎるミスをして呆れられたのか？

「幽真が、アホすぎるミスをしたのは今回だけじゃないでしょ？」

遊びの誘いを断ったせいで不機嫌そうなので、いつもより鋭いトドメの一撃を食らわせられた。

……ヤバイ、このままじゃ姫様の前に出れない顔になりそうだ。

「どうせ、幽真の事だから、輝夜さまと二人つきりになりたいから断ってたんでしょ？」

「うつ……まあ、当たっては……いるな」

結論から言うと確かにそうだが……。

明らかに、いつもよりてる機嫌が悪すぎる気がする。

「幽真が輝夜さまの事を好きなのは知ってるけど……あんまり、輝夜さまに手を出すとお師匠さまにお仕置きされちゃうよ?」

いつものからかう口調ではなく、危うく出かかっていた涙が引っ込んでしまうほど冷たく言い放っていた。

「えっと……なあ、てゐ」

「ふんっ」

俺が話しかけても、話を聞かずにそっぽを向き、てゐはウサギを抱いたまま、俺に背を向けて走り去ってしまった。

他のウサギ達も俺の方をチラリと見て、てゐについていった。

「……参ったなあ」

俺は遠ざかっていくてゐの姿を見ていたらため息が零れてしまった。そりゃ、昨日遊ぶ約束を無視されて、今日も俺の家事を終わるまで待ってていたのに断れたら……怒るよな、普通に考えてさ。

「悪いな、てゐ。 姫様の為だ……我慢してくれ」

ちよつと心が痛むが……今は、待ちくたびれてしまっている姫様を迎えに行くために……部屋に向かって歩き出した。

「姫様? 姫様ー?」

姫様の部屋の前についた俺は、中にいるはずの姫様に呼び掛けをしたが……返事がなかった。
もしかしたら、待ちくたびれて眠ってしまったのかもしれない。

「……失礼します」

フスマを開けて、部屋を覗くと……お布団がしいてあり、掛け布団が膨らんでいた。

「姫様、家事が終わったので人里に行きますよ？」

そう一声かけて部屋に入り、姫様を起こすためにお布団に近づいていった。

「ばあああああああ！！」

「うわあ！！」

すると、布団がもぞもぞと動いた後、ホツケーのマスクを被った姫様が布団から飛び出してきた。

まあ、顔を隠していても、美しい髪と可愛い声で、すぐに姫様だと分かったが……あえて大袈裟に驚いてみる。

「うふふつ、驚いた？」

「え、ええ……」

俺は、息を整えながら姫様のイタズラが成功して嬉しそうな顔を、バレないように眺めていた。

ふっふっふ、やっぱり大袈裟に驚いたかいたな。

息が整い、その表情を心の画像フォルダに保存し終わったので……未だに手に持っているホツケーマスクについて聞いてみる事にした。

「ちなみに、姫様、そのマスクはどこから……?」

すると姫様は「これ?」と言ってマスクをわざわざ顔に付け直した。
……どうやら姫様の的に気に入ったらしい。

「えーとね、てみがね……」

「わかりました、もう言わなくていいです」

「えっ? そっ?」

どうやらてみが腹いせのために、ホッケーマスクを渡したらしい。
でも、ホッケーマスクなんてどこにあったんだ……?
永遠亭の七不思議の一つに登録だな。

「それなら、早く行きましょ?」

「待つてください、マスクは外してください」

「でも、お忍びだし……ほら、お忍びって正体を隠すものでしょ?」

「それじゃ、正体は隠せても逆に目立つちゃいますから……外してください」

「じゃあ、幽真もこのお面を付ければ問題ないわね」

「それは違うよ!」

しばらく、議論した結果、俺の超高校級の説得が通じて、姫様からマスクを外すことに成功した。

……マスクなんてされたら姫様の可愛い顔が見れないからな……

…頑張ったよ、俺!

今、俺と姫様は迷いの竹林を歩いていてた。

本当は歩くのが嫌いな姫様のために、お菓子で馬車でも創ろうと思っていたのだが、その事を姫様に提案すると予想外の反応が返ってきた。

「あら、必用ないわよ。 さあ行きましょ？」

姫様はそう言っつて、先に迷いの竹林へと歩き出してしまったので、俺はお菓子の馬車のイメージを止めて慌ててついていったため、俺と姫様は歩いているのだが……いつもは永遠亭の中ですら歩くのを渋る姫様が、今日に限って歩きたいなんて……不思議だよ？

「ねえ幽真？ あとどれぐらいで里に到着するのかしら？」

「あと、もう少しですよ。 もしかして……疲れましたか？」

「まだ大丈夫よ。 もう、さっきから心配しすぎよ」

「す、すみません」

俺は頭を軽く下げて謝ると、軽く頬を膨らませていた姫様が面白そうに笑っていた。

姫様、マジで可愛いです。

「別に怒ってないわよ。 それより、お腹が減ったし早く行きましょ？」

「は、はい……！」

危うく緩んでだらしない顔にならないように気を付けながら、姫様が退屈しないようお話をしながら竹林を並んで歩いていた。

そして、あと人間の里まであと少しと言う所で……カメラのシャッ

ター音が聞こえた。

嫌な予感を感じて急いでシャッター音がした方を振り向くと……この状況で最も会って欲しくない妖怪がニヤニヤしながら空を飛んでいた。

「やっぱり射命丸かよっ……!!」

「あや？ なに睨んでるんですか？ 私に構わずデートを続けてくださいな」

ヤバい、実にヤバい。

「あら、文屋さんじゃない」と、いつものように挨拶をしている姫様の隣で……俺は冷や汗を流していた。

あの天狗に絡まれたら最後、取材と言う名の尋問を受け続け、挙げ句の果てに新聞の記事にされるんだ。

そんな事をされたら、日が暮れてお忍び計画が失敗してしまうし、なにより師匠にバレてお仕置きされる!!

「もう、そんなに睨まなくても大丈夫ですよ。私はデートの邪魔をするような無粋な天狗ではないんです！ ただ影でコツソリと撮影してでっち上げで記事にする……きゃあ!？」

得意気に話す射命丸に軽くキレた俺は、即座に弓を創り出して射命丸のカメラを狙って矢を放っていた。

「……………ちっ、外したか」

まだまだ修行が足りないな、師匠なら絶対に外さなかっただろうし。もう一度、矢を創り出して構える。

「ちょ……ちょっと待ってくださいよ!! 話し合い、話し合いを

しましろう!!」

「黙れ!! お前なんか生クリームをつけてケーキに飾って食ってやる!!」

「嫌ですよ! そんな、エロエロな状態で死にたくないです!!」
「じゃあ、小豆と一緒に煮込んでおしるこにしてやる!!」

「一気に和風になりましたね! それ以前に、そんな甘ったるい死にかたはイヤですから!!」

俺は、怒りに任せて矢を乱射しているが、全く当たらない。かなり避けるのには慣れてるようだ。

本当に全然当たらねえ、ムカツク。

「……ど、どうやら本気で怒らせちゃったみたいですね。このままじゃ、本当に煮込まれておしるこにされそうなので……退散!!」
「おい、カメラは置いていけよッ……ゴホッゴホッ!!」

俺の咳き込む程の叫びも虚しく、盗撮魔の新聞記者は飛び去ってしまった。

「幽真、そんなに咳き込んで大丈夫?」

息を切らせてげえげえ言っている俺に、姫様が優しく背中をさすってくれた。

その優しさに惚れる、痺れる、憧れるううう!!

「す、すみません……見苦しい所を……」

「良いのよ、取り合えず息を整えなさい?」

「は、はい……」

ま、まあいい……記事にされたとしても今日中に新聞として配られ

る訳じゃない。
師匠に見られる前に新聞を捨てればいいじゃないか。
そう自分に言い聞かせて、怒りを無理矢理静めた。

さて、竹林を抜けて人里に到着した俺は姫様を甘味処へと真っ直ぐ案内した。
前に来た時より繁盛していたが、運良く席が空いたようで、待ち時間無しで店内に入れた。
あんまりの運の良さに逆に嫌な予感を感じていたら……。

「あ、すみません。今、富士あんみつはやってないんですよ」
おそらく今の俺の顔は、テストの回答を一つずつずらして書いてしまった事に気づいた受験生より青ざめているだろう。
かなりぎこちない動きで姫様の方を見ると……。

「あら、そうなの？ それじゃ……普通のアんみつを二つ貰えないかしら？」
「はい、わかりましたー」

店員は注文をメモに書いて、一度軽く頭を下げて立ち去った。
あれだけ楽しみにしていた富士あんみつが無かったのに……姫様は全く動じていなかった。

「あの、姫様……」
「どうしたの？ あっ、勝手に注文しちゃったけど……他のが良か

つた？」

「いえ、全然、あんみつでも大丈夫です！」

「そう？ でもなんでそんな顔をしているの？」

そりゃ、あれだけ楽しみにしてくれて、あれだけ期待してくれていたの……正直、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

「えっと、ごめんなさい、姫様……俺がちゃんと調べて無かったせいで……」

「気にしないでいいわよ。 今日はお忍びでここにこれただけでも十分よ」

姫様はそう言っただけで笑っていた、それにつられるように俺も笑顔が浮かべた。

せっかく姫様が笑顔を見せてくれていたのに、いつまでも落ち込みではいられないだろ？

……そして、姫様の笑顔を眺めたら、せめての罪滅ぼしを思い付いた。

「そうだ、姫様。 今日のお詫びに、すぐとは言えませんが……俺が富士あんみつを再現して作ってみよう……」

「本当！？ 幽真が作ってくれるの！？」

俺の提案に姫様が凄腕で食いついて、顔を近づけてきた。

今、俺と姫様は四人位座れる席に向かい合うように座っている。少し距離があるのだが……それでも顔を近づけて、真剣な様子で確認してきた。

「は、はい！ ぎ、材料的な問題もあるので、すぐには無理ですが……」

姫様の顔が近くにあるせいで、何回か噛み倒しそうになったが、無事に言えた。

「それじゃ、約束ね」

そして、姫様の顔が離れていってしまった……チクショウ、さっきの素晴らしい光景を保存し忘れた。

「ちゃんと約束は守ってね？ 守らなかつたら……そうね」

俺が姫様との約束を死んでも忘れる訳がないのだが、考える仕草が病みつきになるくらい可愛らしいので、考え付くまで待つてみた。

「そうね、ハリセンを飲ませるわ」

……多分、ハリセンポンをハリセンと間違えているのだろう。なぜか、ハリセンを口に押し込まれる妄想をしてしまい、恐怖を感じた。

「えっと、姫様？ ハリセンポンじゃないんですか？」

「針千本？ ダメよ、そんなの飲んだら死んじゃうじゃない」

「……ハリセンも飲み込めば死んじゃいますよ？」

そして、姫様がハリセンを不味い飲み物だと勘違いしていたと言う衝撃かつ可愛らしい事実が発覚したと同時に、あんみつがテーブルに運ばれてきた。

「美味しい〜、たまには外に出るのも良いわね」

取り合えず、あんみつを食べて上機嫌になっている姫様を見て、内心ほっとしていた。

富士あんみつが無いと聞いた時はどうなる事かと思っただが……結果オーライだ、安心してあんみつも姫様の笑顔も味わうとしよう。そして、スプーンに手を手に取り、最初の一口を食べた瞬間に……視界の端に白黒の魔女と紅白の巫女が見えた。

「おつ、あれは……幽真と輝夜じゃないか？」

「輝夜が、外に出てるなんて珍しいわね」

なんだ……俺はあれか？

『知り合いに会いたくない時に限って知り合いに遭遇する』呪いでもかかってるのか？

「席、一緒でいいだろ？」

「もう座ってる奴の言うセリフじゃないだろ」

俺ならまだしも姫様にすら許可を取らずに、魔理沙が俺の隣に座り、霊夢が姫様の隣に座った。

「相席していいでしょ？」

「ええ、私は構わないわ」

たった今、霊夢が姫様に許可を取っていた。あれが相席を頼む態度なのかは疑問だが……まあ、姫様がいいなら良いんだけどさ。

「で、普段は外に出ないお姫様がなんで外に出てるのかしら？」

「今日はお忍びしにきたのよ」

「……はい？」

……姫様、お忍びなんだからそんなに簡単にバラしてはいけませんよ？

心の中で思いつつもなぜか言葉が出なかった。

結局、霊夢と魔理沙に問いつめられて、お忍び計画の事を話すはめになってしまったのだが……。

「ふーん、なるほどねーどうでもいいわ」

自分から聞いたくせに、一切こちらを見ずにみたらし団子を食べながらしゃべっていた。

「つーか、霊夢……よくここに来る金があったな……参拝客なんてこないからお賽銭だつてないだろ？」

「なんか、トゲがあつてムカつくわね……」

軽い仕返しに嫌みを言ったら、妖怪ですら腰を抜かしそんな形相で睨まれが、俺は笑顔で殺人視線を無視した。

「まあいいわ……今日は魔理沙の奢りだもの、お金が無くても大丈夫だわ」

なぜか自分が奢るかの如く誇らしげにしているのが気になるが、面倒なので無視した。

「そうなのか？」

「まあな、賭けに負けたせいだな……」

隣を向くと、どんな負け方をしたのかが気になるくらいの遠い目をしていた。

「まあ、御愁傷様だな」

「うっ……」

聞いてみたい気もするが、そこに触れると面倒な……。

「そうだ、幽真！ 私と賭けをしないか!？」

事が起こりそうだと思っていたら起こりました！。

……これは霊夢に嫌味を言った天罰なのか？

そして数分後には、霊夢と姫様があんみつの大食い対決をしていた。
……なぜ、こうなったかつて？

魔理沙が賭けを提案 俺が拒否する 霊夢が姫様の前で「男らしくないわね」と言う 「そうね、売られた勝負は買うものよ?」「OK、魔理沙賭けの内容はどうする?」

とまあ、簡単に説明するとこんな感じだな。

完全に俺の自業自得だが……しょうがない、姫様に嫌われるよりはマシだ。

ちなみに賭けの内容は「霊夢と姫様、どっちがあんみつを食べられるか」。

平たく言うて大食い対決。

悪く言つと、霊夢が対決と言う名目で遠慮なく食べたいだけ。

「霊夢、食うんだ！ 普段可哀想な位に食べてないんだからもつと食え！ 冬眠する熊の如く！！」

「魔理沙、後で覚悟しなさい。 おかわり！」

「えっと……無茶はせずに頑張ってくださいね！ いや、本当にお腹とか壊さないでくださいね？」

「大丈夫よ。 月人の力を見せてあげるわ」

「……大食いに月の力は関係してるんですか？」

ちなみに、分かりきつていると思つて……霊夢の勝ちに魔理沙が賭けて、俺は姫様の勝ちに賭けた。

正直、賭けに負けて全額払うより……姫様が食べ過ぎで体調を崩さないか心配だった。

さて、霊夢と姫様の大吃い対決は観客が出来るほどに盛り上がったが……結果は引き分けに終わった。

と、言うわけで俺と魔理沙の割り勘になるはずだったのだが……。魔理沙が、涙目になりながら財布を取りだし、中身を確認していた。

「あーあ……私だつてそんなに裕福じゃないのに……」

俺は合計金額が書かれた、伝票を手に取り目を通した。

……ふむ、ギリギリ払える値段だな。

「魔理沙、ここは俺が一人で払つておく」

「ほ、本当か！？」

「ああ、あの時に送ってくれたお礼だ」

魔理沙のキラキラした視線に少し照れるが、笑顔で答える。
それに、たまには、男らしい事もしたいしな。

「サンキュー！ いやあ、幽真が初めて男らしいと思ったぜ！」

「は……初めて？」

つまり、俺は今まで男らしいとは思われていなかったのか……。
喜ぶ魔理沙を他所に、俺は苦笑いしか出なかった。

「それじゃな、幽真」

「うっぷ……なんか出そう……」

「ああ、それじゃな。 霊夢は任せたぞ？」

「任せろ、お前も頑張れよな」

魔理沙が食べ過ぎで動けない霊夢に肩をかして帰っていった。
さて、魔理沙が何に対して頑張れと言ったのかと言うと……。

「うっ、なにか産まれそうだわ……」

俺の隣で、食べ過ぎでフラフラしている姫様の事だろう。
……あと、産まれそう発言になぜかビビった俺であった。

「だから、あれほど無茶はしないでくださいと……」

「小言は後で聞いわ……幽真、おぶって頂戴……」

「はっ、はい！……」

「姫様、具合は如何ですか？」

「ええ、楽になったわ。でも……惜しかったわ、もう少しで勝てると思ったのに」

「……あははっ」

そんな事もあり、俺は姫様をおんぶしながら、夕暮れの迷いの竹林をあるいていた。

「えっと、乗り心地は如何ですか？」

言っておくが、良い匂いがするなーとか、体が柔らかくてそんな柔らかな抱き枕が欲しい……とか、いつその事……とか考えたり、なぜか懐かしい感じとかもしたが、一切イヤらしい気持ちなんて抱いてないからな！

「ええ、快適よ。でもオイタはしちやだめよ？」

「しっ、しませんよ」

「本当にい？」

少しだけ振り向くと、可愛らしくイタズラっ娘のような笑顔を浮かべている。

鼻血が出そうになったので……大急ぎで俺は前を向き直した。

「したら、永琳に言いつけるからね？」

「……肝に命じときます」

第二十一話、お忍び計画当日（後書き）

どうだったでしょうか？

ちなみに、次回は第二十一話の番外編を書こうと思っています。

久しぶり過ぎて色々と不安なので、よろしければ感想や指摘を願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470w/>

東方 永葉抄 ~俺の主は月の姫~

2012年1月1日02時46分発行